

3.500 一般(社) 河原書店 52.2.26

地域研究第19集



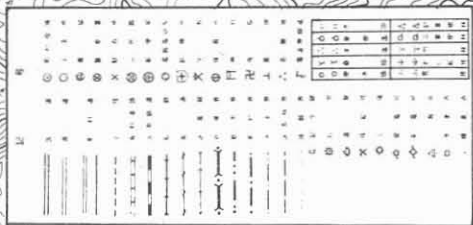
中国山地の村

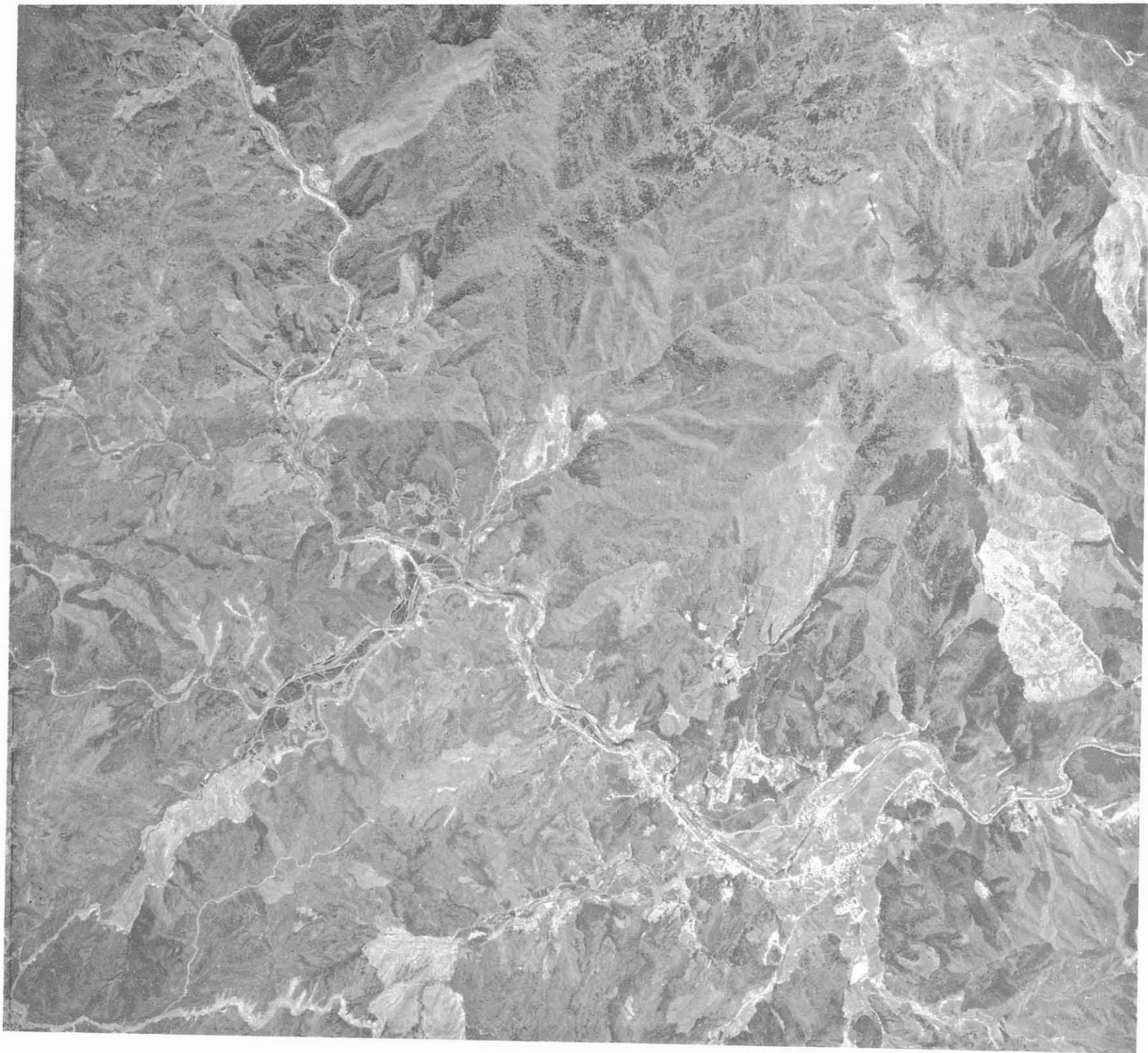
— 岡山県苫田郡上斉原村 —

361.48
C

岡山大学教育学部社会科教室内地域研究会

ソ-4044







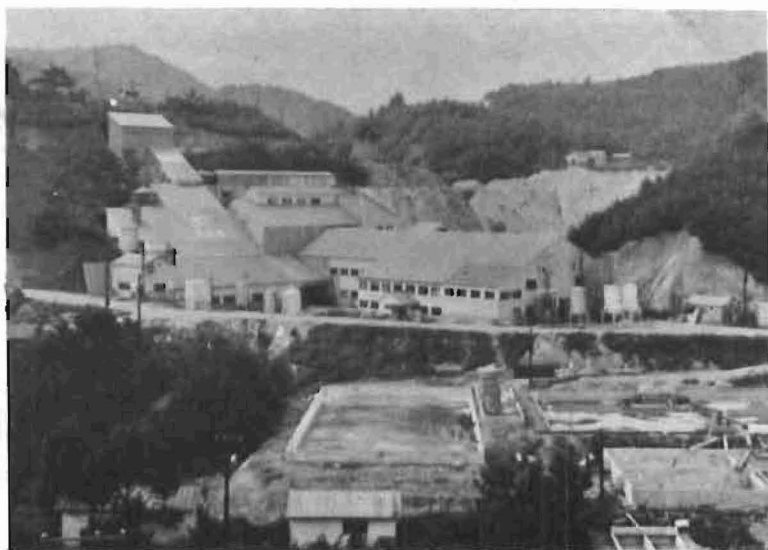
上齊原村国道一七九号線
(昭和45・6月写)



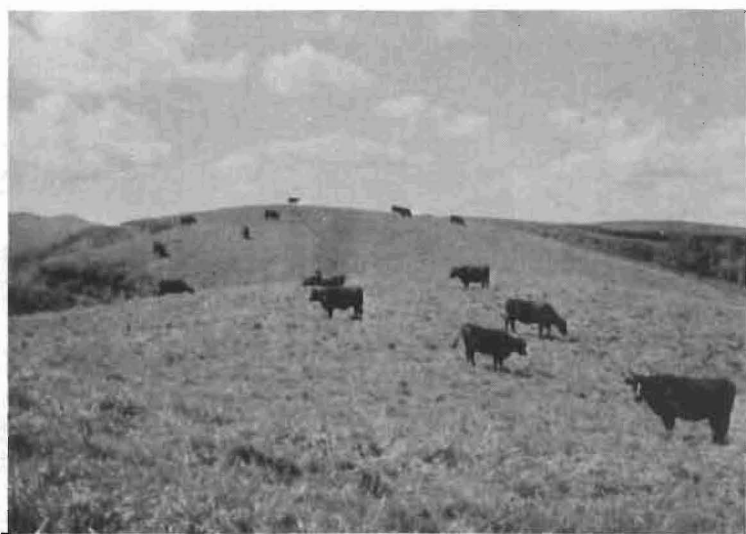
上齊原村役場(中央)と
生活改善センター(左)



上齊原村小学校
(本校)



動力炉・核燃料開発事業団
人形峠鉱業所、製錬所



恩原牧場



恩原貯水池

国民宿舍白雲閣



岩崎谷スキー場



岡山県森林公園





村営人形峠レストハウス



近世封建時代の上層農氏住宅
様式を伝える民家
(母屋・長屋・土蔵)
(昭和49・7・写)



鉄山稼議定証文 天保5(1834)年 (上斉原村田淵仁亀夫氏所蔵)

は し が き

岡山大学教育学部社会科教室内地域研究会第19集報告書として、「中国山地の村—岡山県苫田郡上斎原村—」を公刊する。

調査の対象地域である岡山県苫田郡上斎原村は、東は苫田郡加茂町と鳥取県八頭郡佐治町に、西は苫田郡奥津町に、南は奥津町と鏡野町に、北は鳥取県東伯郡三朝町にそれぞれ境を接している。中国山脈の南面に位置する村だけに人形仙（標高1,004m）、霧ヶ峰（同1,079m）、三ヶ上山（同1,035）、花知山（同1,247m）などの高山が四方にそびえ、北の県境に高清水高原、村内東北部に恩原高原が平闊な地形を広げており、吉井川とその源流である各支流（恩原川、速藤川、中津河川、赤和瀬川、池河川、木路川、人形仙川、湯の谷川）に沿って大小の集落が散在している。

村の開拓は農耕、鉄山稼、木地挽業の3集団によって行なわれ、農耕集団は主として本村、石越、大木山、天王のような川沿いの盆地を開墾して耕作に努め、鉄山稼の集団は砂鉄の所在地を求めて坊主原、人形仙、池河、輪南原、速藤に工場を移転し、速藤を最後に明治末期まで活動が続いた。木地挽業の集団は赤和瀬、中津河、小林、恩原など溪流に沿う利便の地を追って明治中期までの業に従事し、副業に耕作もしていたが、その後次第にその業衰えて、現在では全く姿を消してしまった。

上斎原村は往時富庄中の1村であった。「作陽誌」に租税307石6斗、戸数102、人数579人と記されている。森氏除封後、元禄11年に津山藩主松平家の所領となったが、享保12年の減封により幕府直属の地となり、維新当時は幕府領津山藩預りになっていた。明治22年6月村制を施行して上斎原村となり、村役場を字本村に置く。同年幅4mの地方道（現在の国道179号線の前身）が開通し、美作・伯耆交通に新時代を迎え、大正14年には県道に認定された。その後中国合同電気（現在の中国電力の前身の1つ）の平作原発電所が昭和3年2月に運転開始、恩原貯水池が同年5月に竣工、さらに上斎原（樽原）発電所が昭和5年7月に運転開始した。第2次世界大戦後昭和30年11月になると人形峠にウラン鉱が発見され、昭和32年8月には原子燃料公社人形峠出張所（動力炉・核燃料開発事業団人形峠鉱業所の前身）が開設され、昭和34年5月から採鉱試験が開始された。従来の県道は昭和38年に国道179号線に昇格し、交通の便は一層改善されることとなった。しかし、昭和30年代後半からのわが国経済の高度成長のなかで、従来より農林業を主要な産業としてきた当村においても都市周辺への就職による人口流出がみられるように

なり、人口は年ごとに減少傾向をたどり、最近では過疎化現象を呈し、しかも残留村民は、農林業の低生産性のもとでの農林家所得を、日雇などの不安定な兼業によって補っている。上斎原村では、このような過疎化の進行過程で人口の減少を食い止めるべく、林業・畜産・観光を行政の3本柱とし、「恵まれた自然を農林業と観光に活かし、健康で明るい豊かな村」の建設に努めている。

当地域研究会は、岡山県の最北端に位置するこの山村が、いかなる歴史的過程を経て今日にいたり、新たな時代にいかに対応し変貌しつつあるかを歴史・地理・産業経済・社会・教育・文化の諸分野から総合的に明らかにしたいと願った。調査は昭和49年7月25日から29日までの5日間を本調査とし、教官8名、教室所属3年次学生全員34名、それに卒業生有志6名の応援を得てこれに当たった。こうして資料の調査と収集を終え、執筆・編集の段階にいたった昭和50年2月7日、これまで精力的に指導に当たってこられた藤沢晋教授（日本史担当）が、突然ご逝去され、当初の刊行予定から大幅に遅れることとなったものの、ようやくここに発刊の運びになったことは故藤沢教授にも喜んでいただけるものと思う。しかし、調査経験の浅い3年次学生が調査の主体であったことなどから、不備な点も多々あることと考えられる。この点おゆるしを願いたい。ともあれこのささやかな研究労作が公刊できたのは、炎暑をものともせず、学ぼうとして昼夜頑張った学生諸君の努力もさることながら、調査を通して終始暖かいご協力をいただいた村長、教育長をはじめとする役場、教育委員会、農協、商工会、学校、村民の各位のお蔭である。心から厚くお礼申しあげる次第である。

発 刊 に よ せ て

上齊原村長 三 船 続 昌

昭和49年7月より2年余の歳月をかけ、関係者の一方ならぬご努力により、ここに「中国山地の村ー岡山県苫田郡上齊原村ー」が発刊の運びになりましたことは喜びに堪えません。関係者に対し衷心より謝意を表するものであります。

わが上齊原村は古くから陰陽連絡の要所として栄えてまいりました。殊に千古の原始林ときじ師、砂鉄の採取等から現在の林業、畜産、観光等への移り変わりが、本書を通じて広く村民各位に紹介されることになり、郷土に対する認識と愛情が深まり、私たちの村の伝統と歴史および現状を十分理解することによって将来の発展に資することができると思います。

このような意味において、本書がより多くのかたがたに愛読され、健康で豊かな郷土を築く心の糧ともなれば幸いと願うものでありまして、関係者各位のご協力に感謝し発刊によせることばいたします。

調 査 参 加 者

参加指導教官

藤 沢 晋	虫 明 机	三 浦 道三郎
米 村 昭 二	高 重 進	高 橋 達 郎
田 中 史 郎	宗 田 克 己	

参加卒業生

森 元 辰 昭	在 間 宜 久	中 野 美智子
平 方 英 子	井 上 八重子	岩 城 宏 子

参加学 生

三 宅 隆	中 島 玲 子	西 山 ひとみ
井 上 悦 子	鈴 木 澄 子	難 波 保 夫
藤 井 伸 哉	加 藤 百 合子	田 村 啓 介
福 間 美智子	横 田 輝 子	三 宅 日 出彦
治 郎 丸 彰 子	山 本 由美子	生 本 季 太郎
藤 沢 永 三	片 岡 晃	奥 田 充 代
大 崎 陽 二	宇 都 宮 瑞 恵	山 崎 明 子
永 守 須 美子	藤 原 真 佐枝	浜 田 久 枝
国 田 倫 子	松 原 恵 子	難 波 英 里
南 石 和 子	池 田 裕 子	福 森 敦 子
西 原 英 子	藤 井 洋 子	湯 浅 美智子
国 定 節 子		

中国山地の村 — 上斎原村 — 目次

第1章 自然環境	1
1 上斎原村の地形・地質	1
2 気候—恩原観測所のデータ	12
第2章 人口と集落	17
1 人口構成と人口移動	17
2 過疎化集落	34
第3章 古代・中世の上斎原	42
1 富 庄	42
2 戦国期の争乱	51
第4章 近世の上斎原	53
1 領主の系譜	53
2 支配の組織と内容	61
3 村高と年貢	68
4 農民の生活	90
5 農民住宅	117
6 山地産業	136
(1) タタラ製鉄	136
(2) 木地師の生活	166
第5章 交通と通信	176
1 近代の交通	176
2 郵便と電信	195

第6章 経済構造	201
1 農業の発展	201
(イ) 農業生産力の発展	201
(ロ) 農民層の分解	210
2 農業構造	219
(イ) 土地利用の変化と農地転用	219
(ロ) 土地所有権の移転と農業経営の変化	222
(ハ) 労働力の変化と兼業化	226
(ニ) 養蚕の盛衰	232
(ホ) 畜産の動向	238
3 林業	245
(イ) 山林原野の存在形態と歴史的発展過程	245
(ロ) 林産物の生産とその変遷	254
(ハ) 森林組合	258
4 鉱工業	262
(イ) 鉱業	262
(ロ) 工業	267
5 商業	273
(イ) 商業の推移と現況	273
(ロ) 上斎原村とその商圈	288
(ハ) 上斎原村と観光	311
(ニ) 商工会の活動	321
6 上斎原村と水力発電	335
第7章 社会構造	345
1 調査地の概況	345
2 組と村落	347
3 家族構成	350

4 同族と親族	374
5 上斎原農業協同組合	417

第8章 宗教と民俗 432

1 神社	432
2 年中行事	440
3 民家	455
4 名所旧跡と伝説	466

第9章 教育 476

1 近代小学校教育の成立と発展	476
2 実業補習教育の成立と展開	498
3 「新制」中学校の成立と発展	510
4 社会教育の展開	520

以上

第 1 章 自 然 環 境

1 上斎原村の地形・地質

(1) 地形・地質の概観

人形峠から、明るい林間の山道をあえぎあえぎ登ると、芝生と疎らな林が広がる。そこに泉がある。高清水高原である。さらに山道をたどって、標高976mの山頂に達する。県境をなす標高1,000m内外の山嶺が東西に連ってのびる。南を俯瞰すると、県境の峰々から枝分かれした稜線は次第に低

められ、谷によって

刻みこまれ、吉井川

の河谷にむかって下

っていく。左手かな

たに望まれる高原状

山地は恩原高原であ

ろう。吉井川の谷を

へだてて再び山々が

重なり、そのかなた

に花知仙、三十人ヶ

仙をはじめとする1,

000mを越す山嶺

が東西に連なり、屏

風のように南を限る。



写真1-1-1 高清水高原山頂面

上斎原村の全貌は一望のうちにある。ふりかえると、山陰の山々がうねり続き、はるかに日本海がcaすむ。

上斎原村は、中国脊梁山地の内に位置する山村である。面積89km²、うち山林原野が98%を占める。最高所は1,253m(三国山)、最低所は440m程度(吉井川の谷)。周縁は1,000~1,200mの山嶺であり、中央に向って次第に低くなる。高度区分別の面積比は、おおまかに計算すると、1,000m以上約15%、800~1,000m約35%、600~800m約39%、600m以下約11%である。

行政区域からみると、岡山県の最北端に位置し、北の村界は鳥取県との県境となる。村域は大雑把にいえば三角形で、南辺は岡山県奥津町と鏡野町とに、東辺は岡山県加茂町と鳥取県佐治町とに、北西辺は鳥取県三朝町に接する。県境は中国脊梁山地の分水界と一致している。

中国脊梁山地ではそれ自体が北偏しているのみならず、分水嶺もまた、中国脊梁山地内で北偏している。その北偏の仕方は一様でなく、かなりジグザグ状に入りこんでいる。岡山・鳥取県境では、蒜

目次

5 1.6.1

1	概 要 居 数	
2	潮 草 種 合 計	
3	種 別 別 数	
4	種 別 別 数	
5	種 別 別 数	
6	種 別 別 数	
7	種 別 別 数	
8	種 別 別 数	
9	種 別 別 数	
10	種 別 別 数	
11	種 別 別 数	
12	種 別 別 数	
13	種 別 別 数	
14	種 別 別 数	
15	種 別 別 数	
16	種 別 別 数	
17	種 別 別 数	
18	種 別 別 数	
19	種 別 別 数	
20	種 別 別 数	
21	種 別 別 数	
22	種 別 別 数	
23	種 別 別 数	
24	種 別 別 数	
25	種 別 別 数	
26	種 別 別 数	
27	種 別 別 数	
28	種 別 別 数	
29	種 別 別 数	
30	種 別 別 数	
31	種 別 別 数	
32	種 別 別 数	
33	種 別 別 数	
34	種 別 別 数	
35	種 別 別 数	
36	種 別 別 数	
37	種 別 別 数	
38	種 別 別 数	
39	種 別 別 数	
40	種 別 別 数	
41	種 別 別 数	
42	種 別 別 数	
43	種 別 別 数	
44	種 別 別 数	
45	種 別 別 数	
46	種 別 別 数	
47	種 別 別 数	
48	種 別 別 数	
49	種 別 別 数	
50	種 別 別 数	
51	種 別 別 数	
52	種 別 別 数	
53	種 別 別 数	
54	種 別 別 数	
55	種 別 別 数	
56	種 別 別 数	
57	種 別 別 数	
58	種 別 別 数	
59	種 別 別 数	
60	種 別 別 数	
61	種 別 別 数	
62	種 別 別 数	
63	種 別 別 数	
64	種 別 別 数	
65	種 別 別 数	
66	種 別 別 数	
67	種 別 別 数	
68	種 別 別 数	
69	種 別 別 数	
70	種 別 別 数	
71	種 別 別 数	
72	種 別 別 数	
73	種 別 別 数	
74	種 別 別 数	
75	種 別 別 数	
76	種 別 別 数	
77	種 別 別 数	
78	種 別 別 数	
79	種 別 別 数	
80	種 別 別 数	
81	種 別 別 数	
82	種 別 別 数	
83	種 別 別 数	
84	種 別 別 数	
85	種 別 別 数	
86	種 別 別 数	
87	種 別 別 数	
88	種 別 別 数	
89	種 別 別 数	
90	種 別 別 数	
91	種 別 別 数	
92	種 別 別 数	
93	種 別 別 数	
94	種 別 別 数	
95	種 別 別 数	
96	種 別 別 数	
97	種 別 別 数	
98	種 別 別 数	
99	種 別 別 数	
100	種 別 別 数	

頁

5

6

7

9

1

5

6

1

5

6

1

2

2

3

5

2

3

5

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

埋谷切断面図 埋谷500mの谷を埋めたもの、等高線間隔は100m毎、点線は河川)

図1-1-1 埋谷切断面図

K:上高原集落 N:人形峠 S:三ヶ土原 U:湯岳
H:花知仙 Np:人形峠 S:三ヶ土原 U:湯岳
T:天狗岩 Np:人形峠 S:三ヶ土原 U:湯岳

(その他概は他局所貸空室を計上した)

「鳥取北部・南部」(村山正郎・一色直記・坂本 亨, 1963)に詳細に記載されている。それらを要約すると以下のようである。

本村域の地質は、生成時代の古いものから、(1)三郡変成岩類、(2)後期中生代火山岩類、(3)後期中生代進入岩類、(4)鮮新世初期(あるいは中新世末期)の人形峠層、(5)鮮新世火山岩類、および(6)第四紀河岸段丘堆積層および沖積層から構成されている。これらの地質関係を表1-1-1に示す。また地質概略図を図1-1-2に示す。

本村の大半の地域は、中生代進入岩類によって構成されている。この附近の進入岩は大別して3期に分けられるが、本村では、比較的小さな岩体(文象斑岩・花崗斑岩など)として点在する第1期のものを除いて、第2期に進入した、中粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩、粗粒角閃石黒雲母花崗岩、中粒黒雲母花崗岩などで、底盤状に広がっている。本村域で最古の岩層は三郡変成岩類で、奥津町との境界に沿い、吉井川の両岸に約0.5×1.5 kmの小岩体として露出するものと恩原の北西に分布するものがある。古生代後期の地向斜堆積物が低温、高压の条件下で広域変成作用をうけて生成したものであり、北九州から中国地方東部にまで広い範囲にわたって分布するもので、本地域のそれは砂岩と粘板岩の互層よりなり、中生代花崗岩類の貫入をうけホルンフェスル化している。

後期中生代火山岩類は人形峠以西の泉境山地を構成するものと、小岩体として点在するものがある。湯岳は後者に属する。安山岩および同火山碎屑岩を主体としている。

人形峠層は、人形峠を模式地として命名された鮮新世初期(あるいは中新世末期)の陸成堆積層であり、前述の後期中生代の花崗岩類を基盤として、その上に東西方向にのびる狭長な分布を示している。この堆積当初には、いわゆる中国華平原はすでにかなりの程度まで開析され、華平原面上には比較的緩やかな河谷地形が発達し、人形峠より恩原を経て辰己峠にいたる旧河谷を埋めて堆積したものが人形峠層であり、模式地では下位から上位へ、含ウラン基底礫岩層(厚さ2~3 m)、泥岩砂岩互層(厚さ10 m)、砂岩礫岩泥岩互層(厚さ50 m土)であり、その上に鮮新世火山岩類が整合的に被覆している。辰己峠付近では泥岩が著しく卓越するようになる。珪藻土も含まれる。従って静水域的な環境の時代があったと推察される。

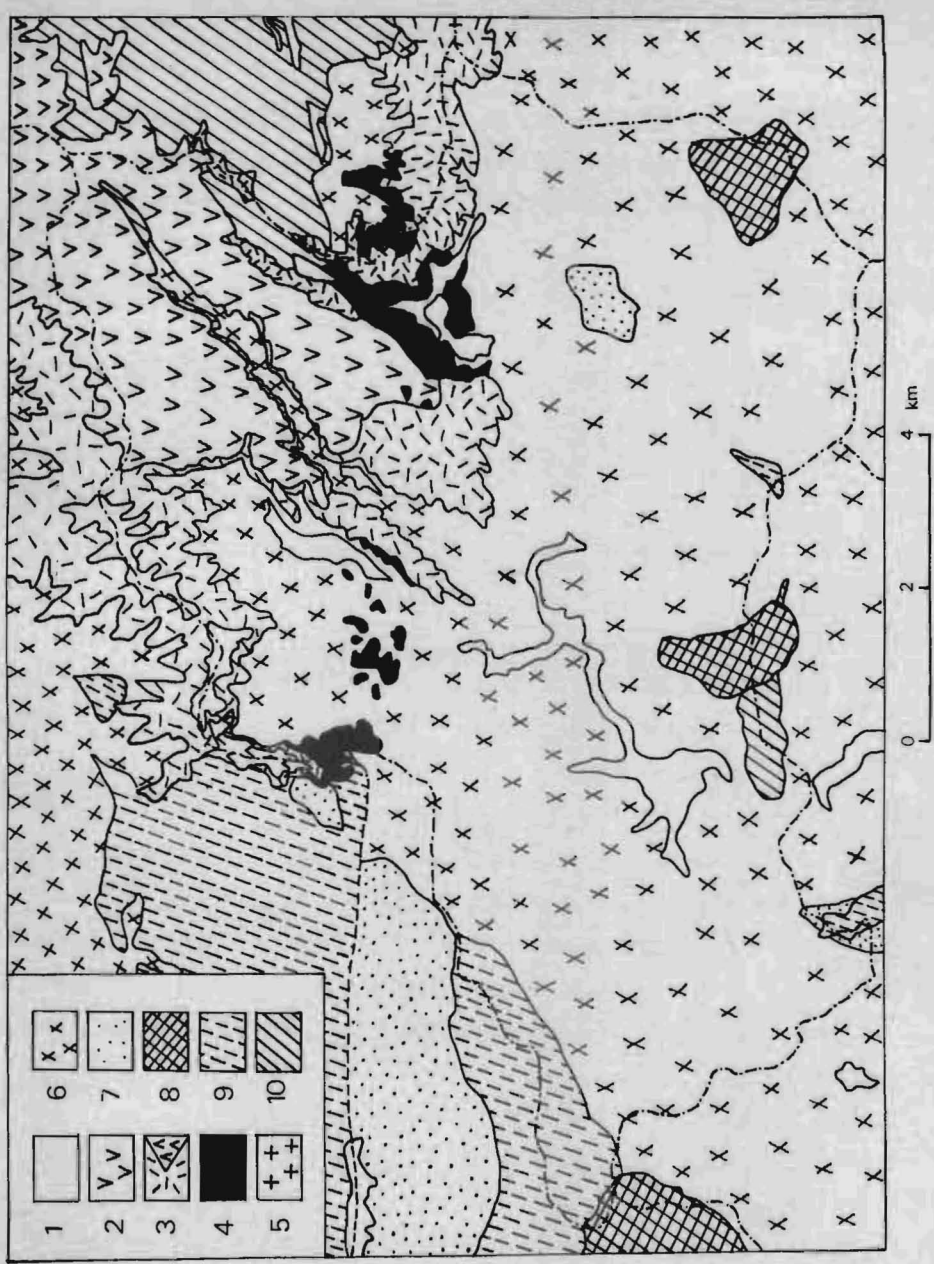
人形峠層中のウラン鉱床は、1955年地質調査所の放射能探査で強い放射能異常が検出されたことに端を発し、花崗岩を不整合に覆う礫岩中に燐灰ウラン石が発見され、日本最初の水成ウラン鉱床として注目を浴びた。1957年原子燃料公社が人形峠出張所を開設して探鉱をはじめ、1959年度から試験採掘が開始された。

鮮新世火山岩類は、三国山を頂点として、泉境に沿って高清水高原へ、または赤和瀬と中津河との間の峰へ、恩原高原へと伸びる分布を示している。主として花崗岩類を不整合に覆うが、一部は人形峠層の上に整合的に重なっている。下半部は安山岩質の凝灰角礫岩(丹戸凝灰角礫岩類)、その中に普通輝石かんらん石玄武岩熔岩と凝灰角礫岩(高清水玄武岩類)を挟んでいる。上半部は輝石角閃石安山岩の熔岩(中津河安山岩類)である。

なお、沖積層の地域を除くほとんどの地域にわたって、軽石層・火山灰層が存在する。これらは大山火山噴出物と推定されている。(高橋達郎・三宅 隆)

図 1-1-2 地質概略図
 地質調査所 5 万分の 1
 地質図幅「奥津」「智頭」
 「倉吉」「鳥取南部」より
 編集した

1. 沖積層
2. 中津河安山岩類
3. 丹戸凝灰角礫岩類
 (高清水玄武岩類を含む)
4. 人形峠層
5. 中生代進入岩類第 3 期
 (黒雲母花崗岩)
6. 中生代進入岩類第 2 期
 (黒雲母花崗岩)
 (黒雲母閃綠岩)
7. 中生代進入岩類第 1 期
 (閃綠岩・花崗岩など)
8. 中生代進入岩類第 1 期
 (はんれい岩)
9. 中生代火山岩類
10. 変成古生層



参考・引用文献

- 山田直利(1961): 5万分の1地質図幅「奥津」および同説明書, 地質調査所
山田直利(1966): 5万分の1地質図幅「智頭」および同説明書, 地質調査所
村山正郎・大沢 濃(1961): 5万分の1地質図幅「青谷・倉吉」および同説明書, 地質調査所
村山正郎・一色直記・坂本 亨(1963): 5万分の1地質図幅「鳥取北部・南部」および同説明書, 地質調査所
高橋達郎他(1973~75): 岡山県の地形計測とその結果からみた地形の特色(1)~(4), 岡山大学教育学部研究集録 35, 38, 40, 43

(2) 山地小起伏面

本地域の山地には、いくつかの小起伏面が認められる。山地小起伏面の区分と対比のためには、綿密な調査と、より広域にわたる追究とが必要であるが、いまのところ十分な調査は行っていない。しかし、小起伏面の分布高度を区分の主な基準として、一応の区分を試みると、(イ)1000m面群 (ロ)800m面群 (ハ)600m面群 の3群になる。おのおのについて以下で述べる。

なお、豊島吉則(1974)によって、本地域の東部から佐治谷を中心とする地域については、地形面区分が試みられている。

(イ) 1000m面群

標高900mから1100mの範囲に存在する小起伏面を一括した。それらは、構成岩と面の成因とに応じて、さらに2種の面に区分できる。1つは中生代火山岩類もしくは中生代花崗岩類を切る侵蝕小起伏面である。人形仙を東端とし県境を南西に田代峠をへて津黒山にのびる侵蝕小起伏面、花知仙周辺の侵蝕小起伏面および三十人仙・天狗岩東方の侵蝕小起伏面などがそれである。いずれも900-1100mの水準に拡がっている。いわゆる中国脊梁山地面ともいえるべきもので、西村嘉助(1963)の道後山面に相当し、中新世以前に準平原として形成されたものと見るのが妥当と考える。本地域においても中新世以降の堆積物(人形峠層)がこの面を刻む侵蝕谷に堆積しているという事実は、その考えを支持する証拠である。花知仙(1247m)、天狗岩(1197m)などは、準平原上にわずかな高まりとして残丘状に存在したものであろう。

以上の侵蝕小起伏面とほとんど同高であるが、その形成の要因や時期の異なる小起伏面が存在する。三国山から県境を西に高清水高原山頂付近までにかけて連なる小起伏面と、三国山から南西に恩原高原スキー場面(900m以上)にのびる小起伏面などである。その標高は900mから1100m前後である。構成岩は安山岩もしくは玄武岩よりなる。これらの火山岩は中生代花崗岩類を不整合に、一部鮮新世人形峠層を整合的に覆う火山岩類の上部をなすものであり、鮮新世の噴出と推定されている。これら熔岩よりなる台地状の小起伏面は、前述の小起伏面とは異種のもので、山田直利(1961, 66)の指摘するように、黒岩高原・五輪原高原などと同じく、一種のメサといってよからう。

人形峠層の基底は、山田(1961, 66)によれば人形峠で720m、辰己峠で670-680

mで、西から東へ向う河谷状であるという。その方向は佐治谷の方向にほとんど協和的であり、人形峠層の分布は佐治谷の谷頭部分にまで及んでいるので、1000m面（中国脊梁山地）が深く下刻され、その谷に人形峠層の堆積した当時の河谷は、佐治谷の方向にのび、山陰側水系に属していたと考える可能性がある。しかし人形峠層に対応する下流の堆積層の存否はわからない。現在の水系の方向がこの旧河谷と全く異っている理由、また、もしこの旧河谷が山陰側水系であったとして、その地域の山陽側水系への編入された理由としては、当然三国山を中心とする鮮新世火山岩類の噴出に求められる。

(ロ) 800m面群

標高700mから900mの間にひろがる小起伏面を一括する。人形仙の東に一段低く800m前後に広がる小起伏面（人形仙牧場面）、高清水高原山頂小起伏面の下に800-850m程度の緩傾斜面（高清水高原スキー場面）、池河と赤和瀬間の小起伏面（池河牧場面）、恩原貯水池の周辺に800m前後から900mまでの高さにひろがる高原面（恩原高原牧場面）などである。これらの面は、中生代花崗岩類、新第三系の人形峠層および丹戸凝灰角礫岩類を削剝した小起伏面であるが、新第三系の削剝の様相には地域差があるようで、すべてを同様な侵蝕面として一括できるかは疑問である。面の高度も2つ以上のレベルに区分されそうである。しかし、いまのところ精査が進んでいないので、ひとまとめにしておく。ただし、豊島吉則（1974）は、佐治谷付近の地形面区分で、この高さの平坦面を三原高原面（800-900m）と人形峠面（700-800m）の2つに識別した。前者には人形仙牧場面・高清水高原スキー場面が、後者には池河牧場面・恩原高原牧場面が含まれる。

中国山地の形成過程に関して、吉川虎雄ら（1973）は、太田川上流部で800m以内の高さを示す八幡高原にひろがる侵蝕小起伏面を八幡高原面と呼び、中新統堆積後中国脊梁山地に深く入りこんだ谷にそって形成された侵蝕面とみた。ただし、吉備高原面との関係については、同時異高とする考えと、異時のものとする考え方と2つの可能性を並記している。本地域の800m面群は、高度や面の配置の順序からみて、八幡高原面相当ないしはそれと近似のものと見なせよう。800m前後の侵蝕小起伏面については、かつてはほとんど注目されなかったが、広島県内の中国脊梁山地でしばしば見出されることを、藤原健蔵（1976）も指摘している。ただし、藤原はこれらを吉備高原面の高位面に対応するものとみている。

(ハ) 600m面群

600-700mにある侵蝕小起伏面で、上斎原集落の周辺に丘陵状に分布する。三ヶ上原や岩崎谷牧場の面などである。中生代花崗岩類を削剝した侵蝕面である。豊島（1974）は、人形峠面より一段低い侵蝕平坦面を津無高原面と呼び、より高位の地形を切り、入り組んで発達する新しい侵蝕面とし、吉備高原面相当のものとみた。そして本地域の三ヶ上原を、津無高原面に対比している。

以上、本地域の山地小起伏面についてのべたが、中国山地の地形発達史のなかでの、それらの位置づけについては、なお今後の研究に残されている。

（高橋達郎）

参考文献

- 豊島吉則(1974):佐治谷を中心とした東中国山地の地形,東中国山地自然環境調査報告
PP. 11-16
- 西村嘉助(1963):Chugoku Mountains as a staircase morphology,
Sci. Rept. Tohoku Univ., Ser. 7 (Geogr.), 12, 1-19.
- 山田直利(1961, 66):5万分の1地質図幅および同説明書「奥津」,「智頭」地質調査
所
- 吉川虎雄・杉村新・貝塚爽平・太田陽子・阪口 豊(1973):日本地形論
- 藤原健蔵(1976):広島県の地形特性とその形成過程(印刷中)

(3) 河岸段丘

吉井川に沿って,
本村域ではほぼ2段
の河岸段丘が発達し
ている。河谷の平坦
面は、ほとんどが段
丘面をそれをおおう
崖錐・扇状地とより
なる。上斎原・寺ヶ
原の集落付近で、段
丘面は最も幅広い。
段丘の基盤は花崗岩
であり、その上に薄
い砂礫層がのる侵蝕
段丘である。上位の



写真1-1-2 上斎原集落付近の河岸段丘

段丘面は河床より3-8 mの比高で、山際では扇状地や崖錐がのる。水がかりが良いので、多くは水田として利用されている。中心集落上斎原はこの段丘面にのり、村役場や生活改善センターなどが置かれている。下位の段丘面は、上位のものを切り込んで、河床より1-2 mの比高をもち、段丘面はほとんど水田として利用されている。寺ヶ原集落の大部分はここに立地する。

水利のよいこの段丘面の土地利用は専ら水田であったが、最近では高冷地という地理的条件を生かした長期冷蔵抑制イチゴの栽培などの計画が進められ、畑作による収益をもあげようと試みられている。

(4) 鉄穴(かん)地形

中国山地はかつてたたら鉄の産地であった。花崗岩・閃緑岩が風化し真砂化したものから磁鉄鉱い

わゆる砂鉄を採取し、それを原料として鉄を生産していた。鉄穴流しとは、風化花崗岩・風化閃緑岩などを切崩し、水路をひいてその水で真砂を水洗いし、砂鉄を沈澱させる簡単な比重選鉱のことである。花崗岩の深層風化は、地形的にみると剝離的な侵蝕が働かなくなり、侵蝕速度のおそい、あるいは平衡に達した緩かな山地斜面に多くみられ、その深さはしばしば数10 mに達するといわれる。この風化花崗岩の山地の切崩しは手掘りによって行われた。風化したやわらかいところが削り取られ、風化のおくれた堅い岩石の部分だけが取り残された。こうして長年



写真1-1-3 鉄穴地形



写真1-1-4 鉄穴地形

にわたる“切崩採取”のため、山はその形をまったく変え、不自然な形を呈するに至る。これを鉄穴地形とよぶ。鉄穴地形は花崗岩が広く存在する中国山地のいたるところでみられ、比較的容易に判別できる人工地形である。上斎原村でも人形仙峠、小林谷、連藤部落の梅の木と杉古屋などに明瞭な鉄穴地形がみられる。

鉄穴流しによって放流された砂は川に流れ込み、短期間のうちに河床は高くなり、谷は埋積される。そこで谷に柵をつくって砂を堰止めるとともに、その埋立地を水田とした。しかし、そうはしても下流では流砂によって河床は高められ、出水時にはたえず危険にさらされ、被害をこうむった。時には

訴訟となったこともある。

こうみると、たたら製鉄は主として近世において、山地のみならず平野にまで自然の人工改変をもたらした産業といえる。

参考文献

宗田克己(1474):高梁川

———(1475):吉井川

(5) 露頭の観察

上斎原村内のいくつかの露頭について観察したので、その層序を記載する。

④ 人形峠から国道179号線沿いに約1km南に下ったところの露頭(写真1-1-5)

- ① 黒色火山灰層
- ② 黄褐色火山灰層
- ③ 褐色風化軽石層
- ④ 茶褐色粘土層
- ⑤ 褐色風化軽石層
- ⑥ 茶褐色粘土層
- ⑦ 褐色風化軽石層
- ⑧ 花崗岩

花崗岩を不整合におおう軽石層・火山灰層は大山起源と思われる。②,③にはクラックが認められる。③に著しい。

⑤ 人形峠より核燃料開発事業団の方へ300mのところの露頭(写真1-1-6)



写真1-1-5

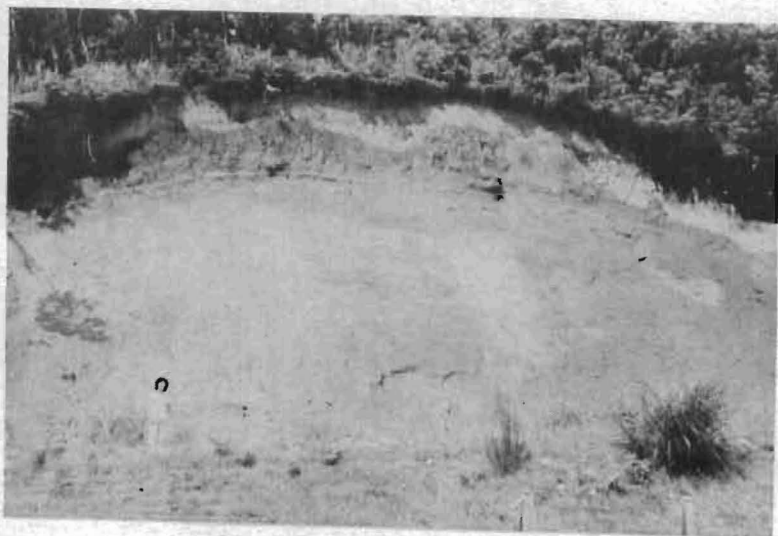


写真1-1-6

- ① 黒色火山灰層
- ② 濃黄褐色火山灰層
- ③ 淡黄褐色火山灰層
- ④ 褐色風化軽石層
- ⑤ 茶褐色粘土層
- ⑥ 褐色風化軽石層
- ⑦ 茶褐色粘土層
- ⑧ 褐色風化軽石層
- ⑨ 黒褐色粘土層
- ⑩ 風化花崗岩

花崗岩は真砂化が著しい。軽石層・火山灰層は④と同様、大山起源と思われる。④にはクラックが著しい。

㉠ 赤和瀬—中津河間の峠の露頭(写真1-1-7)

- ① 黒色火山灰層
- ② 安山岩質礫岩層
- ③ 凝灰角礫岩層
- ④ 花崗岩

花崗岩の上に不整合に安山岩質の凝灰角礫岩がのる。基底部には花崗岩礫も含まれている。②③は丹戸凝灰角礫岩類(山田直利, 1961)と呼ばれるもので、角礫は紫蘇輝石角閃石安山岩や両輝石角



写真1-1-7

閃石安山岩を主体とし、角礫の間を充すものは茶褐色、塊状の凝灰岩で、全く層理を示していない。

㉡ 中津河—恩原間の露頭

- ① 黒色火山灰層
 - ② 安山岩礫岩層
 - ③ 凝灰角礫岩層
- } (丹戸凝灰角礫岩類)

㉢ 恩原湖東岸の露頭

- ① 黒色火山灰層

- ②黄褐色火山灰層
- ③灰白色火山灰層
- ④礫層
- ⑤赤褐色粘土層
- ⑥花崗岩

} (人形峠層)

⑤の粘土層の上に大きさの不揃いな雑多の円礫が堆積している。この礫層は水成堆積によるものである。この付近の人形峠層の泥岩層から木の葉の化石が発見される。

(三宅 隆)

参考文献

山田直利(1961): 5万分の1地質図幅「奥津」および同説明書, 地質調査所

2 気候 — 恩原観測所のデータ

上斎原村における気象観測は中国電力恩原観測所で若干行われているのみである。標高620m程度の恩原貯水池畔における気象データである。このデータをもって上斎原村の気候を代表させることはできないが、他に資料がないので、このデータと、瀬戸内気候に属する岡山および内陸的な気候の津山のそれと比較しながら、その特色を述べてみたい。

岡山県の気候区分は、吉野正敏(1968)によれば図1-2-1のようである。各地域について

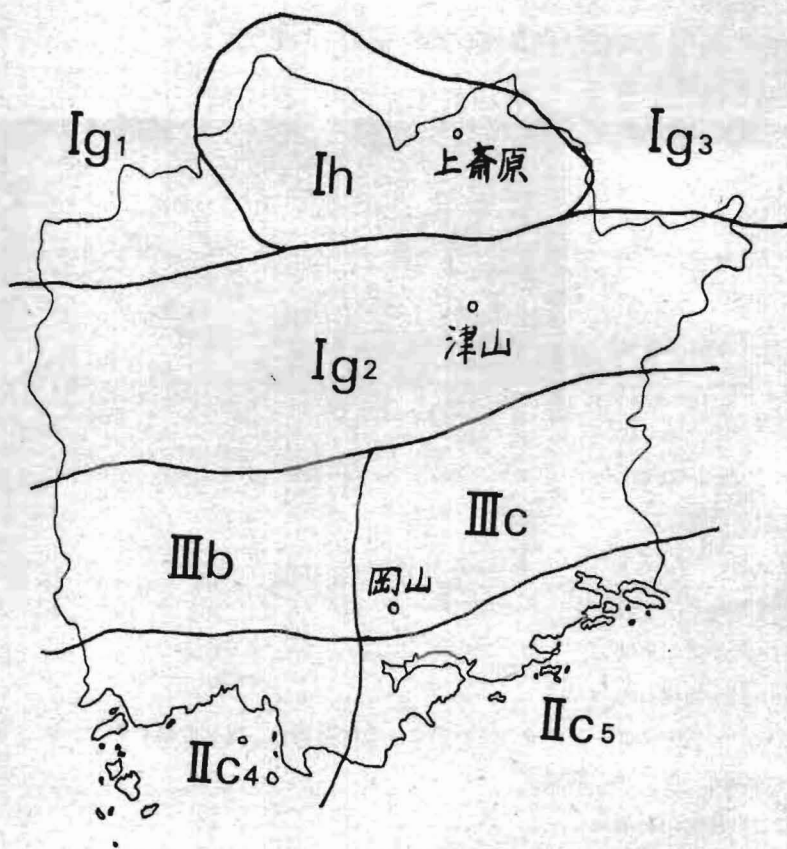


図1-2-1

岡山県の気候区分(吉野正敏による)

次のように説明されている。

Ig1 1月の降水量の他、夏の降水量も多い。

Ig2 夏も冬も降水量は北側の地域より少ない。しかし、微雨日数はやや多い。

Ig3 Ig1 と同じ。低温がでる。

Ih 山地的特性やや現われる。すなわち低温、多雨、雷雨など。

Iic4 夏・冬ともに降水量は少なく、冬暖かく夏は高温である。

Iic5 Iic5 と同じだが傾向はさらに強い。瀬戸内気候の最も代表的地域。年日照時間は2400時間を超す。

IIIb 夏も冬も降水量は少ない。

IIIc IIIb より瀬戸内気候の特徴が強い。

この気候区分によれば、恩原、岡山、津山は、それぞれ Ih, IIIc, Ig2 に属する。

恩原、岡山、津山における気温、降水量、積雪のデータを比較すると、表1-2-1~4のとおりである。

表1-2-1 S₄₄~S₄₈ 5年間の月別平均最高気温 (℃)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
恩 原	2.4	2.8	5.3	13.0	18.0	20.3	25.9	27.1	21.0	15.0	9.7	3.9
岡 山	9.6	10.0	12.4	19.2	23.5	25.8	30.7	31.8	27.7	21.9	16.2	10.8
津 山	8.4	9.2	11.8	19.4	23.7	25.8	30.6	31.7	27.3	21.3	15.1	9.5

表1-2-2 S₄₄~S₄₈ 5年間の月別平均最低気温 (℃)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
恩 原	-5.1	-4.1	-3.2	3.5	9.1	12.2	15.2	17.9	13.6	7.5	1.6	-2.9
岡 山	-0.7	0.1	0.9	7.6	12.0	17.1	22.5	23.1	18.9	10.7	4.7	-0.4
津 山	-1.5	-0.9	-0.4	5.9	10.3	15.8	21.4	21.7	17.4	9.5	3.4	-1.4

表 1-2-3 S₄₄~S₄₈ 5年間の月別平均降水量 (mm)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
恩 原	199.0	185.6	187.6	150.6	148.8	252.2	266.8	242.2	237.0	123.6	138.4	144.8	2276.6
岡 山	48.6	46.5	43.1	119.5	113.3	224.4	209.0	111.9	126.1	81.8	42.7	26.9	1193.8
津 山	70.5	60.6	53.9	129.0	136.0	254.7	307.0	117.2	170.0	77.4	42.8	39.0	1458.1

表 1-2-4 S₄₄~S₄₈ 5年間の月別平均積雪量 (cm)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
恩 原	31.7	61.1	71.8	6.6	0	—	—	—	—	—	0.8	17.4	189.4
岡 山	3.8	4.8	1.8	0.2	—	—	—	—	—	—	0.6	2.2	13.4
津 山	9.2	11.2	11.8	0.8	—	—	—	—	—	—	2.0	8.4	43.4

〔気象データ〕

中国電力恩原観測所 岡山地方気象台編「岡山県気象月報」

(1) 気温

月別平均最高気温について、3地域を比較すると、最寒月(1月)では恩原2.4℃、岡山9.6℃、津山8.4℃であり、岡山・津山にくらべ、恩原は7℃前後低い。最暖月(8月)では恩原27.1℃、岡山31.8℃、津山31.7℃と恩原がやはり4℃前後低い値を示す。

月別平均最低気温についても、1月では恩原-5.1℃、岡山-0.7℃、津山-1.5℃、8月では恩原17.9℃、岡山23.1℃、津山21.7℃となり、夏・冬とも岡山との差は5℃前後、津山との差は4℃前後で、恩原がはるかに低い値を示している。

平均最高気温と平均最低気温の差を計算すると、恩原で1月7.5℃、8月9.2℃、岡山で1月10.3℃、8月8.7℃、津山で1月9.9℃、8月10.0℃となる。恩原では冬期の昼と夜との気温差は岡山・津山にくらべて少なく、夏期のそれは比較的大きい値を示す。津山の8月の平均最高気温と平均最低気温の差が10.0℃と大きい値を示すのは、津山が山間盆地に位置し、日中暑く夜間冷えること内陸的な気候であることを示す。

以上のように、恩原は岡山・津山にくらべて、年間を通じて数度低い気温である。恩原観測所は標高約620mに位置しているから、気温で減率を100mにつき0.6℃とすれば海拔0mの地点よりは3.6℃低温と計算される。さらに中国脊梁山地内に位置しているという地形的環境など

によって、その差が拡大されているのであろう。

(2) 降水量および積雪

恩原の年間降水量は2,000 mmを越す。岡山の2倍であり、津山と比較しても1.5倍である。特徴的なことは、冬季の降水量が他と比して特に多いことである。冬季3ヶ月(12-2月)の降水量は、恩原で529.4 mmであり、岡山の122.0 mm、津山の170.1 mmに比して、それぞれ4倍、3倍もの値を示している。これは、いうまでもなく降雪に関係する。冬季には、大陸からの乾燥した寒冷高気圧が日本海上で水蒸気を多く含み、日本列島上空にきて、中国山地にはばまれ、山地をこえる時に水蒸気が冷却凝結して、雪や雨になる。中国脊梁山地をこえると、降雪・降雨は少なくなる。しかし津山あたりでは、まだ微雨日数は多いようである。岡山になると、冬季は晴天の乾燥した日が続き、降水量は極めて少なくなる。昭和44-48年の5年間の平均積雪量は、恩原で189.4 cm、津山で43.4 cm、岡山の13.4 cmと、きわだった対照を示す。恩原の1-3月期の積雪量は大きい。恩原高原スキー場をはじめ、人形峠スキー場、三ヶ山スキー場、岩崎谷スキー場など、上斎原村にはスキー場が多く、冬季にはにぎわう。恩原と上斎原役場付近とでは積雪量に差があり、恩原の方が雪が深い。昭和34年の上斎原村誌によれば、昭和30年度の最深積雪は、恩原の方が約2倍の深さで、最高1.5 mとある。また、積雪の最高としては、昭和31年の7.0 mが記録されている。

恩原は冬季だけに限らず、夏季の8、9月にも、降水量は岡山・津山より大きい値を示す。それに対して、6、7月はさほど大きい差を示していない。これは6、7月が梅雨の時期にあたり、オホソク海と太平洋の高気圧の間に梅雨前線が発生し、この前線が日本列島の上空に停滞し、日本全土に雨を降らせるため、恩原、岡山、津山の降水量に差があまりみられないのであろう。ただし、一般には、平野部より山沿いの地域に降水量は多いようである。8、9月に入ると、日本列島は小笠原高気圧におおわれるため、蒸し暑い南からの季節風が吹き、晴天が続く日が多い。しかし中国山地では、強い日射のため暖まった空気が急に上昇するので、積乱雲を生じ、雷雨の発生することが多い。このため平野部の岡山、津山にくらべて、恩原においては夏季もまた、降水量が高い値を示すことになる。

なお上斎原村誌に昭和29年の気象データが記されている。抜き書きすると次の通りである。

気温	平均最高気温	26℃
	平均最低気温	0.8℃
	年平均気温	13℃

天候日数 晴116日 曇156日 雨65日 雪28日

初霜 10月16日 霜終日 5月18日

初雪 12月15日 雪終日 3月15日

降水量 2678 毫米

(中嶋玲子)

参考・引用文献

吉野正敏(1968):中国・四国地方の気候区分 地理科学

藤木荘江(1912):上斎原村誌(草稿)

第 2 章 人 口 と 集 落

1、人口構成と人口移動

(1) 総人口とその推移

上斎原村の総人口は昭和45年(1970)の国勢調査によると、1,209人(男595人,女614人)である。昭和49年7月28日現在の人口1,172人(男566人,女606人)で、45年度より3.1%減少している。又、世帯数は355世帯から290世帯に減少しており、その減少率は13.4%である。

次に、総人口の推移をみていってみよう。村誌に文久元年(1861)3月の人口、戸数が記載されているが、これによると人口は499人(男248人,女241人)、戸数は120戸である。村誌または現勢調査簿による人口の推移をみていくと、明治13年(1880)の人口は510人(男263人,女247人)、明治35年(1902)には941人(男490人,女451人)明治40年(1907)には981人(男533人,女448人)、大正元年(1912)には1196人(男640人,女556人)大正5年(1916)には1,299人(男675人,女624人)である。明治35年から急激に増加をしているのは、資料のちがひによる差異もあるであろうが、どのような理由によるものであろうか。明治初期から大正時代に至るこの時期は、日清・日露戦争をへて、近代産業が勃興、発展し、さらに第1次世界大戦中において飛躍的に発展した日本経済の高度化の時代である。この間、日本の人口は、しだいに増加しているが、それと同じく、上斎原村の人口も増加している。

大正9年(1920)からは、国勢調査による人口の変化をみてみよう。(表2-1-1)
大正14年(1925)に、人口、世帯数ともかなりの減少を示している。これは、農村恐慌によるものであろうか。再び昭和5年(1930)に人口、世帯数ともに増加を示している。これは世界恐慌の一環として日本経済が不況におちいり、急激に拡大してきた都市産業が整理合理化されたため、都市の人口が流入したためと考えられる。さらに、上斎原村では恩原ダム建設のための人夫などが、流入したことも考えられる。その後昭和15年までは、人口、世帯数とも減少を示しているが、これは、第2次世界大戦へと前進するにしたがい、軍需工業の拡大強化が行なわれ、都市へ人口が流出したためと考えられる。なお、人口の減少にくらべて、世帯数の減少は少ない。これは家族のうちの一部が流出したことを示している。昭和20年の調査では、人口、世帯数とも増加を示している。これは、第2次世界大戦の激化にともない、疎開のための都市人口の流入によるものと考えられる。これらの人口は、戦後経済の復興とともに都市に環流していくのである。昭和25年(1950)の調査では昭和23年(1948)の調査より、わずか1.7%ではあるが増加を示している。これは戦後1947から49年にかけてのベビーブームの現象

表 2-1-1

上 斎 原 村 の 人 口 変 化

()内は指数

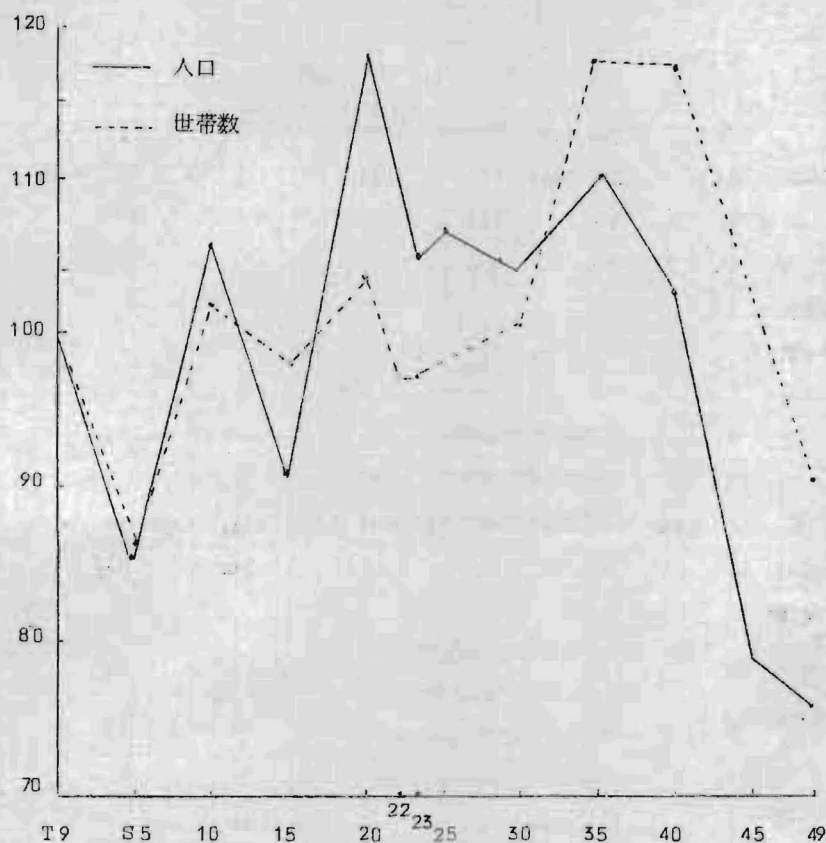
	総 数		男	女	世 帯 数		一世帯当り人数
大正 9 年	1,553	(100)	849	748	318	(100)	4.88
1 4 年	1,318	(84.9)	689	629	271	(85.2)	4.86
昭和 5	1,637	(105.4)	889	748	323	(101.6)	5.07
1 0	1,485	(95.6)	774	711	310	(97.5)	4.79
1 5	1,412	(90.9)	726	686	288	(90.6)	4.90
2 0	1,819	(117.1)	938	881	332	(104.4)	5.48
2 2	1,685	(108.5)	849	836	308	(96.9)	5.47
2 3	1,640	(105.6)	819	821	308	(96.9)	5.32
2 5	1,667	(107.3)	830	837	319	(100.3)	5.23
3 0	1,628	(104.8)	826	802	323	(101.6)	5.04
3 5	1,743	(112.2)	904	839	372	(117.0)	4.68
4 0	1,588	(102.3)	797	791	372	(117.0)	4.19
4 5	1,209	(77.8)	595	614	335	(105.3)	3.61
4 9	1,172	(75.5)	566	606	290	(91.2)	3.78

「岡山県統計年報」 昭和49年度は住民票の7月28日現在より作成

による増加と考えられる。昭和30年(1955)には、前の調査より、2.3%減少しており、昭和35年(1960)には、再び増加に転じ、その増加率は7.1%である。この時代は、昭和25年(1950)の朝鮮戦争特需による日本経済の復興につづく日本の高度経済成長の始まる時代であり、農山村の人口は減少を示すのが全国的傾向であると思われる。ところが、上斎原村では様子が異なっているのである。というのは、昭和30年(1955)に、村の北部の人形峠でウラン鉱が発見され、その後、調査探鉱等ウラン鉱山関係者の流入があり、その数が流出数を上回ったためと考えられる。ところが、昭和40年(1965)の調査では減少に転じ、その減少率は8.9%であり、昭和45年春の国会で成立した「過疎地域対策緊急措置法」の適用をうける要件である5年間の減少率10%以上には達しなかった。しかし、人口減少率7.5%以上を過疎地域とする考え方もあり、この考え方によると、すでにこの時点において過疎地域であったといえる。昭和45年(1970)の調査では大巾に減少しており、その減少率は23.9%である。これは、岡山県下で最大の値である。昭和42年10月、鉱山の業務が原子核燃料開発事業団へ継続され、探鉱部門の終了、施設、設備の近代化等により、同鉱山関係者が年を追って減少したこと、それに加えて、同事業団の宿舍が、隣県の鳥取県倉吉市に完成したため、関係者や、その家族が流出したことに原因があると考えられる。このことは後に述べ

図 2-1-1

上 斎 原 村 の 人 口 変 化



る集落別人口の変化からも明らかである。先にも述べたが、昭和49年7月現在の人口は、昭和45年の国勢調査と比較すると、3.1%の減少率を示している。しかし減少はしているもののその減少率は低くなってきているようである。

以上のように、この村の人口は、高度成長の影響を受けると同時に、人口の少ないこの村では、事業所の関係により、大きく影響を受けて、他とは異なった推移をみせている。

次に、一世帯あたりの平均人員をみると、全国的傾向と同じく昭和35年(1960)以降、急激に縮少している。このような世帯規模の著しい縮少は、子供数の縮少と、核家族化の促進によるものと考えられる。また核家族化と関係し、老人を残して若者が都市へ流出していったことも考えられる。

(2) 産業別人口構成とその推移

国勢調査による昭和5年(1930)から昭和45年(1970)の上斎原村の就業人口を第1次(

農・林・水産業)，第2次(工・建設・製造業)，第3次(商・運輸・通信・サービス業)に分類しているのが表(2-1-2)である。

表2-1-2

産業別人口とその割合

	昭和5年	昭和22年	昭和25年	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和45年
第1次産業	543 68.5	792 82.1	731 84.7	668 79.2	707 69.5	516 60.6	427 56.1
農 業	542	656	531	515	537	435	360
林業、狩猟業	1	136	200	453	170	81	67
漁業水産養殖業	0	0	0	0	0	0	0
第2次産業	137 17.3	62 6.4	28 3.3	52 6.2	150 14.7	170 19.9	121 15.9
鉱 業	0	0	0	0	128	99	60
建 設 業	0	41	16	19	15	66	12
製 造 業	137	21	12	32	7	5	49
第3次産業	113 14.2	111 11.5	104 12.0	123 14.6	161 15.8	166 19.5	213 28.0
卸売・小売業	57	29	14	22	39	39	39
金融・保健 不動産業	0	0	0	0	1	0	2
運輸・通信業	19	11	3	3	12	18	18
電気・ガス 水道業	23	16	44	40	25	18	9
サービス業	5	6	27	33	67	70	110
公 務	9	21	13	15	16	21	34
そ の 他	0	28	3	0	1	0	1
計	793 100%	965 100%	863 100%	843 100%	1,018 100%	852 100%	761 100%

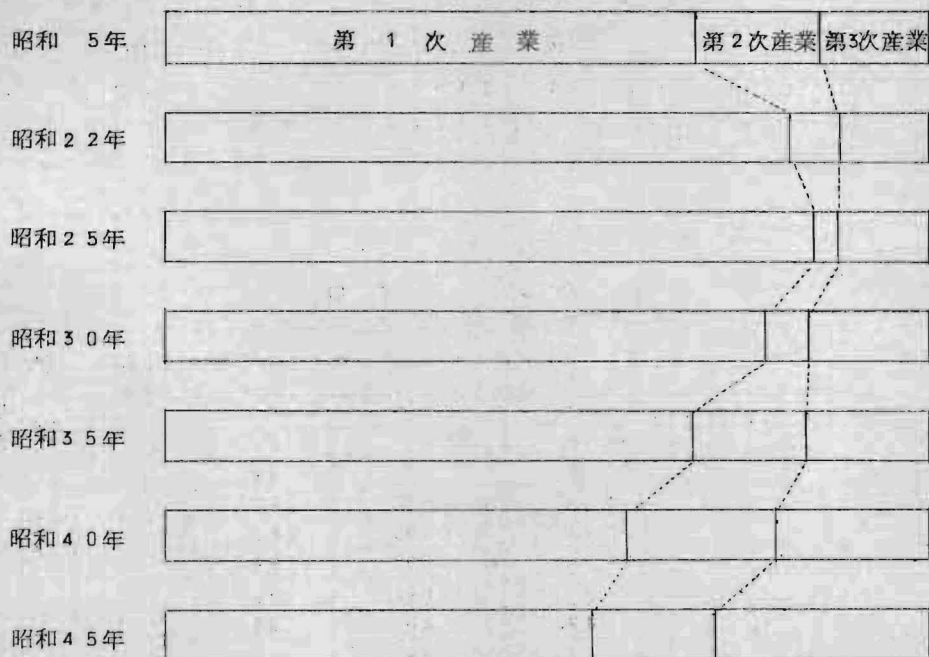
(「岡山県統計年報」より作成)

まず、就業人口からみてみよう。就業人口は昭和22年(1947)までは増加しているが、昭和25年(1950)には減少に転じ、総人口の減少率が1.1%であるのに対し10.6%と大きい。これは戦後の特殊事情によると思われる。さらに昭和30年(1955)まで減少しているが、昭和35年(1960)の総人口の増加にともない増加している。ところが、昭和40年(1965)昭和45年(1970)と総人口の減少にともないかなり減少している。昭和35年(1960)から昭和45年(1970)の10年間の減少率は22.3%と、非常に高い値を示している。

次に、昭和45年の産業別人口をみると、第1次産業人口が56.1%、第2次産業人口が15.9%、第3次産業人口が28%である。日本全体では、それぞれ19.3%、33.9%、46.7%であり、こ

図 2-1-2

産業別人口の割合



の村は、第1次産業の割合が高く、その中でも農業の占める割合の高い農山村であることがわかる。

全就業人口に対する第1次産業人口の割合は、昭和5年(1930)には68.5%であり、以下、表 2-1-2 のとおりである。このように昭和25年(1950)を頂点として大巾に減少しているが、まだ日本全体の第1次産業人口の割合に比較するとかなり高い値を示している。この村は、総面積のうち90%強を山林が占めており、蓄積量は多いが、人工林率が低く、あがる収入が低いいためか、林業人口は少ない。

第1次産業人口が減少傾向にあるのに対し第2次、第3次産業人口は増加傾向にある。しかし、その増加の速度はゆるやかである。第2次産業人口の割合は表 2-1-2 からわかるように、昭和5年(1930)から昭和22年(1947)にかけて減少しているのを除き、他の時期はいづれも増加している。昭和35年(1960)に急増しているのはいうまでもなく、昭和30年(1955)に発見されたウラン鉱床に関係する人々の転入に原因すると考えられる。そして、昭和45年(1970)に減少しているのもこれに関係する。

第3次産業人口の割合は、着実に増加してきており、中でもサービス業の増加がめだつ。これは、周辺の温泉町に働きに出かける人がいるためと考えられる。又、昭和43年(1968)に建設された国民宿舎、昭和45年(1970)に建設されたレストハウスに従事する人口があることも考えられる。電気ガス水道業の割合は減少しているが、これは中国電力K・Kの設備の近代化により従業員

が流出していったためである。

(3) 年令別人口構成とその推移

年令階層別人口構成を表わしたのが表(2-1-3)である。この表から人口ピラミッドをつくる(図2-1-3)。それによると明治41年(1908)のものでは、ほぼピラミッド型を示すのに対し、昭和30年(1955)から以後のものは若年労働者層のところがへこむ、いわゆるひょうたん型をしいに示し始めており、昭和49年(1974)のものは顕著である。このことから先に述べた高度経済成長により人口が都市へ流出したことがうかがわれる。

表2-1-3

年 令 階 層 別 人 口

	昭和23年	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和49年
0~4	193	192 男104 女88	171 男91 女80	141 男64 女77	49	44 男20 女22
5~9	202	206 105 101	200 107 93	157 84 73	104	60 26 34
10~14	187	186 90 96	206 104 102	188 104 84	129	104 48 56
15~19	174	104 62 42	75 35 40	62 34 28	48	109 57 52
20~24	138	157 81 76	149 83 66	84 35 49	56	65 29 36
25~29		118 65 53	178 95 83	128 62 66	43	57 35 22
30~34		111 45 66	129 81 48	151 74 77	84	56 33 23
35~39		74 32 42	121 52 69	123 50 73	127	85 35 50
40~44		105 51 54	80 40 40	111 59 52	102	125 62 63
45~49	632	74 35 39	108 54 54	82 42 40	107	84 40 44
50~54		75 45 30	75 38 37	95 45 50	71	89 45 44
55~59		65 34 31	74 41 33	72 36 36	78	70 35 35
60~64		57 28 29	64 33 31	67 38 29	63	71 26 45
65才以上	104	99 44 55	144	127	148	153 67 86

「岡山県統計年報」より作成(国勢調査)

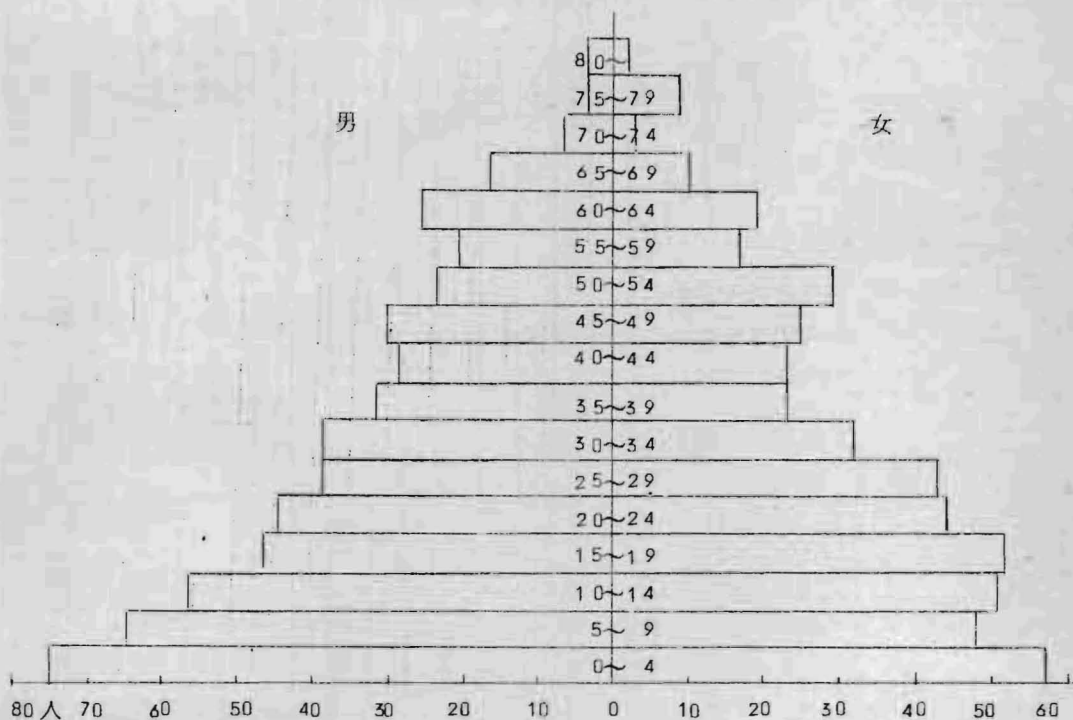
昭和49年7月28日現在は住民登録表より作成

昭和49年7月28日現在の人口構成をみると0～14才(年少人口)は208人(17.8%), 15～59才(生産年令人口)は740人(63.1%), 60才以上(老年人口)は224人(19.1%)である。以下表(2-1-3)をみていくと、年少人口は昭和35年(1960)には人口の増加に伴い増加しており、全人口に占める割合も高くなっているが、昭和40年(1965)には人口の減少に伴い減少し、その割合も減少している。さらに昭和45年(1970)には減少の割合が高く、全人口に占める割合も大巾に低くなっている。この村では、若い生産年令人口に伴って、年少人口が流出したためと、出生率が低下したことも考えられる。なお、出生率の低下は全国的傾向でもある。

生産年令人口は、絶対数においては変化しているが、全体に占める割合は高くなり、年を追って高くなっている。とくに昭和45年(1970)には、その割合が大巾に高くなっており、年少人口の割合が大巾に低くなっているのと対照的である。老年人口の割合が高くなっているのは、生産年令人口、年少人口の流出が激しいためと、医薬衛生の画期的進歩による死亡率の低下に原因するものと考えられる。

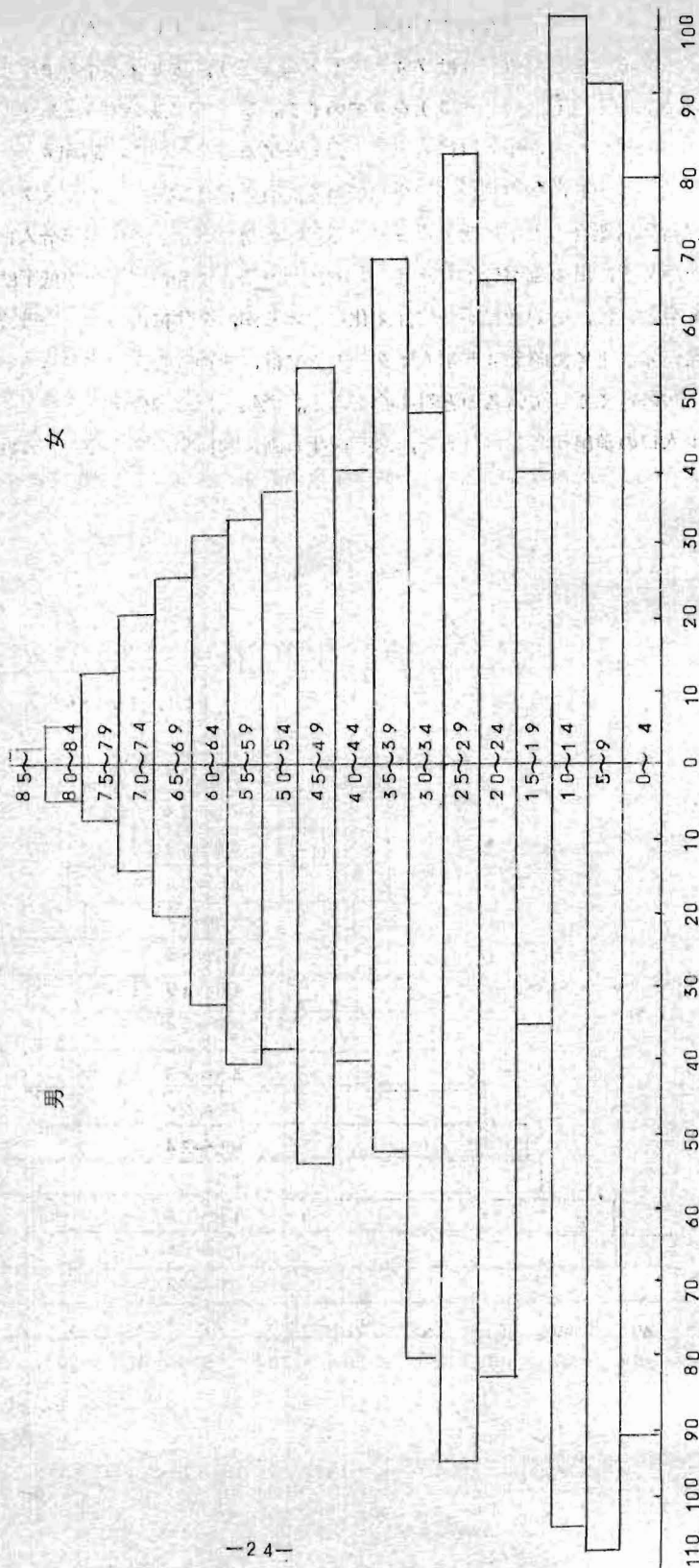
図2-1-3a

明治45年12月31日現在本籍人口による人口ピラミッド



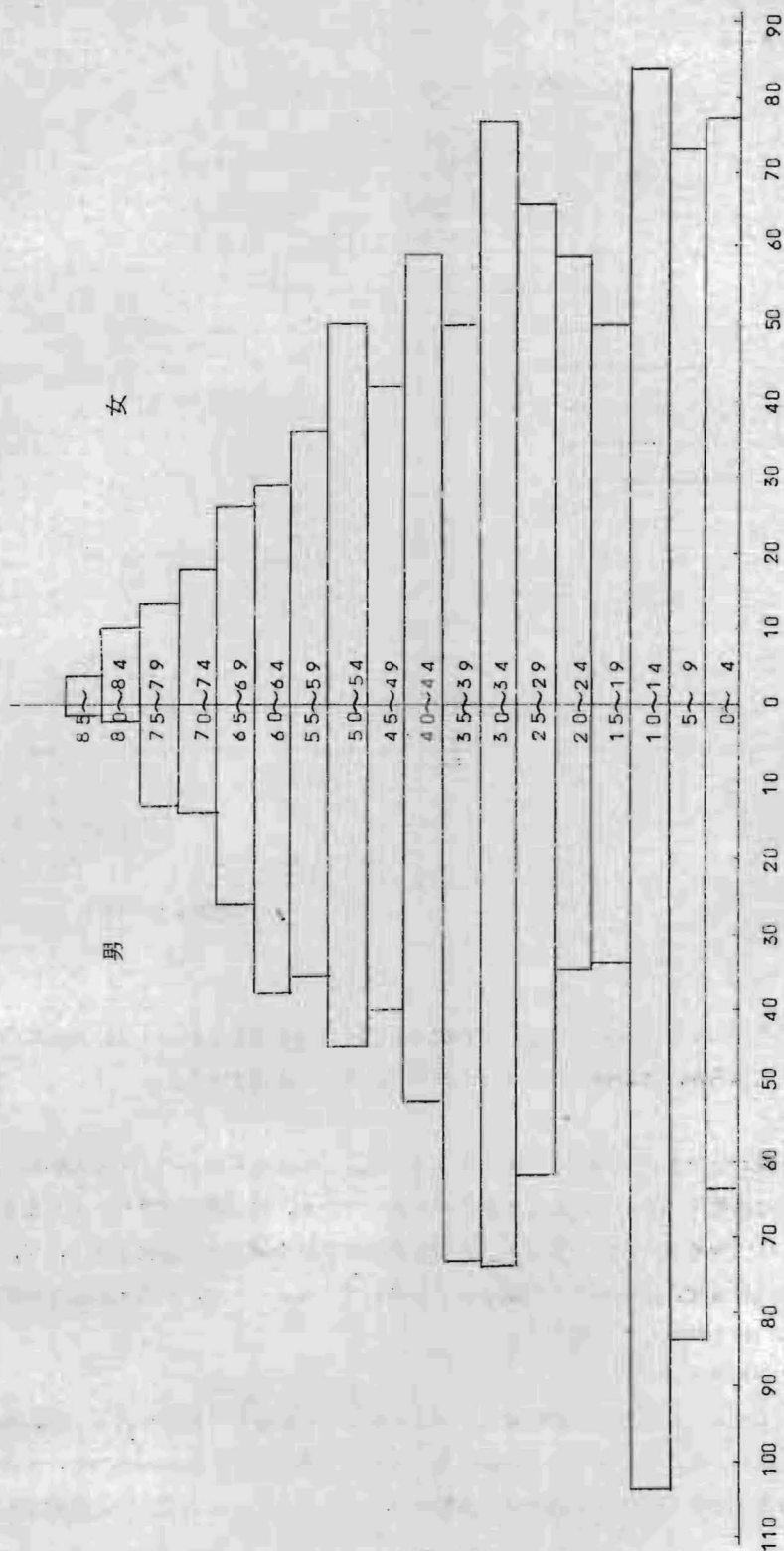
「現勢調査簿」より作成

昭和 30 年 10 月 1 日



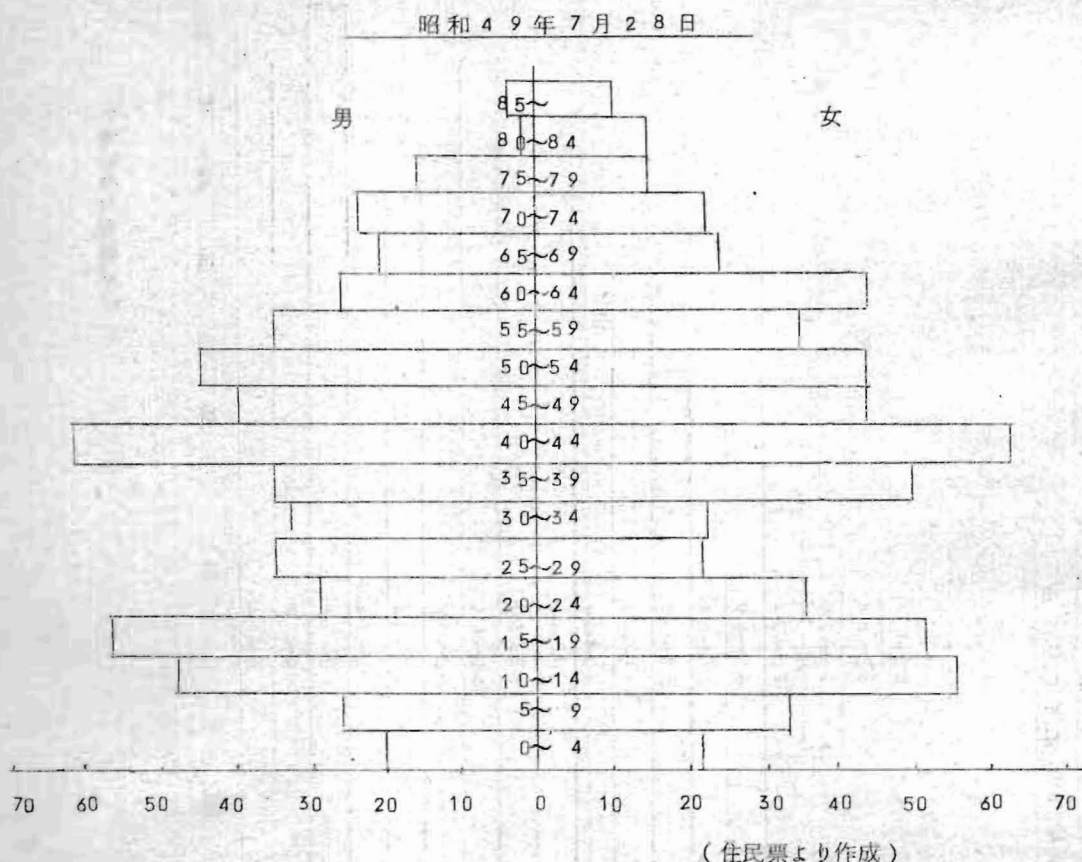
(国勢調査より作成)

昭和40年10月1日



(国勢調査より作成)

図 2-1-3-d



日本全体の人口の年齢構造は、年少人口の縮少と老年人口の増大とによって、高齢化の傾向をたどっているのであるが、この村においてはそれが特に著しいようである。

(4) 転入・転出

人口動態を表わしたものが表(2-1-4)である。この表からわかるように若い年齢人口の流出の結果として出生率が減少するためと死亡率の低下のため、自然増加はきわめて少なく、さらに昭和46年からはマイナスに転じている。この自然増加を社会減少が大巾に上回り、又、自然減少に社会減少が加わって、この村の人口減少をもたらしている。そこで、転入・転出を年齢別または地域別にその内容を検討しようと思う。

① 地域別にみた移動

表(2-1-5)によると、昭和48年のものをみると転出先では県内が47人、県外が67人である。県内では、県北の中心都市津山市への転出が多い。又、県南の岡山市、倉敷市への転出もみられる。県外では北隣の鳥取県への転出が多い。その中でも倉吉市や、東伯郡への転出が

表 2-1-4

人 口 動 態

年 度	出 生	死 亡	自然増	転 入	転 出	社会増
昭和 35 年	38	15	23	134	135	-1
40 年	21	10	11	66	121	-55
41 年	20	13	7	62	132	-70
42 年	15	11	4	54	132	-78
43 年	15	20	-5	90	113	-23
44 年	9	8	1	42	139	-97
45 年	10	5	5	86	152	-66
46 年	8	14	-6	80	82	-2
47 年	10	13	-3	83	116	-33
48 年	6	15	-11	63	114	-51

「統計おかやま」別冊号「岡山県人口の動き」

ただし、昭和35年度は人口統計「住民登録」より

昭和48年度のみ住民移動届より作成

表 2-1-5

昭和48年度地域別移動状況(県別)

	転 出	転 入		転 出	転 入		転 出	転 入
岡山県	47	25	岐阜県	1	0	岡山市	5	11
鳥取県	25	9	静岡県	1	0	倉敷市	2	0
大阪府	9	6	愛知県	1	1	津山市	19	6
愛媛県	6	0	埼玉県	1	0	総社市	2	1
兵庫県	4	12	北海道	1	0	井原市	1	0
茨木県	4	0	高知県	1	0	玉野市	0	1
東京都	5	1				苫田郡	9	0
神奈川県	3	1	計	114	63	勝田郡	4	1
奈良県	3	0				久米郡	2	1
島根県	1	4				和気郡	1	1
広島県	1	0				真庭郡	1	2
山口県	1	1				赤磐郡	1	0
福岡県	1	1				英田郡		2
京都府	1	2				計	47	26

(役場 住民移動届より作成)

めだっている。つづいて西日本の中心である大阪府への転出も多い。ウラン鉱業所と関係があると
思われる茨城県への転出もみられる。転入では岡山県内からが25人で県外からが28人である。
前住地は岡山市がもっとも多く、ついで津山市が多い。県外では兵庫県がもっとも多く、ついで鳥
取県が多い。昭和48年のものは以上のとおりであるが、過去数年間のものを、住民移動届よりみ
てみると、一般に県内での転出入が多く、特に、津山市、岡山市、苫田郡が多い。なお、本村が県
北にあるので県南の工業地域に集中して移動するという傾向は、強くないようである。県外では、
圧倒的に鳥取県との転出入が多く、県内との転出入より多い年があるほどである。鳥取県内でも倉
吉市、東伯郡に集中しているようである。特に東伯郡では、温泉の町である三朝町に集中している。
その他では、大阪・兵庫などの関西の都市が多い。実数は少ないが、その他の県との転出入を考え
あわせると、太平洋ベルト地帯に多いようである。これによっても高度経済成長との関係がうかが
える。

② 年令からみた移動

年令別人口の移動を示したのは表(2-1-6-a, b)である。昭和48年をみてみると、転
出入が多いのは15~24才であり、約50%を占めている。特に女性に多いのは結婚のためと考
えられるが、就職や進学のため転出する人も多いと考えられる。

昭和40年からの10年間をみてみても、やはり、15~24才の転出入がめだっており、とく
に転出がめだっている。ついで多いのは25~29才で30~34才がそれに続く。0~14才の
転出入は、親の移動に伴うものであろう。このことにより、若年労働層の流出により人口構成が変
化することが、明らかになる。

③ 地域別人口構成と人口移動

昭和30年からの地域別人口を表わしたのは表(2-1-7)である。昭和45年の地域別人口
をみてみると、本村集落が43.2%も占めており、人口の本村集落への集中がうかがわれる。昭和
30年の本村集落の占める割合は40.3%で、すでにこの時も高い値を示しているが、さらに、役
場などの主要機関のある本村集落への集中が進んでいるのではないかとと思われる。

表の「人形峠」は核燃料開発事業団関係のものだけを集計したものである。

地域別人口構成の推移をみていくと、本村集落も、人口の占める割合は大きくなってはいるもの
の、絶対数は、減少してきている。その減少の割合はゆるやかである。また、開口も他の集落と比
べ減少の割合がゆるやかである。この二つの集落は、昭和35年から昭和40年にかけての減少の
割合に比べ、昭和40年から昭和45年にかけての減少の割合がゆるやかである。これに対し、こ
の2つの集落以外は、減少の割合が激しくなっている。人形峠は、事業所の経営内容によって、人
口の移動が激しく、特殊な型を示している。

本村集落の人口は15年間で135人減少しており、減少率は20.6%である。開口では50人
減少しており、減少率は25.1%、平作原の人口は82人減少しており、減少率は45.1%。大巾
に減少しているのは、発電所の合理化によるものであろう。赤和瀬の人口は15年間で91人減少
しており、減少率は38.1%。遠藤では67人減少しており、減少率は29.6%である。人形峠で

表 2-1-6-a

年 齢 別 転 出 者 数

	昭 40年度	和 41年度	昭 42年度	和 43年度	昭 44年度	和 45年度	昭 46年度	和 47年度	昭 48年度	和
0～4	7 男6 女1	11 9 2	15 9 6	13 9 4	13 9 4	14 9 4	10 1 0	2 0 2	4 3 1	
5～9	7 2 5	10 3 7	6 3 3	11 4 7	7 4 3	14 7 7	0 0 0	7 1 6	4 2 2	
10～14	6 2 4	9 5 4	4 1 3	4 2 2	3 1 2	4 2 2	0 0 0	6 3 3	4 2 2	
15～19	17 2 15	30 17 13	40 26 14	19 10 9	30 18 12	42 25 17	27 17 10	26 15 11	29 14 15	
20～24	17 5 12	16 6 10	18 9 9	16 8 8	17 5 12	24 12 12	23 5 18	36 12 24	29 12 17	
25～29	24 12 12	18 10 8	16 6 10	17 8 9	18 7 11	17 4 13	3 2 1	7 3 4	16 7 9	
30～34	13 8 5	26 10 16	21 13 8	9 9 7	3 6 4	16 10 6	11 5 6	0 0 0	5 2 3	4 2 2
35～39	6 5 1	16 5 11	7 8 7	3 4 4	7 3 3	8 5 3	6 3 6	10 6 4	5 2 3	
40～44	5 2 3	9 7 2	7 7 5	5 0 10	10 9 1	11 9 2	5 4 1	8 5 3	5 3 2	
45～49	1 1 0	9 2 7	0 4 2	2 8 2	6 4 2	4 0 0	3 1 2	4 2 2	3 1 1	
50～54	3 2 1	6 4 2	2 0 4	2 2 0	6 4 1	0 0 1	6 3 1	1 1 0	2 0 2	
55～59	2 2 0	6 2 4	2 2 0	2 0 1	0 1 1	1 1 1	3 2 1	2 0 4	2 2 2	
60～64	0 0 0	2 1 3	0 1 1	0 1 0	0 0 0	0 0 0	4 2 0	0 0 0	0 0 0	
65才以上	1 0 1	2 1 3	3 1 1	0 1 3	1 2 2	1 1 1	1 1 1	2 2 3	1 1 58	
計	128 68 60	137 72 65	131 74 58	113 58 55	139 78 61	152 78 74	82 44 38	116 52 64	114 58	

「統計おかやま」別冊号「岡山県人口の動き」より作成

ただし、昭和48年度は、住民移動届より作成

表 2-1-6-b

年 齢 別 転 入 者 数

	昭和 40年度		昭和 41年度		昭和 42年度		昭和 43年度		昭和 44年度		昭和 45年度		昭和 46年度		昭和 47年度		昭和 48年度		
0～	4	8	男女 5 3	7	3 4	7	1 6	7	2 5	3	1 2	2	1 1	5	2 3	3	2 1	6	4 2
5～	9	5	0 5	2	1 1	3	1 2	5	3 2	0	0 0	3	2 1	0	0 0	2	1 1	0	0 0
10～14	0	0	0 0	0	0 0	1	0 1	0	0 0	0	0 0	1	1 0	3	1 2	1	0 1	0	0 0
15～19	8	3 5	8	6 2	8	3 5	14	7 7	7	4 3	10	5 5	19	12 7	17	11 6	9	5 4	
20～24	18	5 13	13	3 10	11	5 6	26	8 18	11	2 9	26	13 13	28	10 18	28	13 15	26	7 19	
25～29	14	11 3	9	4 5	7	4 3	7	4 3	9	4 5	8	5 3	5	4 1	12	6 6	13	5 8	
30～34	4	3 1	14	8	8	5	8	5 3	4	4 0	3	2 1	1	0 1	4	2 2	4	3 1	
35～39	3	2 1		6		3	6	5 1	2	1 1	8	7 1	8	5 3	4	3 1	0	0 0	
40～44	0	0 0	3	1	6	5	4	3 1	1	1 0	11	8 3	3	3 0	5	5 0	3	2 1	
45～49	2	2 0		2		1	7	6 1	0	0 0	8	8 0	1	0 1	3	2 1	0	0 0	
50～54	2	0 2	2	1	1	1	6	4 2	2	1 1	4	2 2	3	1 2	1	1 0	1	0 1	
55～59	0	0 0		1		0	0	0 0	2	1 1	1	0 1	1	1 0	0	0 0	1	1 0	
60～64	1	1 0	1	0	2	0	0	0 0	0	0 0	0	0 0	2	1 1	2	0 2	0	0 0	
65才以上	1	0 1		1		2	0	0 0	1	0 1	1	1 0	1	0 1	1	1 0	0	0 0	
計	66	32 34	53	25 28	54	25 29	90	47 43	42	19 23	84	55 31	80	40 40	83	47 36	63	27 36	

「統計おかやま」別冊号「岡山県人口の動き」より作成

ただし、昭和48年度は、住民移動届より作成

表 2-1-7

集 落 別 人 口

		昭和 30 年		昭和 35 年		昭和 40 年		昭和 45 年	
		人 口	世帯数	人 口	世帯数	人 口	世帯数	人 口	世帯数
本 村 集 落	第 1 区	236	49						
	第 2 区	238	56	645	144	575	139	521	140
	第 3 区	182 (101.7)	36 (97.9)		(100)	(89.1)	(96.5)	(80.8)	(97.2)
開 口	第 4 区	199 (104.7)	38 (102.7)	190	37 (100)	158 (83.2)	37 (100)	149 (78.4)	36 (97.3)
平作原	第 5 区	182 (112.3)	34 (94.4)	162	36 (100)	152 (93.8)	36 (100)	100 (61.7)	27 (75.0)
赤和瀬	第 6 区	241 (108.6)	43 (76.8)	222	56 (100)	207 (93.2)	51 (91.1)	150 (67.6)	43 (76.8)
恩 原	第 7 区	126 (97.7)	27 (100)	129	27 (100)	112 (86.8)	26 (96.3)	78 (60.5)	23 (85.2)
速 藤	第 8 区	226 (97.4)	40 (100)	232	40 (100)	213 (91.8)	42 (105.0)	159 (68.5)	39 (97.5)
人 形 峠				165	32 (100)	171 (103.6)	41 (128.1)	52 (31.5)	27 (84.4)
合 計		1,628	323	1,743	372	1,588	372	1,209	335

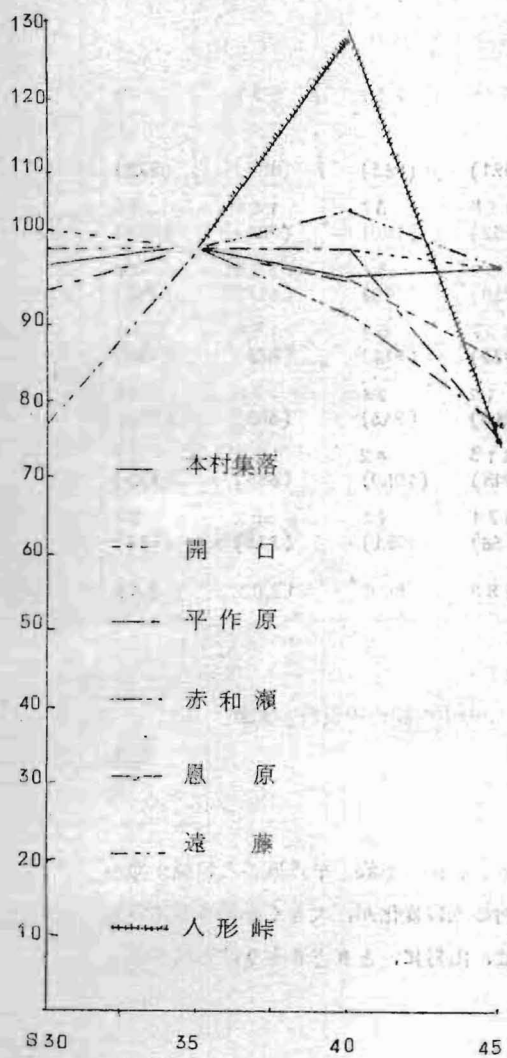
「上斎原村過疎地域振興計画」の表より

ただし、昭和 30 年度は、藤木荘江氏の「村誌作成資料」より

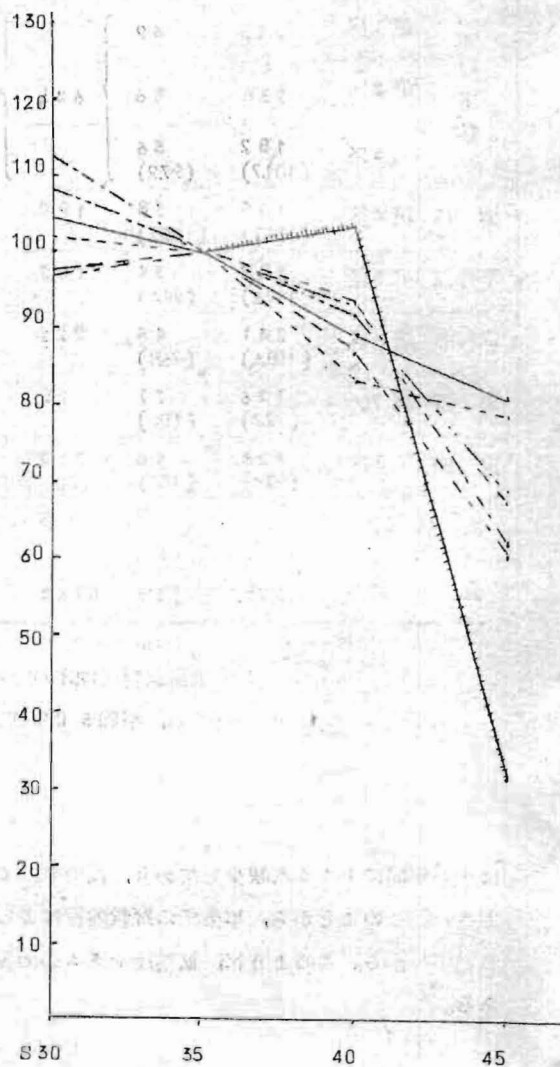
は 10 年間に 113 人減少しており、減少率は 6.85% である。特に人形峠と平作原の人口減少率が大きい。このことから、事業所の経営内容によって、上斎原村の人口変化が、大きく影響されていることがわかる。このように、鉱業所やダムの影響を受けるのは、山村に、ときどきみうけられる型である。

図 2-1-7

集落別世帯数の推移



集落別人口の推移



おわりに

上斎原村の人口は、経済の高度成長の影響、ウラン鉱業などの影響をうけて絶えず変化している。しかし、現在、自然資源を利用して、林業、観光化を積極的にすすめているので、人口の流出を防ぎ、都市からの帰村者を迎えることになるのではないかと思う。

(西 山 ひ と み)

参 考 文 献

人口大事典

日本人口の動向

日本の人口移動

2 過疎化集落

(1) はじめに

戦前においては、農家の次・三男が労働者として、都市に働きに出ていた。そして、後継ぎである長男は、農村に残り、農村人口はほぼ一定していた。やがて、戦争中・戦争直後になると、一たん都市に出ていた人達も、食べ物を確保するために、農村に帰ってくるようになり、一時、農村人口は増大した。しかし、昭和25年頃からのわが国の経済復興と30年以降の経済成長によって、大都市、工業地帯は、多くの労働力を必要とした。そのため、農山村の次・三男はもろろんのこと、長男までもが、都市へ出ていくようになり、挙家離村にまで進んでいったのである。長男の場合は、最初、自分の家から通う兼業とか出稼ぎという形であらわれ、やがて挙家離村にまで発展したのである。

この場合、学校を卒業すると同時に大都市に働きに出て行くわけだが、そのまま都市に住んで結婚をする場合が多いために、村には子供の数さえも少なくなっていくのである。つまり、最初に青年層が減少する。20代、30代の人達が減少するために、出生率が低下して、子供まで減少し、やがて村は老人の割合が、非常に高くなってしまいうのである。だが、青年女子は、結婚適齢期となると、一度、村へ帰ってくる例も、かなり見うけられる。

2) 過疎

農山村における過疎化に対して、都市では過密という問題が、おこっている。過疎と過密とは、別々に考える問題ではなく、人口移動という一つの現象を表と裏の両面から見たものと、考えるべきだろう。ここで、過疎ということは、一体、どのような状態のことを言っているのだろうか。大ざっぱに言えば、人口減少が激しいことである。しかし、それだけではなく、人口減少によって、村などの団体が、今までの生活水準と生産機能を維持していくことが、できなくなったことである。たとえば、教育、医療、防災の面である。さて、昭和45年に公布された「過疎地域対策緊急措置法」では、「過疎地域」を次の要件に該当する市町村と決めている。

「①昭和35年の国勢調査人口にくらべて、昭和40年の国勢調査人口が10%以上、減少していること。

②昭和41年度から昭和43年度までの財政力指数の平均が0.4未満であること。

この過疎地域の市町村は、自治大臣が公示することとなっている。なお、自治大臣の公示は、昭和45年度および昭和50年度の国勢調査の結果に基づき追加される。また、過疎地域の市町村として公示された市町村は、将来、上述の要件を満たさなくても過疎地域として、過疎法の定める各種の特別措置を受けることとなっている。」（「過疎対策」P7より）

過疎地域といっても、全国一様に発生したわけではない。では、どのように広がっていったのだろうか。過疎の先発地域は、中国、四国瀬戸内海、北九州であるが、これらの先発地域では、過疎化傾向は鈍化してきたのに対し、北海道、南九州、東北地方では過疎化の広がりが、急速になってきたことから、まず、大都市に近くて、割合に都市の影響を受けやすい西日本から徐々

に周辺の地へと波及していったのだろう。そして、現在では、東北、南九州が過疎の波にあらわれている。

(2) 上斎原村

過疎化が初期に起こった中国地方、その中でも中国山地域にある上斎原村は、岡山県の最北端にあり、北は鳥取県東伯郡と接している。村は、「総面積に占める耕地面積の割合は、わずか2%にすぎず、その他は山林・原野がその殆んどを占めている。」（「上斎原村過疎地域振興計画」P1より）わずかな耕地しかないために、農業でのみ生計をたてることは、ほとんどできないだろうと思われる。

表2-2-1を見るとわかるように、昭和40年対45年比の人口減少率は23.9%にもなり、財政力指数は0.212（ここでいう財政力指数とは、基準財政収入額を基準財政需要額で割ったものである）であり、国勢調査人口が10%以上の減少、財政力指数が0.4未満であるという条件を満たしているので、過疎地域に指定された。この大幅な人口減少は、人形峠集落における減少が大

表2-2-1

基礎集落名	昭和35年		昭和40年		昭和45年		増 減 率					
							35年対40年比					
	人	世帯数	人	世帯数	人	世帯数	人	世帯数	人	世帯数	人	世帯数
本村集落	645	144	575	139	521	140	△10.9	△3.5	△9.4		0.7	
開口集落	190	37	158	37	149	36	△16.8	0	△5.7		△2.8	
平作原集落	162	36	152	36	100	27	△6.2	0	△34.2		△25.0	
赤和瀬集落	222	56	207	51	150	43	△6.8	△8.9	△27.5		△15.7	
恩原集落	129	27	112	26	78	23	△13.5	△0.7	△30.4		△11.5	
遠藤集落	232	40	213	42	159	39	△8.2	5.0	△25.4		△7.1	
人形峠集落	165	32	171	41	52	27	3.6	28.1	△69.6		△34.1	
合 計	1,745	372	1,588	372	1,209	335	△9.0	0	△23.9		△9.9	

（「上斎原村過疎地域振興計画」より）

きな割合を占めている。人形峠集落は、ウラン鉱山関係の人たちばかりのため、ここの人口増減は人形峠鉱業所の業務に従っているもので、特別なものと考え、人形峠集落をのぞいて考えてみると、人口増減率は35年対40年比が△9.9、40年対45年比が△17.6となる。その結果、35年対40年比が△9.9となっているので、この時点で過疎地域であると言ってよいだろう。

a) 村の実態と方針

上斎原村は、昭和44年度に指定された津山広域市町村圏に属し、この中心である津山市と教育・医療などの面で強く結びついている。そして、村では気候・自然条件がきびしいため生産性が低いことと零細経営のために、農業だけでは村民の生活がなりたらず、日雇をはじめとする不

安定な兼業によって不足を補っている。

村の自主財源はというと、ほとんどが村有林の伐採によるもので、44年度では、自主財源がわずかに45.92%である。そのため、地方交付税への依存度が高くなっている。ここで、村全域は自然の観光資源にめぐまれているので、これを開発、利用することによって、村ひいては村民の収入の安定化、向上をめざそうとしている。

b) 転出、転居

表2-2-2をみると、岡山県外では東京、神奈川を中心とする京浜工業地帯周辺、大阪を中心とする近畿、隣接する鳥取県、そして、中国地方の中心である広島県に転出しているが、

表2-2-2

主な転出先（都道府県）

		茨 城	東 京	神奈川	京 都	大 阪	兵 庫	鳥 取	広 島
40 年 度	総 数	10	6	5	1	19	7	25	3
	男	7	3	3	1	9	1	16	1
	女	3	3	2	0	10	6	9	2
41 年 度	総 数	4	15	0	1	7	8	31	6
	男	3	7	0	0	7	4	19	3
	女	1	8	0	1	0	4	12	3
42 年 度	総 数	6	3	11	2	23	10	8	0
	男	5	2	5	0	10	6	3	0
	女	1	1	6	2	13	4	5	0

岡山県人口の動き—岡山県企画部統計課より

表2-2-3

昭和42年度岡山県内への主な転出先

	岡 山 市	倉 敷 市	津 山 市	玉 野 市	赤 磐 郡	苫 田 郡	勝 田 郡
総 数	11	3	18	3	4	14	2
男	7	2	13	3	2	7	0
女	4	1	5	0	2	7	2

岡山県人口の動き—岡山県企画部統計課より

やはり労働力を必要とする大都市へ転出する傾向があると言えるだろう。なかでも大阪府、鳥取県が特に多い。なるべく、労働力を必要とする近い地域を選んだ結果であろうか。

表 2-2-4

年令別転出者数

		0～ 4才	5～ 9才	10～ 14才	15～ 19才	20～ 24才	25～ 29才	30～ 39才	40～ 49才	50～ 59才	60才 以上	総 数
40年度	総 数	7	7	6	36	17	24	19	6	5	1	128
	男	6	2	2	21	5	12	13	3	4	0	68
	女	1	5	4	15	12	12	6	3	1	1	60
41年度	総 数	11	10	9	30	16	18	26	9	6	2	137
	男	9	3	5	17	6	10	10	7	4	1	72
	女	2	7	4	13	10	8	16	2	2	1	65
42年度	総 数	15	6	4	40	18	16	21	7	2	3	132
	男	9	3	1	26	9	6	13	7	0	0	74
	女	6	3	3	14	9	10	8	0	2	3	58
43年度	総 数	13	11	4	19	16	17	16	9	6	2	113
	男	9	4	2	10	8	8	6	7	4	0	58
	女	4	7	2	9	8	9	10	2	2	2	55
44年度	総 数	13	7	3	30	17	18	23	18	7	3	139
	男	9	4	1	18	5	7	14	15	4	1	78
	女	4	3	2	12	12	11	9	3	3	2	61

岡山県人口の動き より

表 2-2-5

村内における転居

	新 住 所	旧 住 所	家 族 員 数
48年度	本 村 集 落	赤 和 瀬 集 落	2 人
47年度	本 村 集 落	本 村 集 落	2 人
	本 村 集 落	本 村 集 落	2 人
	人 形 峠 集 落	赤 和 瀬 集 落	3 人
46年度	本 村 集 落	人 形 峠 集 落	1 人
45年度	遠 藤 集 落	?	2 人
	本 村 集 落	?	2 人

役場調べより

県内と県外は、大体同数であるが、県内の場合は津山市、岡山市、苫田郡が多い。津山市、岡山市は県内での中心地であり、苫田郡は上斎原村の周辺部である。県内、県外をとわず、近辺の都市と近隣地域へと転出していく傾向がある。

表2-2-4により転出年令をみると、15～19才が最高数である。学校を卒業して就職していく関係であろう。それに次ぐのは、20～24才、25～29才、30～39才であり、労働力としてのものが大部分であろう。そして、この人達の子供にあたる0～4才、5～9才も多くなっている。

転居例は、わずかしかなかったが、村内の中心である本村集落へ転居する傾向があると言えよう。やはり、少しでも生活の便利がよい所へ移ろうという気持ちからであろう。

(3) 恩原集落

表2-2-1をみてわかるように、特に著しい人口減少を示している集落の一つである恩原集落をとりあげて考えてみる。ここでいう恩原集落は、恩原、宮ヶ谷、小林の三地区を含んでいる。

表2-2-6

部落別戸数・人口数

部落名	37年3月				39年8月				49年7月			
	戸数	男	女	計	戸数	男	女	計	戸数	男	女	計
小林	8	24	23	47	8	23	23	46	10	18	23	41
恩原	5	11	9	20	5	11	8	19	2	4	2	6
宮ヶ谷	8	26	23	49	8	26	21	47	7	14	11	25

役場調べより

表2-2-6は昭和39年から昭和49年まで10年間も間があいているが、小林部落はわずかな人口減少はあるが、戸数はかえって増加している。これに反して恩原・宮ヶ谷の両部落は、人口、戸数ともに減少している。三部落のうちで小林部落にのみ小学校の分校があり、この小林部落からさらに坂道をのぼっていったところに恩原・宮ヶ谷両部落が位置している。つまり、恩原・宮ヶ谷両部落から、村内の中心となっている本村集落へ行く途中に小林部落が位置しているのである。表2-2-7によって、三地区全体でまとめてみると図2-2-1のようになる。これをみると、20～39才がぐっと少なくなり、中心となる労働力が欠如していることを示している。又、45～49才が少なくなっているが、それ以上の年令は少しずつ増加している。ことに60才以上の人口が全体の12.4%という高率を占めている。

表2-2-8、表2-2-9より、この地区での農業は、ささやかなものであると言えよう。農業にほとんど頼らない第二種兼業がほとんどであるし、さらに積雪寒冷地帯、耕地が少ないために、自給自足程度の小規模なものである。そのため、他に生活手段を求めて、転出も多くなったのではないだろうか。

表2-2-7

部落別による年齢階級別人口 (S 4 9 7)

階 級	小 林		恩 原		宮ヶ原	
	男	女	男	女	男	女
0～4才	0	0	0	0	4	1
5～9	0	1	0	0	1	1
10～14	3	2	0	0	1	1
15～19	2	4	1	0	1	0
20～24	2	0	2	0	0	0
25～29	1	1	0	0	1	0
30～34	1	1	0	0	1	2
35～39	1	2	0	0	1	0
40～44	2	3	0	0	2	2
45～49	2	0	0	0	0	0
50～54	0	3	0	0	0	1
55～59	2	0	0	1	1	0
60～64	1	3	0	1	0	1
65以上	1	3	1	0	2	1
計	18	23	4	2	14	11

役場調べ

図2-2-1

年齢別階級別人口 (S 4 9 7)

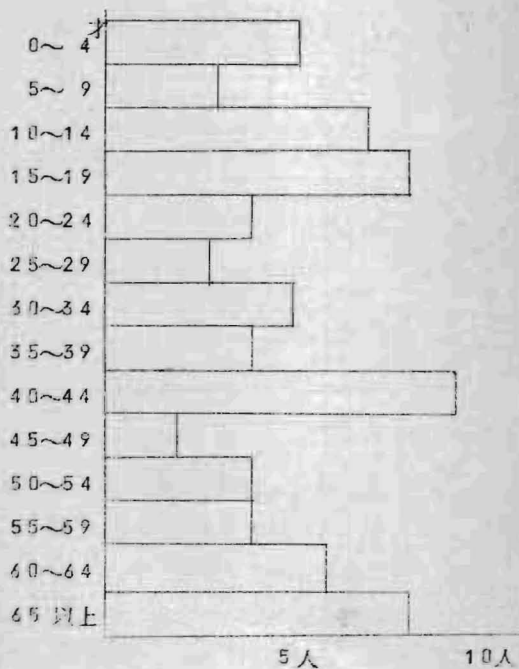


表2-2-8

経営耕地規模別農家数 (S 4 5.2.1)

総農家数	5a～30a	0.3～0.5ha	0.5～0.7ha	0.7～1.0ha	1.0～1.5ha	1.5～2.0ha
16	3	3	5	3	1	1

'70 農林業センサスより

表2-2-9

専業農家数	第1種兼業	第2種兼業
0	3	13

'70 農林業センサスより

a) 恩 原

表 2-2-10

番号	転入した年	転出した年	行 先	所 有 面 積			理 由 ・ そ の 他
				田	畑	山 林	
A		S 2 4	東伯郡	反 7.4		町 4	世帯主の死亡
B		S 4 0 ?	岡山市	8.517	3.712	8	
C	S 4 2	S 4 3	津山市	7.628	1.708	9	転勤?
D							子供達の転出後, S 4 4 年に 世帯主死亡
E	S 3 2	S 4 8	津山市				
F					3.09		S 4 8 年に娘のところへ
G	S 3 7			1.212			

土地台帳と聞きとりによる

恩原部落は、恩原貯水池の北端、恩原川の流入地点にある部落である。ここは、昭和39年には5戸あった戸数も49年には2戸に減ってしまった。表2-2-10は、戦後の戸数の増減の様子である。ここでFは、恩原に住民票はあるが、一人暮らしの老人で、娘のところへ行ってしまっていて現在、いないので、実際にはG一戸が住んでいるだけである。このGも昭和37年に転入してきた家族で、ここの出身ではない。つまり、現在では、昔から恩原に住んでいる人は、一人もいないのである。

この恩原部落は、戦争直後でさえも戸数はわずか5戸にすぎず、わずかな戸数・人口の変化が大きな割合となってしまうので、断定は、しにくい。

表2-2-11は、戦後の転出の様子を示したものである。挙家離村のものは、世帯主が先に転出して、次に家族を呼びよせるという形をとらず、家族全員ですぐに転出する形をとっている。ここには、老人が村に残り、子供夫婦が出ていってしまったという例もある。大ざっぱに言えば、昭和40年頃から挙家離村・転出が多くなったと言えるのではないだろうか。単身の転出者については、女子の場合、結婚のためであろうと思われるものもあるが、多くは20才前後の人達が町で職業につくためであっただろう。事実、この部落では、農業だけでは生活が成り立たず、林業・臨時雇いによって補う、というよりむしろ、農業を従とするようになっている。しかも、耕地が少ないのであるから若者がよりよい収入手段を求めていたし、また都市では経済成長により多くの労働力を必要としていたこととあいまって、40年頃から転出がみられるようになったのではないか。もし、農業・林業だけで生活が成り立ったり、村に転業とか兼業のできるような条件が備わっていたら、挙家離村・転出の動きも少しは、にぶくなっていたのではないだろうか。

表2-2-10のA・B・D・Fは、すでに所有地を売却してしまっているが、この土地は、

村内の人に売られたものではないらしい。A・B・Fは昭和47年の土地台帳によったものである。ただ一戸残っているGは、経営規模を拡大し、農業と恩原高原を利用した牛の飼育に力を注げば、若者もいることだし、転出しなくて生活が成り立つことだろう。

表2-2-11

戦後の転出

転出年	男		女		
	年令	人数	年令	人数	
S 24		2		1	※
S 31	49	1	49 13 0	3	
S 35		0	25	1	
S 38	16	1		0	
S 40 頃	37 5.3	3	30	1	※
S 41		0	16	1	
S 42	18	1	28	1	
S 43	39	1	60くらい	1	※
S 44	17	1	22	1	
S 45	16	1		0	
S 46		0	21	1	
S 48	54 19	2	79 50	2	※

※は挙家離村

役場調べより

この地域の恩原高原は、冬にはスキー場として利用され、恩原貯水池周辺には青少年旅行村・文化村の建設が予定されている。そして、池には約6万尾の鯉が放養され、現在では観賞用とされている。今後、池を中心とした自然を保護・活用し、ここからあがる収益によって村が潤い、ひいては村民が潤ってほしいものである。

(井上悦子)

参考資料：・「過疎・過密への挑戦」伊藤善市

・「過疎対策」

全国過疎地域対策促進連盟

財団法人過疎地域問題調査会

・「上斎原村過疎地域振興計画」

岡山県苫田郡上斎原村

第 3 章 古 代 ・ 中 世

I 富 庄

(イ)地理的概況

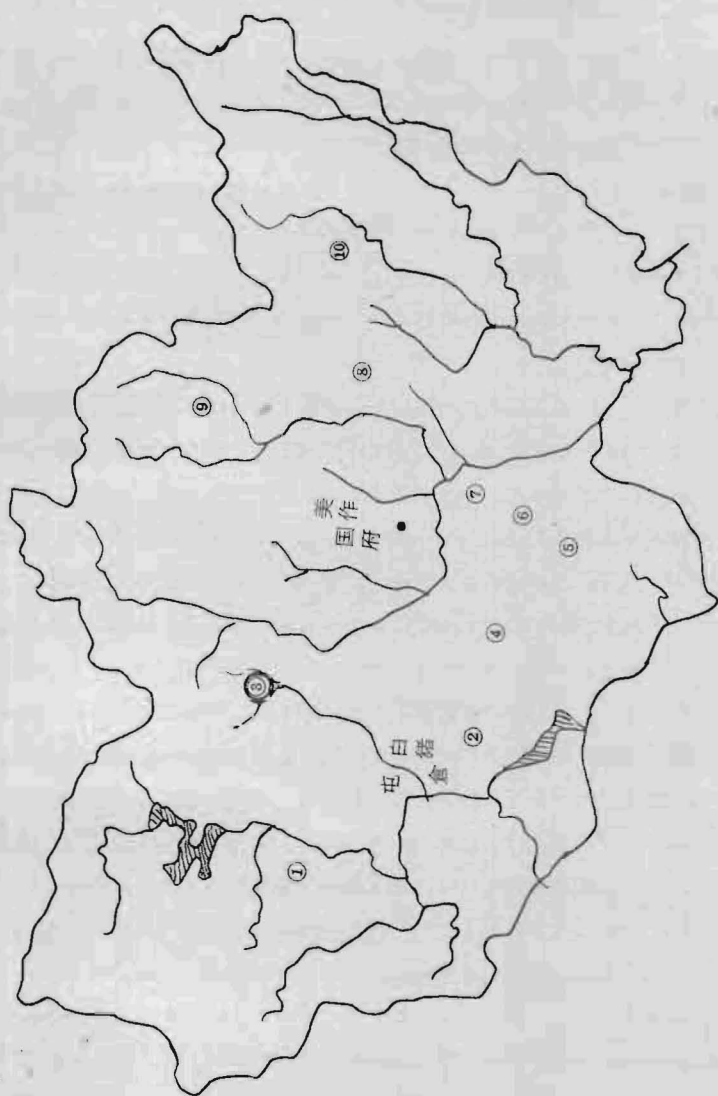
『作陽誌』によると、古代、上斎原は富庄の管轄地であったという。そこで富庄の歴史をおっていく中で、上斎原を位置づけてみたいと思う。

『作陽誌』は富庄として次の24ヶ村をあげている。久田下原村・^{つたり}村長外路村・土生村・黒木村・久田上原村・河内村(以上久田村、今の奥津町)杉村・井坂村・養野村・四口野村(今の至孝農村)・女原村・西屋村・箱村(以上泉村、今の奥津町)奥津川西村・奥津川東村・下才原村・長藤村(以上奥津町)羽出村(今、奥津町)・上才原村(今、上斎原村)・富東谷村・富西谷村・付大倉村・富仲・間村・大村・楠村(以上今の富村)中谷村上村・中村・下村(以上中谷村、今の鏡野町)。すなわち、富庄は苫田郡の西北部一帯を占め、鳥取県東伯郡と接している。中国山地の背筋にあたっているため、大部分は山林地帯であり、吉井川、目木川、余川などの溪流が流れ、平地といえは、わずかに富西谷・東谷あたりにみうけられるにすぎない。

(ロ)古 代

中国縦貫道建設工事にともなう緊急発掘によって、美作においても、歴史は、縄文時代をかなりさかのぼることができるようになった。中谷村のすぐ近く、吉井川にのぞむ小高い丘に立地した鏡野町竹田遺跡では、縄文時代の住居趾が発見された。さらに奥まった山岳地帯である富村の西谷「横^{たわ}の川」・奥津町の大神宮原でも縄文式の土器片が拾集されている。しかし、これらについては、孤立しているので関連があるとは考えにくいし、何分にも小片のため背景となる遺跡の存在の可能性はうすい。富庄の地に入が定住しはじめた時期は、美作地方に稲作が入ったと考えられている弥生中期をさかのぼることはないであろう。富村の東谷沼ヶ谷・西谷横見谷から石槍や石斧とともに、石包丁や弥生式土器が出土している。ここでの稲作経営は、地形的にみて、谷水田以外に考えられず、灌漑技術のすすんでいなかった初期の段階では、安定した収穫は望みえなかったであろう。そのため狩猟採集経済から完全に脱却することはできず、農耕と併存していたものと考えられる。古墳も、富村では数基あり、鉄剣や曲玉や耳環などの副葬品も出土している。富村以外の地域では、弥生遺跡も古墳も今のところ見つかっておらず、わずかに、人形峠で弥生式の土器片が拾集されたり、奥津町長藤村で横穴式石室が発見されたぐらいであった。吉井川上流の地域に、谷水田や古墳の存在の可能性がない訳ではないが、いちおう、この地は、大部分が原始林におおわれた地帯であって、その中で富村は、比較的早くからひらけた所であったといっていよう。

この地が律令体制下での何郷であったかということを調べている内に意外な実事にぶつかった。『作陽誌』には、和銅6(713)年4月に備北部六郡を割いて、美作国を置いたという記録がある。六郡とは、苫田郡・英田郡・勝田郡・久米郡・大庭郡・真島郡である。ついで貞観5(863)



⑩根並庄

⑦佐良庄

④倭文庄

①建部庄

⑧大言庄

⑤弓削庄

②河内庄

⑨青柳杣

⑥稲岡庄

③登美杣

「岡山県の歴史」 岡山県昭和37年

—— 古代の岡山県歴史地図より ——

図 3-1-1 美作の狂園

年5月16日に、香々美川を境に苫田郡を東西に分割している。この苫西部は、「和名抄」によれば、平安中期、田中郷・田辺郷・吉原郷・田邑郷・能鷄郷・大野郷・香々美郷の七郷から成っていたという。そして、能鷄郷が今日の中谷村を含んでいたというから、富庄の地域も能鷄郷に属していたのかもしれない。又、「美作略史」に「富村附近の地、即ち、布勢郷は、もともと大庭郡に属したりしたが、平安中葉の頃苫西部に入れり」という記事がある。地形的な観点に立つてこの地をみた場合、吉井川流域と、旭川の支流である目木川・余川流域との2つに分けられることから、富村と他の吉井川流域（中谷村・奥津町・上斎原村など）とは、もともと別の郷、別の郡に属していたとも考えられる。平安中期までの富庄の地が、布勢郷であったのか、能鷄郷であったのか、あるいはどちらにも属していたのかははっきりしない。

律令期を通じて、大庭郡のあたり、山陽東部は鉄の重要な供給地であった。60の白猪屯倉も大庭郡のどこかにあったといわれている。ここでは、早くから田部の丁籍（のちの課丁の帳簿）や田部の名籍（のちの戸籍計帳）が採用されており、かなり重要な屯倉であったと考えられる。また、「続日本紀」の記事にも、「神亀5（728）年、美作国言ス。部内ノ大庭・真島ノ二郡、一度之内、輸スル所ノ庸八百六十余斛ナク、山川峻遠ニシテ運輸大ニ難ミ、人馬並ニ疲レテ捐費極メテ多シ。望ミ請ラクハ、米ヲ輸スルノ重キ、綿鉄の輕キニ換ヘン」というのがある。大庭郡・真島郡では、庸米のかわりに鉄や綿を差し出すことが許された訳である。古代の大庭郡については、鉄の生産と、もう一つ特筆すべきことがある。それは、式内社（延喜式神名町に登録された神社）が美作国一国に十一座あり、その中の八座を大庭郡が占めていたということである。しかも、その八座全部が「社」（現在、湯原町）に鎮座していたと『作陽誌』は断定している。このことについて、『岡山県通誌』や『美作の民俗』では、八社は大庭郡の、北は八束・川上村から南は河内・川東村にいたる中間に鎮座していて、「社」に鎮座していたのは三宮菟上神社のみであったといっている。また、『富村・郷土史』では、八社のうち六社までが和気氏に縁をもつ祭神であることから、美作国造であった和気氏の力で大庭郡が開け、民心も安定したので、和気氏が中央に進出する時、郡内各郷にあった祭神を「社」に集合祭祀したのではないかと推察している。加えて、『美作鏡』に富村西谷に鎮座していたと伝えられる横見神社は、和気氏にゆかりはないけれども、富村が苫西部に移るとき、「社」に移謚祭祀されたのではないかと推考している。いずれにせよ、当時、美作国における大庭郡の占める地位は、人口・生産・文化などの面において高いものであり、富村もその先進地域の一部であったと推定できる。

（イ）登美柚から富美庄へ

富庄はいつたいつから文献にあらわれるのだろうか。このことをうんぬんするには、まず京都御室派仁和寺書庫旧蔵の布施社古文書からはじめなければならない。この文書は大治3年（1128）から応永7年（1400）までの十五通からなり、問題は、この「美作国布施社」の所在が不明瞭なことにある。文書から「美作国布施社」は、平安末期から仁和寺の重要な神社であり、文治2年（1186）に無量寿院に寄進してからは、仁和寺無量寿院領になっていることがわかる。もし、この「美作国布施社」が『美作の民俗』『神社と祭祀』の部や、『富村・郷土史』の主張すること

く、富庄総鎮守の布施両社大明神だとすれば、富庄は、平安末期までさかのぼることができる訳である。確かに、富庄総鎮守布施両社大明神は、お田植祭や、「大宮踊」など、神事に古態を存していたといわれており、式内社に指定されてはいないが、かなり古くからの格式高い神社であったと推察される。しかし、「美作国布施社」そのものだとする確証はない。一方、「美作民俗」の『古代・中世の美作の部』は、八束村中福田に鎮座している福田神社（旧郷社）が「美作国布施社」の後身ではないかとして、「何となれば、『作陽誌』や『福田神社書上』によれば、福田神社は古くは大森大明神、布施総社、郷の大宮などと称したとあり、福田神社と公称したのは明治以降のことだからである」と述べている。現在、福田神社は、長田神社とともに蒜山盆地の大社で、古式のお田植祭や「大宮踊」も行われ、古面や古楽器も伝存しており、これも古くからの伝統をもっている。どちらが正しいとか何が正しいとかいった評断はくだしにくいので、ここでは両説の紹介にとどめておいて、富庄が文献に名をとどめるのは、鎌倉時代の末期を待つことにする。



富在の総鎮守といわれる
布施両社大明神
(その1)



布施両社大明神（その２）

即ち、「作陽誌」に記載されている下記の文書である。

富庄、富古作登美、近世字、山城国賀茂社記日、乾元二年正月廿九日賀茂宮御造宮云々、上卿坊城中納言、同年三月二十一日宣下、課用途於諸庄、材木者美作国登美之杣也云々、此庄至今山林蔭巨木良材多出此焉 このことから次のことがわかる。

一つは、乾元2年（1303）に富庄は、登美杣と称されていたこと。あと一つは、「山城国賀茂社記」によると、山城国の一宮であった賀茂社の造営費として、朝廷が登美杣に材木を課したことである。杣とは、材木を採取するための山林であり、東大寺・興福寺などは、その造営のための木材の供給地として所々に杣をもっていた。こういった王臣家・寺社などが山林原野を占有していきようすは、すでに80のはじめからうかがえる。慶雲3（706）の頃には「王公諸臣が多く山沢を占め、その堺が峰をこえ谷に跨る有様」であり、和銅4年（711）には、「百姓の業を妨げるに至った」とさえ言われている。⁽¹⁾その上墾田永世私有令の施行は、これに拍車をかけ、しだいに、山野は独占されていった。これに対し、朝廷は、延暦以後しばしば「王臣家・寺家等が山林の利を専らにする」ことを禁ずる法令を出しているが、⁽²⁾これは、あまり力をもたなかったと考えられる。というのは、貴族・寺院などは、ただそうした山林原野の占有にとどまらず、東大寺領伊賀国鞍田荘にみるごとく、占有した杣や牧をしだいに荘園化していったのである。このようにして、美作にも、次々と荘園や杣がつくられていったと考えられる。（地図参照）杣は、山地であるから、開墾にはきわめて不便なところである。しかし、材木の伐採を業としていた杣工たちは、その生活の必要から、伐採跡地の開墾をおこない、徐々に耕地を拡げていった。良材の供給地であった登美杣も、こういった形をとって荘園化していったと推定される。

瀬戸内海調査『山村の生活』によると、南北朝時代前期に、登美杣は荘として、京都の三時智恩寺文書にあらわれる。

(端 裏 書)

「御領目録 自広美門院被進
光明院」

ものかき候ことむつかしく候ほどに、かやうにかゝせまいらせ候へく候

(朱 字)

「光厳院御筆」

長講堂領丹波国野口庄、

摂津国葦屋庄、尾張国篠木庄、

備前国鳥取庄内中村、

法金剛院領美作国富美庄、

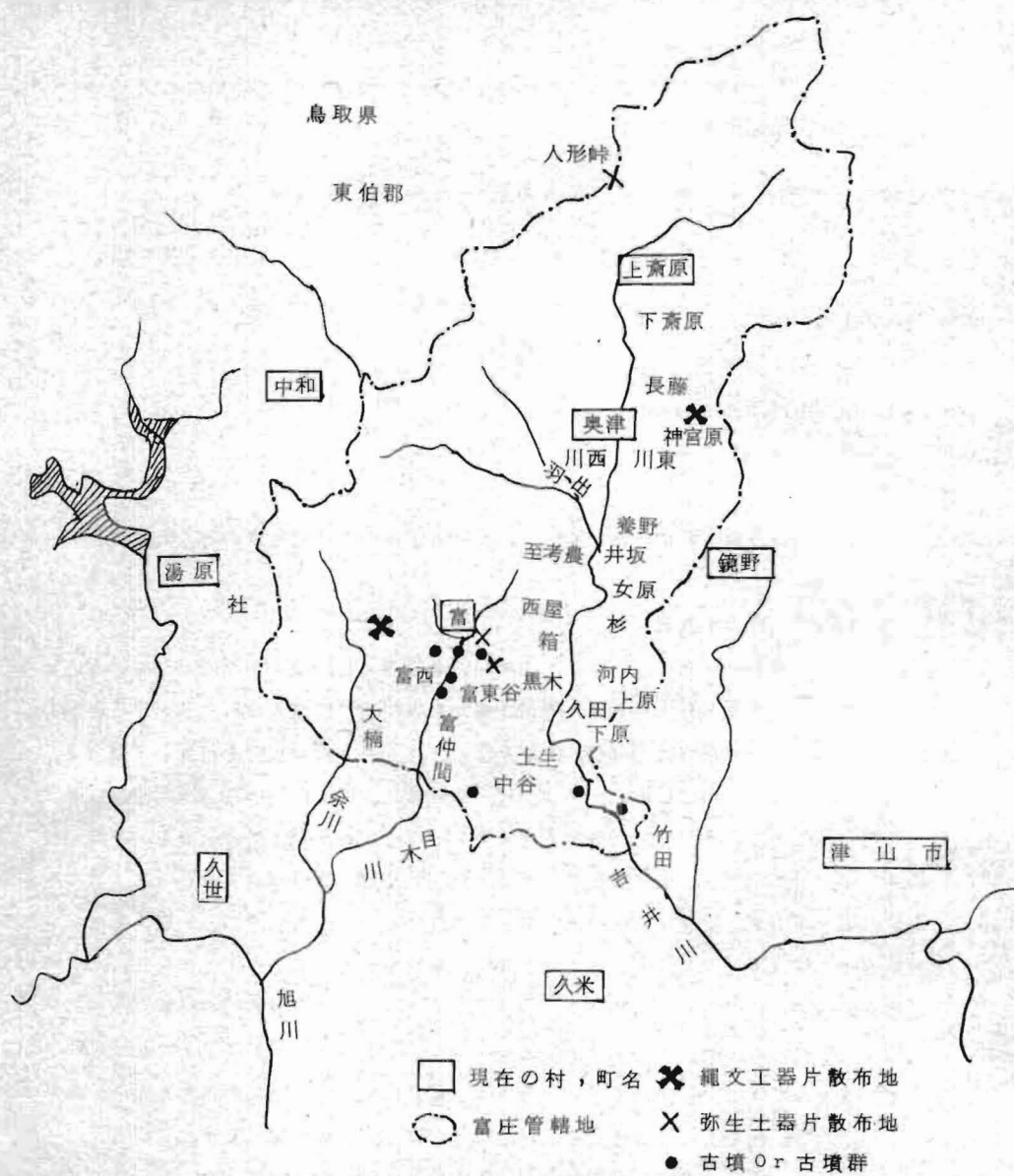
越前国敦本庄

この所々一、こののちは新院の御さに候へく、長講堂領はのちにはその御くわんれい候へきにて候、あなかしく。

貞和五年九月十五日

この文書によると、登美杣は富美庄となり、法金剛院を領家とし、皇室を本所としていたということ、貞和5年(1349)9月15日に、光厳上皇から光明上皇に譲渡されたということがわかる。法金剛院は、鳥羽天皇中宮待賢門院が、大治5年(1130)に双丘寺を再興して離宮とし、法金剛院と改称したところからはじまる。また、法金剛院領は、待賢門院から上西門院、宣陽門院、鷹司院へと譲られていく。そして、文久9(1272)には、後深草上皇に伝わり、その後は、持明院統領として、長講堂領とともに移動していく。持明院統は、天皇擁立をめぐって大覚持統と争うが、幕府の力をかりて、伏見・後伏見天皇擁立に成功する。しかし、そのために、しだいに幕府の操り人形と化していき、元弘の変(1331)で、幕府が光厳天皇をたててからは、もはや自力で王朝政權を組織する力はなくなっていた。建武元年(1334)大覚寺統の後醍醐天皇の親政が始り、光厳天皇は廃され、所領は後伏見上皇に安堵される。しかし、その所領も在地で押領され、形式的なものとなっていった。建武2年(1335)足利尊氏は武家政治の再興を謀り、建武中興も中途にして崩れる。時の美作守護赤松則村は尊氏に属し、美作の諸士もこれに従った。翌年、尊氏は持明院統の光明天皇をたて、北朝と称し、美作は北朝の統治下に入った。貞和4(1348)年崇光天皇が即位し、その後、所領の譲渡や天皇擁立をめぐって持明院統(北朝)は幕府と対立するが、すでに形骸と化していて、幕府の思うままであった。富美庄の記録されている文書は貞和5年(1349)であるからまさにそのような状況下にあったわけである。

この後も美作国では、守護職は赤松氏によって引き継がれるが、因幡・伯耆・出雲へと勢力をのばしてきた山名氏は、延文5年(1360)ころより美作を攻め、貞治3(1364)には山名義理が守護職となり、山名一族は十一ヶ国を制する権力者となった。ところが、明德2年(1391)



新日本分県地図
岡山県(1:23800)

図3-1-2 富 庄

山名氏清が幕府に謀叛を起し、敗死したので(明徳の乱)、美作国は再び赤松氏の統治下となった。そして翌年、南北朝は統一され、この後五十年ほどの間、安定期に入った。

嘉吉元年(1441)備前・播磨・美作の守護、赤松氏は、將軍足利義教の専制的な支配に不満をいだき、暗殺するが、すぐに追討の軍がおこり、赤松氏は潰滅の運命をたどった(嘉吉の乱)この時、最も功のあった山名氏が再び美作の守護となり、その後、赤松氏が再興されるけれども、応仁年間にいたるまで、美作・備前・播磨は依然と山名氏の配下にあった。このように、美作国では、南北朝の内乱から百年有余の間、赤松氏と山名氏の戦いがつづき、交互に守護職を奪取していったのである。「山村の生活」によると、このころの富庄に関する記事が『蔭涼軒目録』に載っている。寛正元年(1460)閏九月十五日の条に

十五日、当寺(注 相国寺)領富美材木遵行難波之事、重披露之、以左衛門大夫、堅被仰付于守護方也。と見え、十月二十一日の条に

廿一日、作州守護山名兵部少輔、依富美庄材木遵行被出飯尾左衛門大夫、可懸于御目之自由之、仍披露之。

と記載されている。

当時、富庄は、相国寺の荘園であり、美作守護山名政清に、材木を輸送するように要請している訳である。幕府は、守護に、半済(任国内の荘園の年貢の半分以上を兵糧料として徴収する権利)や守護請(荘園や国衙領の年貢を請け負う制度)を認めたので、守護大名の領国支配は着々と進み、その権限を越えて荘園や国衙領を侵略していった。一方、領家の権力は衰え、守護方が荘民から、年貢や臨時の諸課役をきびしくとりたてるけれども、領家に対しては年貢の滞納を重ねるといった事が所々でみうけられるようになっていった。備中新見庄は、東寺領であったが、ここでも守護権力を背景に代官が横暴な支配をつづけたので、寛正2年(1461)ついに荘民の不満と反発が爆発し、名主・百姓団結して守護方の支配を排除するといった事件がおきている。荘園は、除々に領家の支配から切り離され、守護大名の手中に入るけれども、その間に在地の荘官や百姓の団結がすすみ、各地で土一揆が続発した。先の富庄の記事が書かれて十年も経たぬうちに、応仁の乱が始まり、美作国でも中央では、赤松・山名両氏の戦乱が続く、互に勢力を拘り減らしていたが、地方では、守護代以下被官や国衆たちがしだいに勢力を築いていた。大永元年(1521)、赤松氏の有力な被官であった浦上氏によって、赤松義村が殺害され、永正・大永年間(1504~1527)を境に、山名・赤松両氏の守護大名としての領国支配はくずれ去った。

在地においても、土着の武士や名主たちの成長していく力の前に、守護大名の領国的支配体制はしだいに後退し、かわって、在地の名主・百姓を直接に掌握していた土着武士勢力の封建領主化への道が開かれていった。文明3年(1471)、守護の支配に対しては激しく抵抗した新見庄の荘民も、在地の実力者が幕府の代官として入部するときにはその支配を容認してしまう。このいきさつも、こういった時代の推移を示している。領家の地位は、ますます有名無実と化し、守護の支配権も再び及ぶことはなく、荘園的土地支配は崩れ去っていったのである。

㊦富庄と上斎原

以上述べたところで、富庄の中世のアウトラインはうかがえたけれども、いつから上斎原が開拓されたのか、荘民の生活はどうであったのかということはほとんどがわからない。ここにわずかではあるが、それらについて考察してみようと思う。

上斎原神社に保存されている棟札のうち、最古のものは、長祿2年(1458)の栗材の棟札である。そこには、

長祿二 寅八月吉日、本殿造営

と記してある。又、上斎原村には『松野荒神由来記』という、松野荒神という氏神の由来を綴った文書がある。そこに、

作 為西々条郡上斎宿場横十軒ニ足らざる家別追而増長志たるお委く尋ニ文祿元年秀次公の御治代ニ伯為河村郡上居弾正落城之節一家中の者方々と流乱いたし……(省) 此上斗と言ふ所 永宇 弘ん寺と申而 纏の小寺有。此寺ニ可く連逗留致す内 永……(省) 小兒も同じく病氣付大熱ニなや ま連乳放れ成れ共穀の類ハ一向不進。……(中略) 三宝大荒神日ク……(中略) 此処に勧請して呉れなば其子一命を助けよき人に救ハセ可申。亦村内繁昌民増長無疑と言ふて失 永け利。」とあり、このことから文祿のころ(1592~1595)に、家が十軒足らずあったことが推察される。

奥津湯神社(大正十四年合祀され、奥津神社となる)も射水神社(泉岩神社)も古くからの神社であるといわれているが、確証となるものは残っていない。ところが、『吉備地方の研究』によると、富村王村には至徳4年(1387)の棟札があり、これを解釈して「至徳4年に若王子権現社が追造されたこと、大願主は当村一村結衆、すなわち応村の住民によって為されたことがわかる。費用の寄進者は勿論村人であるが、有力者は米絹馬の他に銭も奉加している。」と述べている。

王村は余川の流域にあり、山林におおわれた富村においては、富西・東谷についで平地のあるところである。王子権現が創建されたのは至徳4年以前であり、再建されたこの時には、すでに相当な有力者もいたようであるから、乾元2年(1303)、登美杣が文獻にあらわれたところには、相当な山狭の集落を形成していたと推定される。又、『美作略史』は、布施両社大明神について「久田・中谷・羽出・才原諸村の総鎮たり、毎年其祭日に各村の民、神輿十二を昇ぎて来集し、清饌を供し、各々痛飲し、而して後軍事を模す、俗に之を神軍と称す、天文年中、弓刀を用て相闘ふ、死する者一百余人、之を富東谷村に合葬す、今百人塚と称するもの即ち是なり」と述べている。一般に各惣村が郷の中心にある総札に御輿をくり出して集結するのは、郷の団結を示す、大デモンストラーションだと言われている。そういった、祭自体の意味や、上斎原の開拓の時期を考えあわせてみて、神軍が催され始めたのは、南北朝時代をさかのぼることとはないと推考される。上斎原神社が造営された長祿2年(1458)頃には、各村にも神社が造営されていたろうし、天文年中(1533~1554)に神軍祭が絶え、天正十一年(1583)に布施両社大明神の社領が没収された時までには、村民の信仰の対象はその村の神社、上斎原村でいえば上斎原神社へと傾いていったと推察される。こうして、荘園の崩壊とともに、その荘内の団結もくずれていった。

2. 戦国期の争乱

永正・大永年間(1504~1527)に、赤松・山名氏の領国支配がくずれ去った後、五十年余り美作国内は群雄割拠の状態となり、尼子・毛利・浦上・宇喜多・三浦・後藤と、交戦にあけくれたのであった。

『岡山県の歴史』によると、天正元年(1573)の頃の美作の全般的な形勢は、「備前南部から西部にかけての一帯、および備中東南の一部と美作のうち久米郡は宇喜多氏、備中の大半と西美作は毛利氏の支配下にあった」という。ちょうど美作は三氏の接点にあたり、富庄一帯にもその頃の戦況の跡がうかがえる。

永祿の頃(1558~)より、西方の毛利氏が、尼子の配下の備中・美作へと進出し、永祿の末(1569)には、西美作一帯はほぼ毛利氏の支配下となった。しかし、再び尼子氏が勢力をもちかえしてきたので、これを撃退するため毛利方の小早川隆景が奥津・才原に出陣したという記事が『草刈氏興亡記』にみうけられる。古戦場としては残っていないが、このころ富庄の地は毛利氏と宇喜多氏の勢力が入り交っていたらしく、天正年間の岩屋城の戦・西屋城の戦いは、それを如実に示している。元来、宇喜多氏は、浦上氏の被官であったが、浦上宗景が織田信長と通じたことから、宇喜多直家は毛利氏と和し、天正5年(1577)浦上氏を滅した。信長の命をうけた羽柴秀吉は、宇喜多・毛利の連合勢力と戦うのであるが、天正6年(1578)ころから宇喜多直家の態度があいまいになり、翌年ついに毛利氏と袂を別って、秀吉に応じた。毛利・宇喜多両氏の勢力が入り交っていた美作では、こうして激しい戦いが始まるが、岩屋城の戦や西屋城の戦もその一つであった。以下、『苫田郡誌』にそって、これらの戦況をたどってみたい。

岩屋城は久米郡中北上にあり、宇喜多の部将浜口家職が守城していた。一方、富庄内には、毛利氏の部将、中村頼宗の居城葛下城(中谷村)と、主大原主計の居城西浦城(養野村)があり、天正9(1581)6月、共に岩屋城を攻めおとした。その功によって、中村頼宗は岩屋城に入り、葛下城は宰臣浅山國書に守らせた。又、主大原主計他、家臣には、中村頼宗や毛利輝元・小早川隆景から感状が与えられ、その記録は津山郷土館美作古簡集や『作陽誌』によって今に伝えられている。

西屋城は泉村養野にあり、宇喜多の部将花房助兵衛職之(久米郡荒神山城主)が苔口利長、難波信正らに守らせていた。しかし、毛利方の中村頼宗の部将に攻撃されるので、宇喜多氏は、小田草城(馬場)主、斎藤近実に援助させた。そこで、毛利方は西屋城を囲み持久の策をとった。城内では食糧が尽き、斎藤近実の部下は樽瀬(井坂村)に出かけ、そこで中村の武下牧成氏に攻撃されたが、逆にこれを殺したという話も伝えられている。毛利方は包囲を続けていたが、深雪にあい、やむなくいったんは包囲を解き、翌春再び攻撃を始め城を落したという。

天正十年(1582)信長の死にともない、秀吉と毛利との和平が成立したが、その後も美作では所領の境界の確定をめぐる紛争が続き、岩屋城の中村頼宗、高山城(加茂町)の草刈重継らは、あくまで毛利氏に党して宇喜多氏に従わなかった。天正十三年(1585)になってやっと解決をみ、高梁川を境に備中東半および備前・美作は宇喜多秀家に与えられた。慶長5年(1600)秀家は関ヶ原の戦において豊臣方につき、敗退し、小早川秀秋がこれによってかわった。しかし、

翌々年に歿し、嗣子がなかったので国除となり、慶長8年(1603)森忠政が美作鶴山城主十八万六千五百石の大名として入国したのである。

上斎原は、室町時代の中半ごろから開拓がすすみ、桃山時代の末期には、今だ、十軒たらずの小さな集落を形成した段階であって、この地が、一つの地域として歴史的に意味をもつには、近世を待たねばならなかった。

(鈴木澄子)

第4章 近世の上斎原

1 領主の系譜

(1) 宇喜多から小早川へ

戦国時代の争乱の中で、美作地方も近隣諸豪の勢力争いの場となっていたが、天正10年(1582)6月高松城水攻めの後の羽柴・毛利間の講和成立によって、この地方一帯は宇喜多秀家の領するところとなった。しかし、なお旧毛利方の土豪たちの反抗は強く、慶長3年(1598)秀吉の死を契機として、宇喜多氏の支配も動揺し始める。そして、慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦において、宇喜多氏は西軍に味方し、これに敗れたため滅亡することとなった。

慶長5年10月、宇喜多氏の遺領は、関ヶ原の合戦で途中東軍に寝返りこれを勝利に導いた小早川秀秋に与えられ、美作一帯もその支配下に入った。秀秋は名将小早川隆景の養子で、豊臣秀吉の夫人高台院の甥にあたることから秀吉の深い寵愛を受けていたが、秀吉の死後石田三成との間に不和が生じ、これが関ヶ原の合戦中の徳川方への寝返りの原因になったともいわれている。秀秋の岡山城入城後の行動は、放鷹・殺生を好み遊惰にふけるなど狂気じみた振舞が多く、それが原因で家中に騒動が起るなど国政は乱れる一方であった。折しも慶長7年(1602)10月、秀秋は23歳の若さで死去し、嗣子がなかったために、小早川家は断絶の憂き目をみることとなった。

秀秋は実際の統治にあたって、杉原重政と稲葉通政を「仕置」として政務にあたらせており、領国内の総検地を行なって石高を打ち出したとか、領国内の諸城をこわしその一部を使って岡山城の補修を行なったとかいうことが伝えられてはいるが、業績らしいものは格別みられない。

そして、小早川家除封直後、大阪奉行浅野長政が政令を下し、小早川家の遺臣が勝手に折紙(年貢徴収状)を発行して年貢を徴収することを厳禁している。

(2) 森家津山藩の支配

小早川秀秋の死後、備前・美作両国の支配関係は大きく変わり、慶長8年(1603)2月、備前国28万石には池田輝政の次男忠継が、美作国18万6500石には森忠政が封じられ、ともに外様大名による藩政がこれより始まるのである。

ここで、美作国の新領主となる森家の系譜について少しみてみよう。森家の先祖をたどると、清和源氏八幡太郎源義家の6男義隆を祖とし、これにより「森」を称している。義隆の子頼隆が政争のため一時「若槻」を称して潜んでいた時期があったが、頼隆の子頼定が再び森を称し、以後戦国時代に至る。14代森可成は武略に長じ、信長に仕えて数多くの戦功をたて、金山城(現在の岐阜県兼山町)主に用いられた。その子長可も父と同じく信長の寵遇を受けた。長可の弟に長定(蘭丸)があり、信長の側近として仕えていたことで有名である。忠政は長可・長定の弟にあたり、兄長可が長久手の戦いで戦死したあと、父祖の遺領金山城を継承しており、秀吉に格別

の寵愛を受けていたのであるが、秀吉の死後石田三成ら主流派と意が合わず、家康の側につくに至った。そして、家康の厚い信頼を受け、慶長5年2月には信濃川中島4郡13万7,500石の領主とされた。そして、関ヶ原の合戦での功績が認められ、ここに美作国主にまでなったわけである。

忠政は入国後、慶長9年(1604)春には築城にとりかかり、美作のほぼ中央にあたる津山盆地の中心部に存在する鶴山を選び、「津山」と改めてここに城を築いた。以後、津山は美作における中心都市として発展するようになる。また、忠政は築城とともに領内において総検地を行なった。それまでの検地が「差出^{ししゅ}」^{ししゅ}といって、村方からの申し出を中心に行なわれていたのに対し、忠政は検地奉行を選任し、彼らに村々を巡らせ、詳しく村の実情を調べさせることにより検地帳を作製した。この検地帳には、田毎に地名・等級・面積・石高および所有する農民の名が記載されており、これをもとに藩は農民に年貢を課したのである。この検地の結果、藩は農民の所有する土地の面積・質を明らかにすることによって、年貢賦課体制を整備することができ、その意味で忠政が行なったこの慶長検地は大きい意義をもつ。この慶長検地の詳細な内容については、後の「検地と村高」の項で取り扱うことにする。

寛永11年(1634)忠政は上京した際急死を遂げ、忠政の養子であった長継が跡を相続することになった。長継の施策はほぼ忠政の方針を踏襲し、特に宗教面では、社寺造営を盛んに行なうとともに、一方ではキリシタン・不受不施派などの取締りも厳しく行なった。この頃諸藩では、藩の基礎が確立すると、嗣子以外の男子に一家を創立させ、分知を与えるとともに、幕府の許可によって大名の列に加えることが行なわれていた。津山藩においても、長継が実弟関長政(長継は関家出身で忠政の養子となっていた)に美作のうち18,700石を分け与え、これを大名に取り立てている。

延宝2年(1674)長継は隠居し、長継の第3子長武が跡を継いで藩主となった。長武はわがままで、彼の失政によって藩政は大きく乱れたと伝えられている。そのためか貞享3年(1686)42歳の若さでもって隠居し、長継の嫡孫にあたる長成が藩主となった。長成は執権長尾勝明の補佐によって前代の弊政改革に努め、元禄文化華やかになりし中央の影響を受け、美作一帯も平和に包まれ、文化興隆の機運も高まっていた。

元禄10年(1697)6月、長成は病篤に臨んで、嗣子がなかったため関式部衆利を養子とせんことを幕府に請ったが、衆利が江戸出府の道中において高熱のため狂乱し、ここに森家は領地を没収され、断絶する。しかし、長継はなお存命であったため、森家は新たに備中国後月・哲多・窪屋・浅口・小田5郡に長継の隠居料として2万石を賜わり、西江原に拠り、ここに新見藩が始まる。

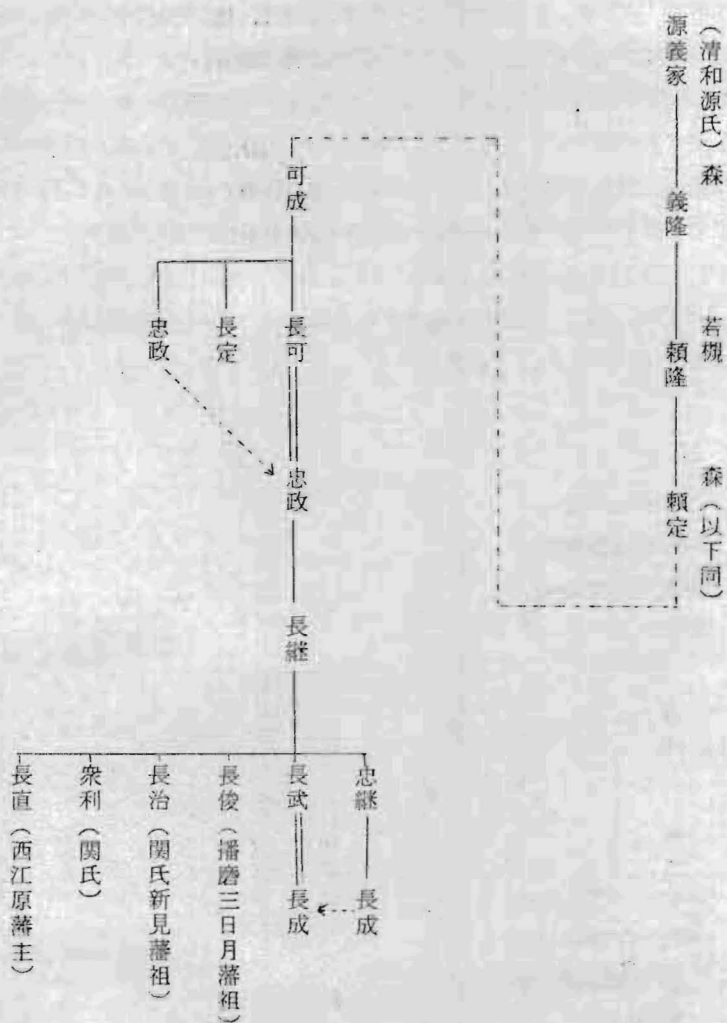


図4-1-1 森氏の略系

注) 「苫田郡誌」(昭和2年発行)により作成。

(ハ) 松平家津山藩の支配

森家断絶後、美作一帯は一時幕府代官の支配下に入るが、美作全域の代官支配はわずか5ヵ月で終わり、元禄11年(1698)1月には松平長矩(後宜富と改める)が美作国の内10万石の新領主として入封した。上斎原村もこの松平家津山藩の支配下に置かれ、残る8万6,500石の地域では幕府代官による支配が継続された。

ここで、松平家の系譜について少しみてみよう。長矩は陸奥白河藩主松平直矩の次男で、元禄

6年(1693)松平光長の養子となった。この家は、徳川家康の3男で豊臣秀吉の養子となった秀康に始まり、一時結城氏を称していたが後に徳川親藩の称姓であった松平氏に改め、関ヶ原の合戦での功績によって越前北庄(現在の福井県)67万石の領主となった。2代忠直は国政を顧みることを怠ったため元和9年(1623)改易処分を受けたが、その妻が將軍秀忠の娘であったので、その子光長は寛永元年(1624)越後高田(現在の新潟県)26万石に封ぜられた。しかし、光長も家老小栗正矩の専権に端を発する後嗣をめぐるお家騒動に巻き込まれ、天和元年(1681)改易処分を受けた。長矩は4代目として元禄10年(1697)5月に家督を継いだ。封地はなかった。そして、翌元禄11年1月19歳の時はじめて封地を給せられ、津山藩10万石の新領主となったのである。

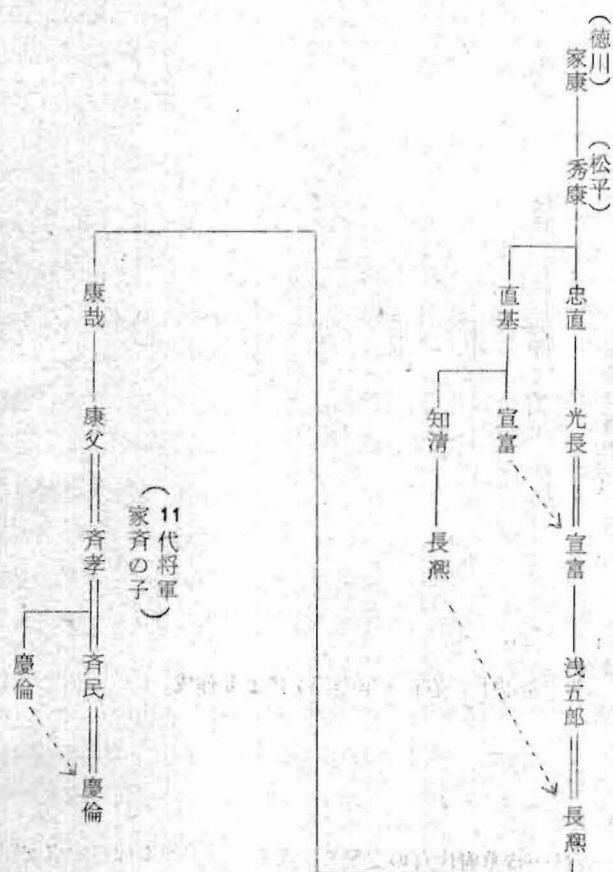


図4-1-2 松平氏の略系

注)「苦田郡誌」(昭和2年発行)により作成。

2代浅五郎は享保6年(1721)父の死後6歳で江戸において家督を相続し、一度も領国にやってくることなく、享保11年(1726)11歳の若さで死去した。

幼くして亡くなった浅五郎には当然実子はなく、当時の幕府の慣例では後嗣のない場合は断絶領地は没収というのが通例であったが、將軍家の枝流ということで特別に藩祖長矩の甥長瀨に家督相続が許された。しかし、この時10万石から5万石に減封され、東北條郡内の阿波・物見・山下・知和・宇野の諸村、西北條郡内の岩屋・越畑・大町・寺和田の諸村、西々條郡内の山城・黒木・富・奥津・下斎原の諸村および当上斎原村などは幕府領となった。

この後、上斎原村は幕府代官によって80年間あまり支配されるが、文化9年(1812)松平家津山藩の預所下に入り、幕府領でありながら実際の支配は津山藩に任されることになった。

文化14年(1817)10月、7代藩主斉孝は勝南・勝北・東北條・西々條・久米北條・大庭の6郡の中で5万石の加増を受け、10万石に復せられたが、上斎原村もこの時津山藩本領に組み入れられた。斉孝は文化2年(1805)18歳で襲封以来、文化文政の泰平の時代に凶作に備えて領民に穀類を貯えさせるとともに、城中にも穀を貯えるなど善政を展開した。

8代斉民は天保2年(1831)襲封以来各地で新田開発を積極的に行っていたが、天保9年(1838)幕府に請って封地の一部変更を認められ、これ以来、上斎原村は再び幕府領となった。しかし、以前と同じく津山藩による預所支配とされ、実際の統治管理は津山藩によってなされたのである。

(二) 幕府領期

上斎原村は享保12年(1727)松平家減封の際幕府領に入り、この後文化14年(1817)再び松平家所領となるまでの90年間、時々私領となる期間もあるが、だいたいにおいては幕府領として支配されていた。図4-1-3は三船家所蔵文書「萬覽引付帳」(元文元年)・「免定」および『苫田郡誌』(昭和2年発行)により作成したものであるが、以下、これによって幕府領期の支配をみてみよう。

享保12年松平家減封とともに、幕府は内山七兵衛を代官としてこの地に派遣し、七兵衛は英田郡倉敷村(現在の美作町)に陣屋を置いて美作一帯の支配を行なった。同年8月には窪島作右衛門がこれに代わり、陣屋も上記の倉敷村から大庭郡久世村へ移している。元文元年(1736)池田喜八郎が代官となったが、彼は当時倉敷代官を勤めており、預所として久世代官支配領域であるこの地をも治めることになったわけである。この後、平岡彦兵衛・永田小左衛門がそれぞれ代官を勤めたが、ここで幕府代官による直轄支配は一時中断する。

すなわち、延享2年(1745)、当時因幡・伯耆国国主であった池田宗恭(当時は松平姓)が美作の幕府領の内7万3,000石を預所として支配することになり、苫田郡内の幕府領は上斎原村も含めすべてこの管轄下に入った。幕府領でありながら管理のみを大名に任せる預所支配であるため、この期間の年貢賦課・統治方針等はすべて幕府の方針に従う形となっている。宗恭は実際の統治にあたって、家臣の堀喜十郎・大口権九郎・沢平八・井上助左衛門・野崎新右衛門らを現地に派遣しており、彼らは英田郡下町(現在の英田郡太原町)において執務している。

宝暦5年(1755)宗恭の子重寛の時再び幕府大官による直轄支配が行なわれるようになり、石黒小右衛門が久世において執務している。以後、藤本基助・竹垣庄蔵・鈴木小右衛門と代官が

続く。

明和7年(1770)には下総国関宿藩主久世出雲守広明が大阪城代に任じられ、所領として吉田郡を含む美作3万3,000石が与えられた。廣明は老臣富田善右衛門・代官八木伝次郎らをして、勝間田村において政務にあたらせていたが、安永3年(1774)廣明が關老に任ぜられ関宿の領有を復せられるとともに、この地は幕府領に戻る。

この後、万年七郎右衛門・花木伝次郎・守屋弥惣右衛門・小林孫四郎・守屋弥惣右衛門・石原清右衛門・守屋弥惣右衛門・早川八郎左衛門と代官が頻繁に代わっている。

天明7年(1787)11月下総佐倉藩主堀田相模守正順が大阪城代となり、東北條宇野村、西北條のうち入・山城・貞永寺村など美作の内4万8,000石を領有することとなった。上斎原村もこの支配下に入る。堀田氏は家臣の荒野佐兵衛・西山伝六らを現地に派遣し、勝南郡西吉田村(現在の勝田郡勝央町)において政務にあたらせた。

寛政11年(1799)幕府によって堀田氏の領地は収公され、この地は再び久世代官早川八郎左衛門によって治められることとなった。

ここで、名代官として有名な早川八郎左衛門について若干触れておこ¹⁾う。早川代官が前任地出羽国尾花沢から美作国久世に転任してくるのは天明7年(1787)7月であるが、着任早々、彼は訴訟書類の山積みしているのにまず驚いたという。これをみれば前代官守屋弥惣右衛門の職務怠慢の甚しさが窺えるのであるが、当時の代官の支配はかくの如く腐敗していることも多かったようである。当時は全国的な天明の大飢饉の渦中にあり、美作国の農民も甚だ困窮し、そのような状況の中で代官に着任した彼はまず領内の巡視を行ない、民情を一日も早く掴むことに専念した。この領内巡視の際の早川代官と領民との有名なやりとりの中に、彼の治政方針のすべてがあらわれている。

彼はまず大庭郡の南部より西々郡にいたり、さらに大庭郡中北部より備中の阿賀、哲多、川上の5郡99か村を視察したが、これには30日から40日を要したといわれている。新任代官の巡視にあたって、領民は大きな期待と不安を持ちながら、慣習通り仕事を休み土下座して彼を迎えた。この状況をみた早川代官は直ちにこの慣習を改めさせて、「今後代官が巡村する時は、村の庄屋が出迎え案内するだけでよい。農民は平常のように耕作や機織を続けていてよい。決して仕事を休んだりしないようにせよ。」と命じて実行させたという。あくまで形式を廃し実質を重んじた彼の民政は、農民にとってもまさに前代官の支配とは隔世の感を与えたものと思われる。

彼は特に農民の教化について熱心であり、久世に教諭所をつくったり、自ら『久世条教』という教諭書を著してこれにあたった。他面、津山川、旭川、成羽川の改修や修理を行ない洪水による氾濫の防止や、備中吹屋吉岡銅山の復興など数々の業績を残している。彼の転任に際しては、農民代表が江戸表へ留任歎願書を提出したり、彼の出発当日には、領民500人が久世東方3里余までその後を追いつ別れを惜しんだということからも、彼の代官としての業績・農民からの厚い信望を察するには余りある。

早川八郎左衛門転任の後、この地は但馬生野代官の支配地となり、布施孫三郎、つづいて恩田

1700	元禄 11	森 氏	
		松 平 氏	
		内山 七兵衛	
		窪島 作右衛門	
		池田 喜八郎	
		平岡 彦兵衛	
		永田 小左衛門	
		池 田 氏	
		石黒 小右衛門	
		藤本 甚助	
1725	享保 12・5 8	竹垣 庄蔵	
		鈴木 小右衛門	
		久 世 氏	
		万年 七郎右衛門	
		花木 伝次郎	
		守屋 弥惣右衛門	
		小林 孫四郎	
		守屋 弥惣右衛門	
		石原 清右衛門	
		守屋 弥惣右衛門	
1750	宝暦 5 6 11	早川 八郎左衛門	
		堀 田 氏	
		早川 八郎左衛門	
		布施 孫三郎	
		恩田新八郎	
		松平氏(預)	
		松平氏(本領)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
1775	天明 元 2 4 7・8 7・11	松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
1800	寛政 11 享和 元 文化 6 9 14	松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
1825	天保 9	松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	
		松平氏(預)	

図4-1-3 領主の変遷
注1) 三船家文書「萬覚引付帳」
・「免定」および『苦田郡誌』
により作成。

私 領
幕府直轄領
預 所

新八郎が統治を行なった。

前にも述べたように、上斎原村は文化9年(1812)松平家津山藩の預所となり、幕府領でありながら実際の管理は津山藩に委任されることになった。当時の藩主は7代斉孝であったが、同じ斉孝の時代の文化14年(1817)にはこの地は松平家本領に組み入れられた。そして、天保9年(1838)8代斉民の時、封地変更に伴って再び津山藩の預所となり、後に明治維新に至る。

8代斉民は領内に文学所・武芸稽古場を設け文武の道を推進するとともに、義倉を置いたり、富商に穀類を貯えさせるなど、よく民政に意を用いた。

津山藩最後の藩主慶倫は安政2年(1855)襲封以来、藩士の子弟が学ぶ学館を修復し師を集めて学問をおこすなど、文武の道の隆盛に貢献した。幕末混乱の情勢の中で、徳川家の親藩であるにもかかわらず藩士藤本真臣・楠原景長・矢吹正則・鞍懸吉寅などの献策を容れ藩論を勤皇に統一して諸事を統率したのは、慶倫の博識とともに、このような学問推進策により大局を的確に判断しうる人物が養われていたことによるものといえよう。

2 支配の組織と内容

領主の系譜は今までみてきた通りであるが、次に、その領主たちがいかなる組織によってどのように地方支配を行なっていたかについてみていこう。

江戸時代における領主の支配組織を模式図的にあらわすと図4-2-1のごとくなるが、治政者としての郡奉行(郡代)・代官、被支配者身分たる農民でありながら支配者側の組織に入っていた大庄屋・肝煮、被支配者身分たる農民の代表として村政を担当していた村役人について、以下それぞれみていくとともに、その末端の被支配組織である五人組制度についても少し考えていくことにする。

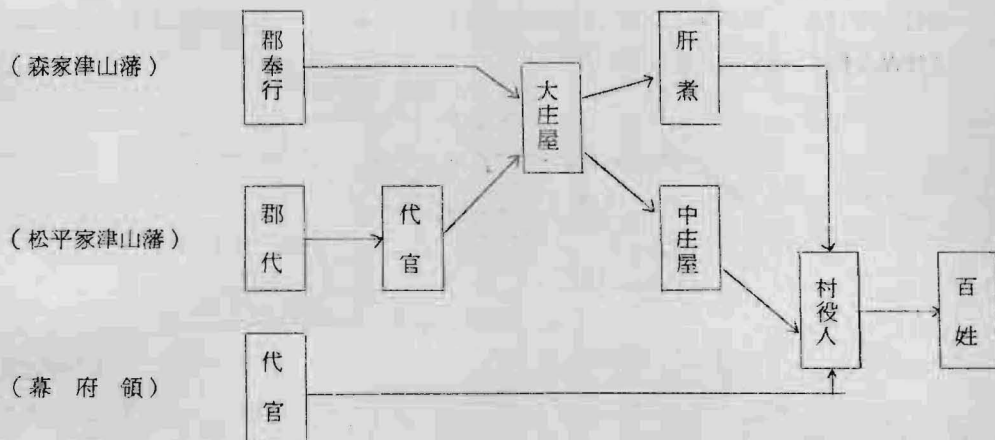


図4-2-1 地方支配の組織

(1) 郡奉行(郡代)と代官

森家津山藩においては、地方支配の最高責任者は郡奉行であり、郡奉行はその配下に下代1人・所務下代3人・書役1人を従え、自宅に奉行役所を置いて政務にあたった。郡奉行の職務は、後に述べる松平家津山藩における郡代や幕府領における代官とほぼ同じであり、治安の維持、農耕の奨励、年貢の賦課と徴収、村方財政の監査など民政・財政全般にわたっている。郡奉行1人はだいたい2〜3郡を担当し、役料として年米25石を受けていた。3代長成時代の郡奉行は元禄初年の「分限帳」²⁾によれば次の6名であり、多くは禄200石前後の中堅クラスの士の中から有能な者が任命された。

(郡奉行)

苦西郡・大庭郡	団	半兵衛	150石
苦南郡・久米郡南分	大野木	弥左衛門	130石
苦東郡・勝田郡北分	岡	与兵衛	100石
苦北郡・吉野郡	三宅	七郎右衛門	200石
英田郡・勝田郡南分	高井	太郎左衛門	200石
真島郡・久米郡南分	川端	治郎太夫	200石

松平家津山藩では郡奉行は置かず、郡代2人を置き、その下に代官を配した。郡代の配下には下代・郡代見習・山方等が従えられ、城下の郡代所で執務した。郡代には郡奉行と同じく禄200石程度の士が任命され、その職務もほぼ同じである。郡代の下に置かれた代官には禄100石程度の士が任ぜられ、下代等を従えてこれまた城下の代官所で執務した。

幕府領は一般に郡代あるいは代官によって治められるのであるが、上斎原村を含む美作一帯は全期間を通じて代官によって治められた。赴任してきた代官はまず支配地に陣屋を築き、そこで執務するわけであるが、一般にこの陣屋は居宅と役所とを兼ねているのが普通であった。享保12年(1727)、最初にこの地に赴任してきた内山七兵衛は英田郡倉敷村に陣屋を築いたが、次の窪島作右衛門によって陣屋は大庭郡久世村へ移され、以来この地域の支配は、時として備中倉敷代官や但馬生野代官による代官兼務の場合もあったが、だいたいに於いて久世村に陣屋を置く代官の手によることが多かった。



図4-2-2 代官所配置図

注) 村上直著『江戸幕府の代官』より転写。

幕府代官は勘定奉行配下に属し、手付・手代・書役等を配下に従えて政務にあたった。その職務は前述の郡奉行・郡代と同じく民政・財政全般にわたり、そのため代官支配の良し悪しが農民の生活に深刻な影響を及ぼし、生殺与奪の権を握っていた。江戸時代、代官あるいは下役人の苛政や違法行為に対しての農民一揆も数多く起っているが、逆に、前述の早川代官のように仁政をもって民衆にのぞみ、人々から名代官と慕われたものも少なくなかった。代官は役高150俵程度で、普通禄高100俵～200俵程度の士が就任し、5万石～10万石の地の支配を行なった。村上直著『江戸幕府の代官』所収の「御家人分限帳」³⁾(宝永2年)および「幕下士鑑」⁴⁾によると、美作で代官を勤めた者の内6名の禄高について次のように記載されている。

石原 清右衛門	200俵	宝永2年
万年 七郎右衛門	100俵 10人扶持	〃
稲垣 藤四郎	250俵	寛政12年
恩田 新八郎	100俵 5人扶持	〃
早川 八郎左衛門	100俵 5人扶持	〃
布施 孫三郎	200俵	〃

(ロ) 大庄屋・肝煮(中庄屋)

図4-1-4をみればわかるように、幕府領においては代官が直接庄屋など村方を支配していたのに対し、私領の場合は郡奉行(郡代)と庄屋の間に大庄屋および肝煮(中庄屋)が置かれ、郡奉行の支配は間接的なものであった。すなわち、郡奉行からの触や村方からの願などは、郡奉行(郡代)→大庄屋→肝煮(中庄屋)→庄屋と伝達・上申される仕組みとなっていた。

森家津山藩については、『大庄屋由緒調』(明治27年矢吹正則取調、『津山市史』第3巻近世1所収)に次のように記載されている。

「寛永初年(1624) 一中略一 各郡より五十一人御選抜、登城仰せ付けられ、御家老原豊前殿より、思召をもって今般大庄屋役仰せ付けられ候間、上下の間に立ち、御用弁仰せらるべき旨御演達の上、大庄屋一人の引受高二千石以上八千石まで、地理の模様にて一触となし、一触毎に肝煮役二人以上四人を置かれ、右肝煮と村庄屋を大庄屋の支配とし、大庄屋は郡奉行の支配に定められ、一中略一 総て御用向は郡奉行より大庄屋へ相達し、大庄屋は之を肝煮に、肝煮は之を村庄屋に相達し、成るべく全国緩急無く行届き候様をされたとき御趣意に候。」

これからもわかるように、大庄屋は1郡に数人置かれ、2,000石～8,000石の領地を管轄し、管轄地ごとに「何々触」という呼び名がつけられた。苫西郡(西々條郡)における大庄屋は表4-2-1に示しているように、貞享3年(1686)から元禄6年(1693)の間(森家津山藩時代)、二宮村・院庄村・塚谷村・富村・奥津川西村と5人の大庄屋が存在しており、上斎原村は奥津川西村三浦市郎右衛門の管轄地内であった。⁵⁾この後、松平家津山藩時代の享保2年(1717)には長藤村石原理左衛門の管轄となっている。

大庄屋は郡奉行(郡代)の命を受けて、それぞれの管轄地域の村役人の監督および農民の取り

締りなどを行っていたのであるが、その補佐役として2～4人の肝煮を従えていた。大庄屋には江戸幕府成立とともに帰農した国人層の者が任命され、苗字帯刀を許されるなど極めて大きな権力を持っていた。

松平家津山藩の時代に入ると、大庄屋は前代の51人から21人に減され、肝煮は中庄屋と改称され、53人の中庄屋が設けられた。この時期の中庄屋について奥組6カ村（奥津村・奥津川西村・上斎原村・下斎原村・養野村・長藤村の6カ村で、江戸時代1つの行政区域になっていたと思われる）域では、享保2年に奥津村に惣助、養野村に助右衛門の2人がいたことが明らかである。養野村の北に奥津村があり、その北に上斎原村があるという地理的条件からして、上斎原村は奥津村惣助の管轄下にあったものと考えられる。

前出の『大庄屋由緒綱』によると、大庄屋の役料は25～50石、中庄屋は5～10石程度となっている。

表4-2-1 大庄屋一覧表

貞享3(1686)～元禄6(1693) 「真須鏡」所載	享保2(1717) 「養鏡」所載	文政12(1829) 「真須鏡」所載	嘉永6(1853) 「真須鏡」所載
立石五郎右衛門(二宮村)	立石 彌惣次郎	立石 助右衛門	立石 助右衛門
島田 太郎兵衛(院庄村)	江川四郎左衛門(院庄村)	立石 助右衛門	立石 助右衛門
桜井 七右衛門(塚谷村)	桜井 七右衛門		
廣山 孫左衛門(富 村)	廣山 孫左衛門	廣山 孫左衛門	
三浦市郎右衛門(奥津川西村)	石原 理左衛門(長藤村)		

注)『苦田郡誌』P277より転載

(イ) 村 方 役 人

以上のような郡奉行(郡代・代官)・大庄屋・肝煮(中庄屋)という支配者側の組織に対して、支配される側の村方では、庄屋・組頭・百姓代のいわゆる村方(地方)三役が置かれ、これらを中心に村政が行なわれた。

庄屋は1村1人が原則であるが、大きい村によっては2人以上の場合もある。上斎原村でも、田淵家が代々庄屋を勤めていたのであるが、天保期頃から村内を東組・西組と分け、⁶⁾東組は田淵家が、西組は三船家が代々庄屋を勤めることとなった。ただし、この2組が地域的にどのように分かれていたのかは史料が存在しないため明らかでない。なお、両家の庄屋役の継承状況についても、史料不足のため断片的にしか明らかでない。⁷⁾

庄屋の職務は極めて広範囲にわたり、領主からの法令・触・廻状の伝達、年貢の割付と取立て、領主への年貢納入、田畑山林河川等の争論の処理、村内の治安維持、農民の生活一般にわたる監督・指導など民政全般に及んでいる。庄屋はその心得として

「庄屋者正直を専らにして私欲を不仕慈非之心有之普く小百姓ニ心を付身上成もの致介抱不寄

何事村中公事出入有之時者庄屋年寄立會双方之趣意を承届親類縁者知寄之好嫌を不攪理非を能之致分別毛頭依怙品眞奈く取扱可相濟勿論滯儀有之ハ可訴出事」

(「御仕置五人組帳」明治3年)

とあるように、正直で私欲を捨て、依怙品眞なく役目にあたるよう説かれているが、現実には、その権限の大きさのため専横的になることが多かったようである。そのため、庄屋の専横に苦しめられた農民はしばしば領主に庄屋の不正を訴えており、上斎原村でも、天保2年(1831)に農民から庄屋齊次郎の不正を代官に訴えた次のような訴状がみられる。

文化十三年

作州西々條郡上斎原村惣百姓中

寅六月日

御庄屋齊次郎と村内小前へ取斗方私共一同難心得歎ケ敷事訳荒々々條書相認メ御難奉申上候
口上覚

ケ條扣

- 一 去子春當村と羽出村御鉄千歳山江通路殊之外大破ニ付牛馬往来難相成右ニ付御鉄山懸り御役人様と當村のものともへ可相直ス旨被仰渡候趣ニ而則人足手當て入用千年山御支配人修治兵衛と齊治郎へ相渡し候銀札三百目則同人所持いたし村方人足のものとも江者漸々式百目少々餘分相渡し其残銀者同人取込見相渡し具不申甚々迷惑仕候
- 一 先達而中庄屋長藤村伊兵衛當村兼帯庄屋之節打欠過銀在之小前のものともへ割戻しニ相成り同人と齊治郎請取罷歸り村内のものへハ銀札見せる而已ニ而小前へ者一錢も相戻し具不申候此分元利相渡し候様奉願上候
- 一 近年齊治郎親子小間物之類都而塩噲何々等ニよら須商仕候所外ニ商家も無御座無抛銘々入用之品有之節買ものニ参り候処自然代物不相應之直段等之節直下ニ而も可致具様申候得共殊之外御役ヲ以猥ニ雜言等仕向分此条至極不本意与者何連茂承知罷在候得共出文之始末相手ニ相成り候ものハ屯人も無御座候
- 一 村内字土木山瀧之谷与申場廣之林山先達而久世油屋新左衛門御鉄山支配中齊次郎と右之場廣太之諸雜木私ニ右新左衛門へ賣渡多分銀札請取候由粗風聞ニ御座候右者村惣持林と先年一同存罷有作道通等取用来候処才次郎屯人之取斗ニ而賣拂候事如何之儀ニ御座候哉此段宜奉願上候
- 一 乍恐右齊二郎前条之通り下方へ不筋之差向仕候ニ付一同難渋仕無據ケ条書奉差上候何卒御賢察之上急速御取調被為成下ケ条一々早速立戻し具候様被為仰付候ハバ廣太之御惠重々一同難有仕合ニ可奉存候此段宜奉願上候以上

天保二辛卯年二月

上斎原村

百姓惣代

利 平

小右エ門

茂 平

友 助

新左エ門

太郎次

宇左エ門

仙二郎

妻五郎

この訴状は全部で16項目にも及び、上に記したものはほんの一部にすぎないが、これを見てもわかるように庄屋の専権・不正は多方面にわたっている。洪水等によって道橋が破損した場合、役人から修理費が庄屋に手渡され、庄屋は農民を人足として駆り出しその人足費にこの金を充てるのが通例であったようであるが、ここでは、その金の一部を庄屋齊次郎が着服しているとして訴えている。領主によって苛酷な年貢収奪を受けほんの少しの余剰も残すことのできない一般農民にとって、これらの人足賃は臨時収入として大きな意味を持つのであるが、それだけに、それをも奪おうとする庄屋に対する一般農民の不満は非常に大きい。これと同じく一般農民の収入源を奪おうとする庄屋の不正を訴えたものに4番目の訴えが相当し、これは農民共同の収入源である入会地の雑木を庄屋が勝手に売り払ったというものである。

また、江戸時代の農村社会は自給自足が建前であり商家は存在しないのが普通であるが、塩・味噌などはどうしても必要なものであり、それらの販売は庄屋などが行なっていたようであるが、その販売について庄屋が不当な高値をつけ暴利をむさぼっているというのが3番目の訴えである。庄屋のすべてがこのように不正を働いていたとは言えないが、その権力の大きさの故にこのような専権・不正に陥りやすかったということと言える。

庄屋の任命については、大庄屋の推薦あるいは村民の入札によって領主が任命するのが一般的であり、世襲の場合もあり一代限りの場合もあるが、上斎原村では田淵家と三船家が代々世襲によって庄屋を勤めていた。

庄屋の下には庄屋の補佐役として組頭が各村数名置かれるのが普通であったが 上斎原村においては組頭は年寄と呼ばれていた。その任命については、村方で相談決定の上、役所には届を出すことで許されていたが、次にその届の一例をあげておく。

乍恐以書付奉願上候

當御領所西々条郡上斎原村年寄新左衛門義病氣ニ付退役仕度奉願上候右ニ付村方一同相談仕候處百姓金兵衛義平日正路実狀之ものニ而是迄答等請候義も無御座候間同人江跡役被為仰付度奉願上候萬一御年貢引負等仕候節者百姓一同ニ弁納可仕候何卒右願之通御許客被為成下候ハ、難有仕合可奉存候依之一同連印仕願出奉差上候以上

西々條郡

上斎原村願主

天保十二年丑八月

百姓

(以下連名)

この内容は、年寄新左衛門が病気のため退役したく、その跡役として村方一同で相談した上金兵衛と決定し、彼が年貢未納などをした時は百姓一同でこれを納めるから許可してほしいというもののである。

また、庄屋・組頭(年寄)の監査役として各村に1人～数人の百姓代が置かれていたが、これにはその村の大高持の百姓が選ばれるのが普通であった。

(二) 五人組制度

以上の庄屋・組頭(年寄)・百姓代によって村の自治は行なわれるのであるが、それでは当時の一般農民はどのような支配を現実に行っていたのであろうか。

村政の最末端の行政単位として江戸時代五人組制度が設けられた。これは、近隣5戸をもって組とし、その組の中での相互検察・連帯責任制によって、農民を厳しく規制するとともに村の統治を農民自身の自主運営に任せようとするものであった。五人組についての規制を書いたものに「五人組帳前書」があるが、上斎原村では明治3年3月付けの「御仕置五人組帳」が残っており、これにより当時の五人組制度がいかなるものであったかみていこう。

- 一 一切支丹等古路ひ之もの并類族有之分別帳記之可差出若他所之縁組等ニ而村内江右之族来候ハハ早速可注進事
- 一 村内之者或者立退或者遂電或者身上潰候而住居難成もの有之ハ可注進他所を子細有之立退候もの雖為親類村内ニ一切不可差置事

以上の2カ条は相互検察を義務づけたものである。江戸時代にキリシタンが禁じられていたことはいまさら言うまでもないが、ここでは隠れキリシタンを見つけたらすぐ申し出ることを義務づけている。そして、この条目には文章化されていないが、現実にはキリシタンをかくまって露見した場合、村役人をはじめ五人組の者まで御仕置とされていた。また、重い年貢負担に耐えかね土地を捨てて逃亡してしまう者についても同様で、その責任は村役人・五人組・親族にまで及び、このように連帯責任を負わすことにより相互に検察し合わせることを目的としていた。

また、相互扶助については次のような条目が掲げられている。

- 一 諸作第一能種を撰候而蒔付耕作可入念荒作之様いた須もの有之者急度令詮議獨身之百姓長煩ひ又者幼少ニ而親ニ離れ耕作仕付難成者有之ハ庄屋年寄立會村中ニ而助合田畑不荒様可仕事
- 一 往来之輩若煩ひ候ハハ早速醫者ニ見せ随分養育いたし能々いたわり食物等入念阿たへ看病仕置可注進行歩不叶先江參る儀難相成候ハハ其之もの出所を蒙届迎を呼手形を取相渡可申候若死失候ハハ其之もの道具等相改庄屋年寄立會封印いたし置可請差図事

つまり、独身で長煩いをしているとか幼くして親に死に別れたとかで満足に耕作ができず田を荒れている者があれば、村中で助け合って耕作をし、また、往来で倒れている者があれば十分看護をなささいという相互扶助を義務づけている。

また、農民生活一般については、

- 一 百姓衣類之儀庄屋者妻子共絹紬可着之平百姓者布木綿之外不可着之紗綾縮緬之類襟帶＝も致間敷候然れ共身上宜もの役所江断立差図を受絹紬可着之事
- 一 鉾取嫁取養子之祝儀奢ケ間敷無之様分限り軽く可仕大勢人を集免不可大酒惣而祝儀之節分限＝應し内證＝而輕祝可仕葬禮之野酒一切停止之事

とあり、衣類から冠婚葬祭にいたるまで、農民は質素 儉約に心がけるよう説かれている。

以上は条目のうちのほんの一部であり、五人組制度はその他さまざまな面で 農民の生活を規制していたわけであるが、このような規制に対して農民生活の実態はいかなるものであったかという、残念ながら史料不足のため、具体的には明らかにしえない。

3 村高・年貢

(イ) 検地と村高

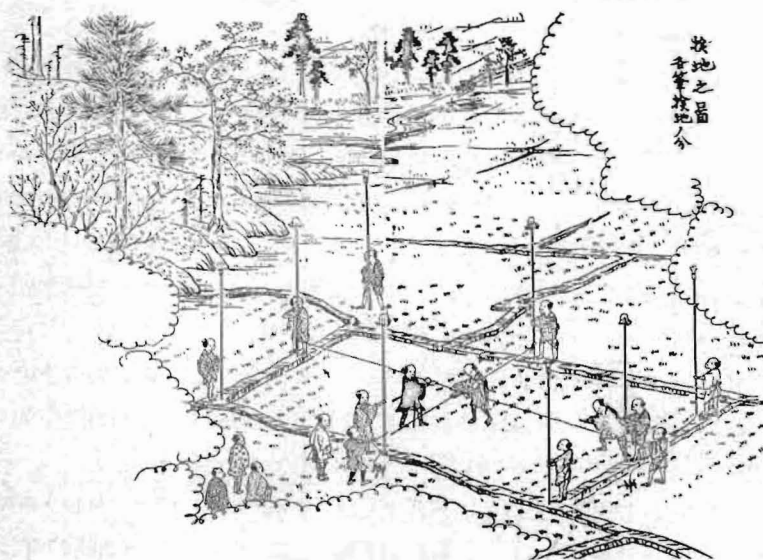


図 4-3-1 検地の図

注) 安藤博編『徳川幕府県治要略』より転写

上斎原村の村高は現存する元禄13年から文久3年の間の「免定」にみられる限りにおいては、416石4斗2合で一定している。当村では村高を決定する検地に関する史料が十分みられないため、以下、『津山市史』（第3巻近世1）を参考にしながら、当村を含む美作一帯の検地状況を概観してみよう。

美作においては、文禄3年（1594）・4年の頃、当時の領主宇喜多秀家によって検地が行なわれており、一般に文禄検地と呼ばれている。これは大閤検地の一環として実施されたもので、その範囲は備前・美作全域と播磨・備中両国の一部にまでわたっている。この時の検地に関して、『美作国検地の記』（平賀元義が『美作視聴録』に筆写）によれば、「検地役人は村々を巡って村役人が差し出した帳面と、田畑に立てた畝札を対照して検査し、もっともと思われるものはこれを採り、疑わしいものには一々縄を入れて測り、土地の良否を見極めて石高を算定した」とあり、いわゆる差出しの形で行なわれており、後の忠政の時代に行なわれるような厳密な検地ではなかった。しかし、秀家はこの検地により増高20万石余を打ち出し、これによって、当面の窮迫した財政を補強するとともに、朝鮮出陣に要した巨費をまかなったものと考えられる。

その後、関ヶ原の合戦後美作の新領主となった小早川秀秋も、領内の田地の境界を改定し石高を打ち出したことが「備前軍記」⁸⁾に記されているが、その実施方法や打ち出した石高については明らかでない。

秀秋の死後美作国に入封してきた森忠政は、当時村々の間でその境界をめぐる紛争がしばしば起っている事態を察し、強力に検地事業に乗り出した。忠政はまず慶長8年（1603）8月に領内の各村へ布達を出し、家臣を派遣して調停を行なわせ、⁹⁾郡村の境界を明らかにさせた。そして、翌9年3月検地条目を定め、検地奉行を各村々に派遣して検地を行なわせた。

この慶長検地の特徴は、従来の大閤検地で用いられていた6尺3寸の間竿に代えて6尺5寸の間竿を用いたことと、従来の検地より田畑の等級づけが非常に細くなっていることの2点である。

間竿を6尺3寸から6尺5寸に変えたということは、それだけ実測面積が小さくなるわけで、当時の領主層の狙いが年貢増徴にあったことを考えると矛盾するように思われるが、現実には、次に述べるように田畑の等級を細分化することによりこのマイナス分は十二分にカバーされている。

すなわち、この慶長検地においては、表4-3-1に示すごとく、村をまず上・中・下の3等に格づけし、田は上・中・下3等級に、畑は上・中・下・下々・切畑雑畑の5等級に区分した。そして、上村の上田1反の石盛を1石8斗とし、中村の上田は1石7斗、下村の上田は1石6斗とし、以下中田・下田はそれぞれ2斗下りとした。また、畑については上畑を中田と同じ石盛とし、以下同じく2斗下りとした。上斎原村は中村の石盛であった。この慶長検地の石盛を、同じく表4-3-1に示した大閤検地の石盛と比較すると、上村と比べてみても田では3斗、畑では4斗も高くなっており、この検地の石盛がいかに厳しいものであったかが窺える。

この慶長検地は、実施後ほぼ半年間で一応終結をつけるが、短期間に強行したため粗雑な点が多くみられた。そのため農民側の抵抗が激しく、やむなく「^{よりあり}当有米」として実収高を検地帳に加

筆するという臨時的措置がとられたが、現実には、検地高に対する当有米高は44%～62%に過ぎなかったとされている。¹⁰そのため、なお、農民の間には不平の声が高く、藩は年貢賦課にあたって「諸引・永引」などの名目により幾らかの年貢軽減を行ない、これに対処していった。

表4-3-1 石盛比較表

(森藩の石盛)

地位 村位	上 田	中田・上畑	下田・中畑	下 畑	下々畑	切畑・薙畑
上 村	1石・8斗	1 . 6	1 . 4	1 . 2	1 . 0	. 8
中 村	1 . 7	1 . 5	1 . 3	1 . 1	. 9	. 7
下 村	1 . 6	1 . 4	1 . 2	1 . 0	. 8	. 6

(大岡検地の石盛)

地位 村位	上 田	中 田	上 畑	中 田	中 畑	下 畑
?	1石・5斗	1 . 3	1 . 2	1 . 1	1 . 0	. 8

注) 1 森藩の石盛については、『津山市史』(第3巻近世1)P222より転載。

2 大岡検地の石盛については『国史大辞典』(『津山市史』(第3巻近世1)所収)によった。

しかし、これらの措置はあくまで臨時的なものにすぎず、次第に根本的な検地修正が必要とされるようになり、2代長継の寛文年間、3代長武の貞享年間に「地押」あるいは「^{ち押し}地^{ぢりし}押」と呼ばれる検地修正が行なわれた。特に2代長継の地押の際には、「^{ぢりし}段免^{だんめん}」という他に類例の少ない制度が採用され、農民の不平の緩和がはかられた。段免の具体的計算方法について、『地方凡例録』(大石慎三郎校訂)によれば、

「仮令ば下田高貳百石、免三箇にて此取米六拾石の処、右貳百石の内、高百七拾石ハ本免、三拾石は、一箇劣の段免場ならバ、先づ三拾石に劣りの一箇を乗じ、米三石と成る。之を総取米へ加え六拾三石と成る、之を総高貳百石にて除けば、免三箇零分五厘と出る、是則ち本免なり、百七拾石へ乗じ、取米五拾三石五斗五升と成る、此免の内壹箇引て、貳箇一分五厘、即ち段免なり」

とあり、事実上の減租が行なわれていることがわかる。

慶長検地による増石以降、各地で新田開発による増石が著しくなる。上斎原村においても、森家入封当初の拝領高307石6斗に、慶長検地以降正保3年(1646)までの間の増石分

(「改出し高」と呼ばれる) 52石7升5合, 正保4年以降元禄10年(1697)までの間の増石分(「開高」と呼ばれる) 53石5斗4升7合を加え, 元禄10年森家除封の際には, 村高413石2斗2升2合に増加している。さらに, この後新開3石1斗8升を加え, 松平家津山藩初期の元禄13年(1700)には村高416石4斗2合となり, これ以降, 江戸時代を通じて変化しない。

(ロ) 「免定」と年貢賦課

検地によって村高が定められると, それに応じて領主は春から夏にかけて村々の年貢量を決定し, 本田畑・新田畑・新開それぞれについて取米を記した「免定」をつくり, 毎年春頃, 郡奉行(郡代)を通して庄屋・小百姓等村方一同へ渡す。幕領の場合もまったく同様で, 郡奉行(郡代)に代わって代官が年貢収納にあたる点が異なるのみである。そして, 免定を受けた村方では, 庄屋が大小すべての農民を集め, 細かく検討した上で農民各個人に年貢の割り当てを行なう。農民は割り当て分の米を収納し, 村方では各村にある郷蔵にこの米を集める。そして, これを藩の蔵まで運搬するのである。上斎原村の場合, 津山藩領の時は陸路津山城下まで年貢米が運ばれ, 幕府領の時は, 年貢米は津山から和気川(吉井川)を下って備前金岡まで高瀬舟で運ばれ, さらにここで千石船に積みかえられ, 海路江戸・大阪にある幕府の米蔵まで運ばれていたと考えられる。年貢米運搬が終了すると, これと引き換えに, 郡奉行(郡代)あるいは代官から年貢収納が完遂した旨の「年貢皆済目録」が村方へ渡され, これによって一連の年貢収納作業はすべて完了することになる。

免定および年貢皆済目録の形式については写真4-3-1に示すごとくであるが, それでは, この天保10年(1839)の「免定」の内容を次に示し, 以下, 当時の上斎原村における年貢賦課形態がいかなるものであったかについてみていこう。

玄御年貢可納割附之事

津山御預所

美作国西々條郡

上斎原村

検見取

一 高三百五拾九石六斗七升五合

此反別式拾四町三反式畝廿壹歩四厘

此訳

田高三百式拾六石三斗九升

此反別式拾壹町八反七畝拾式歩四厘

高六斗五升

荒地川欠引

内 此反別五畝歩

高三拾三石式斗六升七合

去戌より引続皆無引

此反別式町四反三畝拾四歩



天保十年「亥御年貢可納割附之事」

天保十一年「亥御年貢省済目録」

(上斎原村三船統昌氏所蔵)

小以高三拾三石九斗壹升七合

此反別貳町四反八畝拾四步

殘高貳百九拾貳石四斗七升三合

此反別拾九町三反八畝廿八步四厘

此取米百石八斗五升三合

内米貳拾六石九斗七升 去戌増

畑高三拾三石貳斗八升五合

此反別貳町四反五畝九步

此取米九石七斗七升六合

去戌同

右同断

一 高五拾三石五斗四升七合

同所新田

此反別四町五反六畝拾三步

此沢

田高四拾石八斗五升

此反別三町三反壹畝廿八步

内高貳石五斗七升六合 去戌 引続皆無引

此反別壹町四畝十三步

殘高貳拾八石貳斗七升四合

此反別貳町貳反七畝拾五步

此取米八石四升四合

内米三石貳斗五升壹合 去戌増

畑高拾貳石六斗九升七合

此反別壹町貳反四畝拾五步

此取米貳石七斗八升四合

去戌同

右同断

一 高三石壹斗八升

皆田

同所新開

此反別貳反六畝拾五步

内高貳石三斗八升八合

此反別壹反九畝廿七步

殘高七斗九升貳合

此反別六畝拾八歩

此取米貳斗八升七合

去戌皆増

取米合百貳拾壹石七斗四升四合

内米三拾石五斗八合

去戌増

外

一 田壹町三反反七畝六歩

木地挽作

見 取

内壹町壹反七畝六歩

残貳反歩

此取米四斗五升

去戌皆増

一 畑五反四畝廿壹歩

同断

見 取

川欠引

一 米貳石九斗壹升五合

糠藁代

一 銀貳拾八匁六分八厘

林山運上

一 銀壹匁

戌改出

右同断

一 銀壹貫三百三拾目

戌多寅迄五ヶ年来分

鉄山鉦稼運上

一 銀拾五匁

木地軸壹挺役

一 銀貳分

新林山運上

一 銀拾七匁

鉄砲拾七挺役

一 銀貳匁

酒造冥加銀

一 米貳斗五升

御傳馬宿入用

一 米八斗三升三合

六尺給米

一 銀六拾貳匁四分六厘

御藏前入用

杉木立

一 御林

五ヶ所

但大山嶮俎反別不知

納合米百貳拾六石壹斗九升貳合

銀壹貫四百五拾六匁三分四厘

右者 當亥御成箇書面之通相極条村中大小之百姓入作之もの迄不殘立會無高下令割賦来ル十二月
十日限急度可皆済もの也

天保十亥年十月

中沢 仁兵衛 ㊦

伊丹 健十郎 ㊦

田淵 守助 ㊦

三浦 十郎左衛門 ㊦

すなわち、上斎原村の村高は416石4斗2合であるが、その内訳は本田畑359石6斗7升5合、新田畑53石5斗4升7合、新開3石1斗8升となっている。この村高は、面積であらわすならば29町1反5畝19歩4厘ということになり、また、田畑の比率については田が全体の面積の87%強を占めている。

しかし、実際に年貢賦課の対象となるのは、これらの高からそれぞれ、「引」といって高に入っているにもかかわらず実際の生産がない土地の高を差し引いた分である。上記の免定にみられる「荒地川欠引」というのは、洪水等の風水害によって、田畑の地味が悪くなった分とか田畑が欠崩れた分を差し引くものである。また、「去戌より続皆無引」とあるのは、この前年にあたる天保9年(1838)に上斎原村域が激しい凶作に見舞われており、その被害分を前年に引き続いて差し引いたものである。

高から以上の引高を差し引いたものが「残高」であり、この残高に対して取米＝年貢米がかけられる。すなわち、残高は毛付高ともよばれることでわかるように、実際に米の作付のされた土地の高＝実際に生産のあった土地の高を示すのである。最終的に、この年は残高を合計して得られる367石5斗2升1合が作付分とみなされ、それに対して、「取米合」に示されている121石7斗4升4合が年貢米として賦課されている。

また、免定には、以上の田畑に対する取米(本途物成)のあとに、「外」として小物成と高掛物が記されるのが普通である。上記の免定においても、林山運上・鉄山鉦稼運上・木地軸曳挺役・鉄砲拾七挺役・酒造冥加銀など各種の運上銀がみられ、ここに、農民の耕作以外のわずかな収入源に対しても漏さず課税し、農民に余剰を貯えることをさせまいとする領主側の姿勢がはっきりと窺える。

高掛物のうち、御伝馬宿入用・六尺給米・御蔵前入用は「高掛三役」と呼ばれ、幕府領の村にのみ課せられた租税である。御伝馬宿入用は宝永元年(1704)に設定され、5街道の間屋本陣への給米にあてるもので、高100石につき米6升と規定されていた。寛永末年に設定された六尺給米は江戸城内の雑用入夫への給米にあてるもので、高100石につき米2斗とされた。また、御蔵前入用は幕府の浅草米蔵の諸入用にあてるもので、高100石につき銀15匁と規定されていた。上斎原村の場合もそれぞれ以上の算出規定に従っており、免定にみられるごとく、御伝馬宿入用米2斗5升、六尺給米8斗3升3合、御蔵前入用銀62匁4分6厘となっている。私領においては、御伝馬宿入用・六尺給米は夫米と、御蔵前入用は夫銀とそれぞれ名目が変わる。

以上の本途物成・小物成・高掛物をすべて加え、領主に納めるべき年貢米銀を示したものが「納合」であり、村方では庄屋を中心にすべての農民が集まり、一同で相談の上、これを適正に

各個人に割り当てるのである。

この免定に対して、実際に納入された分を記したのが年貢皆済目録であり、その書式は写真・4-3-1をみても明らかなように、免定とよく似ている。

(4) 年貢負担

上斎原村における元禄13年から文久3年までの現在するすべての免定を集計・整理したものが表4-3-2であり、これをもとに、残高(毛付高)・取米高および免率(高免・毛付免)の推移をグラフにしたものが図4-3-2である。以下、この2つの資料を分析することにより、江戸時代、特に、免定の存在する元禄期以降の上斎原村における農民の年貢負担がいかなるものであったかみていくことにしよう。

図4-3-3をみればわかるように、年貢免率(ここでは農民の実質的年貢負担を把握する意味で毛付免に注目した)の推移について大きく4つの画期が存在する。

まず、第1の画期は元禄13年(1700)から元文2年(1737)までの期間で、元禄13年の34%から享保11年(1726)には40%へと大幅に上昇し、その後10年間に再び36%台へと落ち込んでいることに注目される。この期間はちょうど、享保の改革による従来の検見法から定免法への徴租法転換の時期にあたる。

8代將軍吉宗は財政建直し策として年貢増徴を目指し、新田開発を積極的に推進するとともに、それまでの検見法に代えて定免法を採用し、定免法施行に至らない土地に対しては有毛検見法を採用した。毎年、収穫前に地方役人が廻村してその年の作柄を実地検査し、それに基づいて年貢量を決定する検見取法に対し、定免法は過去数年の平均収穫をもとにして、一定の年季を定めて村ごとに年貢量を固定してしまうものであり、享保7年(1722)頃から実施されたものらしい。

幕府が定免法を採用した理由にはいろいろ考えられるが、従来の検見法を行っていたのでは検地をしない限り個々の田の年貢量は変化しないので上田を持つ者に不利であったことや、検地役人の不正や検地帳の紛失などが頻繁に発生していたことなどによると考えられる。しかし、これらはあくまで表面的理由にすぎず、真の目的が年貢増徴にあったことは疑うべくもない。つまり、おりから年貢増徴に努めていた幕府は、定免法の利点を生かして年季の切り替えの度に増米を加えて年貢免率を引き上げ、増徴した年貢高を豊凶にかかわらず固定化しようとはかったわけである。

しかし、この定免法の実施過程において、幕府は破免検見取法の併用を認め、定免年季中でも激しい凶作・不作の年には村方からの願い出に応じて検見を行ない、それによって年貢を軽減しようとしたものである。破免条件についても短期間に大幅緩和され、享保7年には一国一郡にも及ぶ程の大凶作とされていたが、⁽¹⁾享保19年(1734)には一村限りでも3分以上の損毛の場合破免が適用され、この破免条件は以後幕末まで適用された。

上斎原村において、元禄13年の34%から享保11年の40%へと6%もの免率の急上昇を

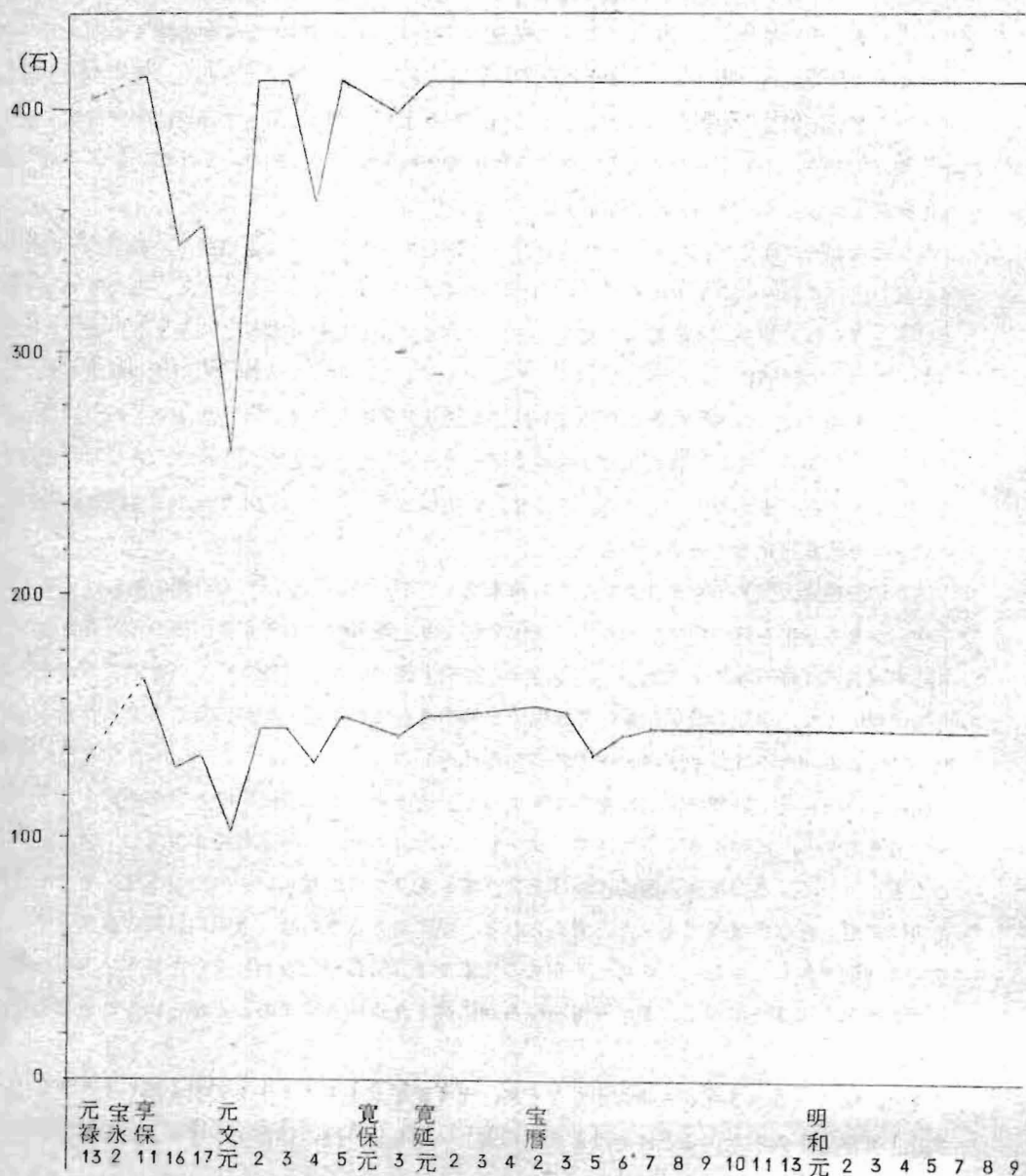
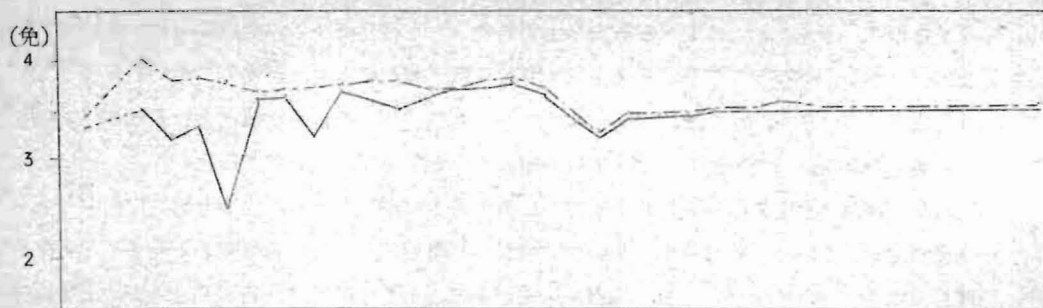
みせるのは、まさに、このような年貢増徴を目的とした幕府による定免法採用の影響にほかならない。しかし、享保11年をピークとして免率は低下傾向を示し、元文2年までの11年間で4%も低下しているが、これは、定免法施行に対して農民側の抵抗が次第に激しくなり、定免年季切り替えの度毎に、増米を加えるどころか逆に免率を引き下げたためと考えられる。

第2の画期は元文2年から文化14年(1817)の期間であり、全期を通じて免率が36%前後で安定している。代官役所のあった久世村の同時期における毛付免率が45%~55%を維持しつづけていたことからして、地理的条件が異なるため単純には比較できないが、上斎原村における農民の年貢負担は標準的もしくはそれより軽いものであったと推察される。また、天明8年(1788)から文化9年(1812)の期間、毛付免と高免の間に1%強の開きがみられるが、これはこの期間川欠、不作引による引高が多いことに起因しており、すなわち、天明の大飢饉以来各地で重税に抵抗する農民一揆が頻発するが、そのような情勢のもとで幕府は年貢軽減を余儀なくされており、上斎原村でも、そのような政治情勢を反映して、川欠・不作引と名目づけられた年貢軽減が行なわれているためである。

第3の画期は文政元年(1818)から天保8年(1837)までの期間で、後期松平家津山藩支配の時代にあたる。免率もそれまでの幕府領期の36%前後から一挙に40%台まで4%強も引き上げられており、支配領主の交替とともに年貢賦課もかなり強化されたようである。表4-1-3のこの時期についてみれば明らかなように、この時期は一年季の定免法が採用されているが、実質的には、年季初年度の文政元年に定免増米27石5斗7升8合が加えられて以降、天保3年(1832)まで年貢負担はまったく同じであり、このことからすれば、25年季定免と言い換えても差し支えないであろう。かくて、定免増米27石5斗7升8合がまさにこの時期の免率上昇分に相当することがわかる。

第4の画期は天保9年(1826)から幕末までの期間であるが、この時期の激しい免率の上下はいかなる意味を持つのであろうか。天保9年より上斎原村は松平家津山藩の預所となっており、実質的には幕府領でありながら、管理のみは松平家津山藩に委任されていたのであった。幕府領においては、享保の改革において定免法が採用されて以来定免法が広汎に行なわれていたが、天明期以降の相次ぐ凶作や飢饉の中で農業生産は不安定な状況を示し、このようなもとでの定免法施行は実情にそぐわないものになってきていた。そのために、農民一揆などが頻発するようになってきており、このような時代情勢を反映して、天保9年より検見取法が復活している。以上のことからして、この第4の画期における20%~30%での激しい免率の上下は、まさに村方の実情に沿った年貢賦課であったと考えられる。逆に考えるならば、天明期以降の農業生産の不安定な時期でありながら、36%~40%の免率で年貢賦課が行なわれていた第3・4の画期における農民の年貢負担が、いかに実情をはるかに越えた重いものであったかということが推察される。

また、図4-3-3をみて明らかなように、元文元年(1736)・天明6年(1786)・文化10年(1813)などにおける免率の著しい落ち込みは、凶作・不作によるものである。



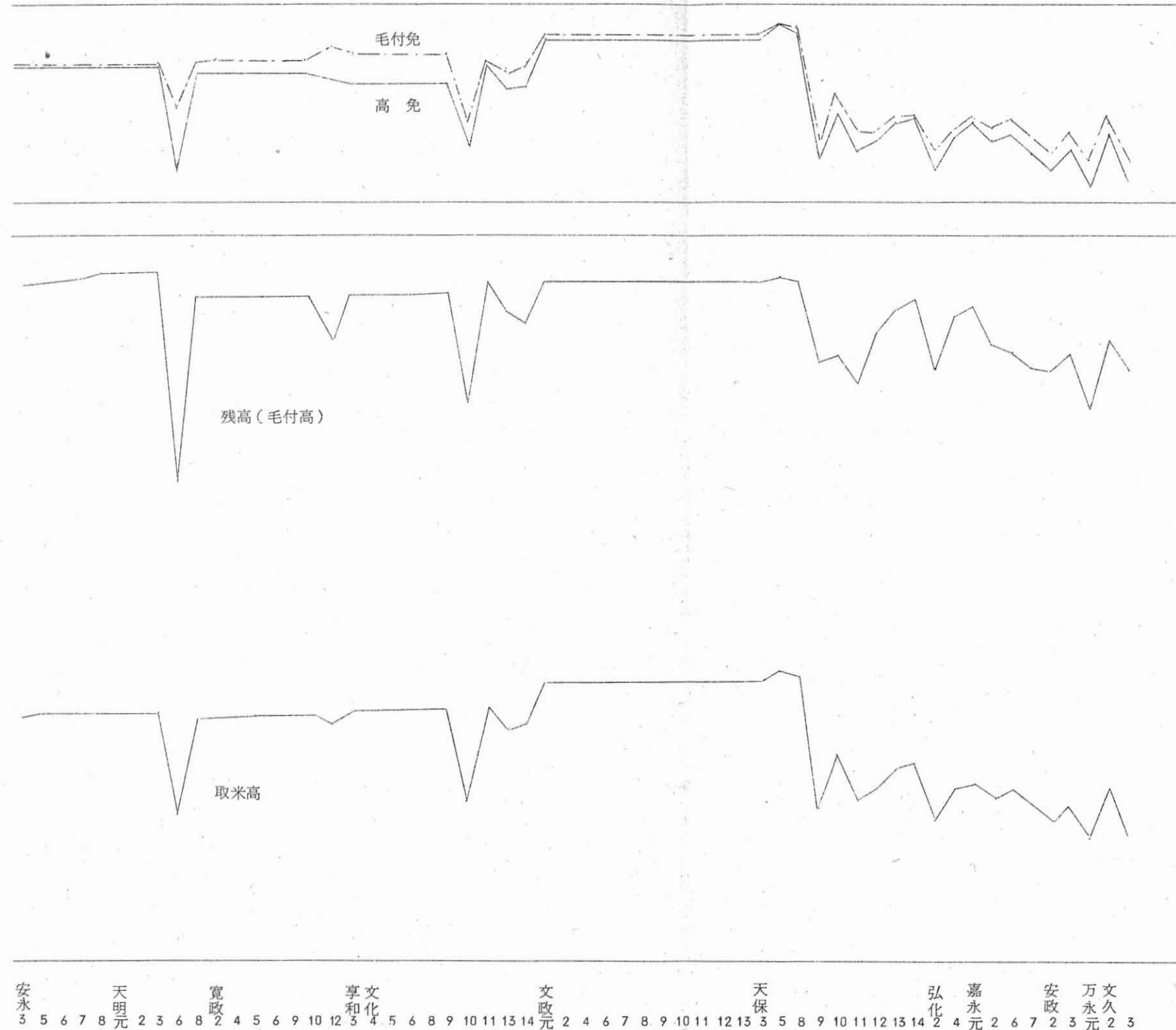


図4-3-2
上斎原村における
貢租の変化
注) 表4-3-2を
もとに作成。

これらの年は表4-3-2に明らかなように、破免検見が採用されており（元文元年については徴租法の記載がない）、定免法施行時でありながら、前に述べた破免検見採用の条件に該当する程の凶作がこれらの年に起っていることが考えられる。

(二) 廻米と石代納

年貢は米納が基本的であり、領主の蔵までの年貢米運搬（一般に廻米といわれる）は農民側の義務とされていたが、当時の農民にとって、この廻米に要する諸費用の負担は非常に大きいものであった。上斎原村の場合も、後に述べる為替米を除く年貢米は津山藩時代は津山城下まで、幕府領時代は江戸・大阪まで農民負担によって運搬されていた。しかし、作柄が悪く収穫の少ない年などでは貨幣による納入が行なわれており、さらに、江戸中期以降の貨幣経済の発展に伴ない、この傾向は一層強くなる。この米納に代わって貨幣（一般には銀の場合が多い）で年貢を収納することを「石代納」というが、以下、上斎原村に現存する「年貢皆済目録」により、この石代納化の進展について考えてみよう。

まず、写真4-3-1にあげた天保11年（1840）の「年貢皆済目録」（実際は前年にあたる天保10年の年貢皆済について記されている）の内容を次に示そう。

亥御年貢皆済目録

津山御宿所

美作国西々條郡

上斎原村

高四百拾六石四斗貳合

一 米百貳拾貳石壹斗九升四合

本途見取

内米四斗五升

見取

此誤

三分一銀納可相成

米四拾石七斗三升壹合之内

米拾六石四斗貳升壹合

三分一銀納

外米貳拾四石三斗壹升

亥臨時米納相成候分

此銀壹貫四百貳拾壹匁七分五厘

但米壹石＝付

銀ハ拾六匁五分八厘壹毛

米貳拾四石四斗七升壹合

三分二銀納

此銀貳貫百六拾七匁六分七厘

但米壹石＝付

銀八拾八匁五分八厘壹毛

米八拾壹石三斗貳合

米納

内米貳拾四石三斗壹升

臨時米納

外

- 一 米貳石九斗壹升五合
此銀貳百五拾貳匁三分八厘
- 一 銀四拾六匁八分八厘
- 一 銀拾五匁
- 一 銀壹貫三百三拾目
- 一 銀貳匁
- 一 米三石七斗五升三合
此銀三百四拾三匁七分
- 一 銀四拾壹匁八分貳厘
- 一 米貳斗五升
此銀貳拾壹匁六分五厘
- 一 米八斗三升三合
此銀七拾貳匁貳分貳厘
- 一 銀六拾貳匁四分六厘

- 合 米八拾壹石三斗貳合
銀五貫七百七拾七匁四分三厘

内

- 米壹石四斗
- 米貳石
- 小以米三石四斗

- 納合 米七拾七石九斗貳合
銀五貫七百七拾七匁四分三厘

- 小もの成
但三分一直段
- 右同断

- 戊 寅迄五ヶ年季
木地軸壹挺役
- 戊 寅迄五ヶ年季

- 鉄山銅稼運上
- 酒造冥加銀
- 口米

但壹石 = 付銀九拾壹匁五分八厘壹毛

- 口銀
- 御傳馬宿入用
但三分一直段
- 六尺給米
但右直段
- 御藏前入用

- 御林守給米
- 茶屋守給米

右者亥御年貢米銀小物成其外共書面之通令皆済 = 付小手形引替一紙目錄相渡条重而書物差出候共可為反古もの也

天保十一子年三月

- 中 (沢) 仁兵衛 ㊦
- 伊 (丹) 健十郎 ㊦
- 田 (淵) 守助 ㊦
- 三 (浦) 十郎左衛門 ㊦

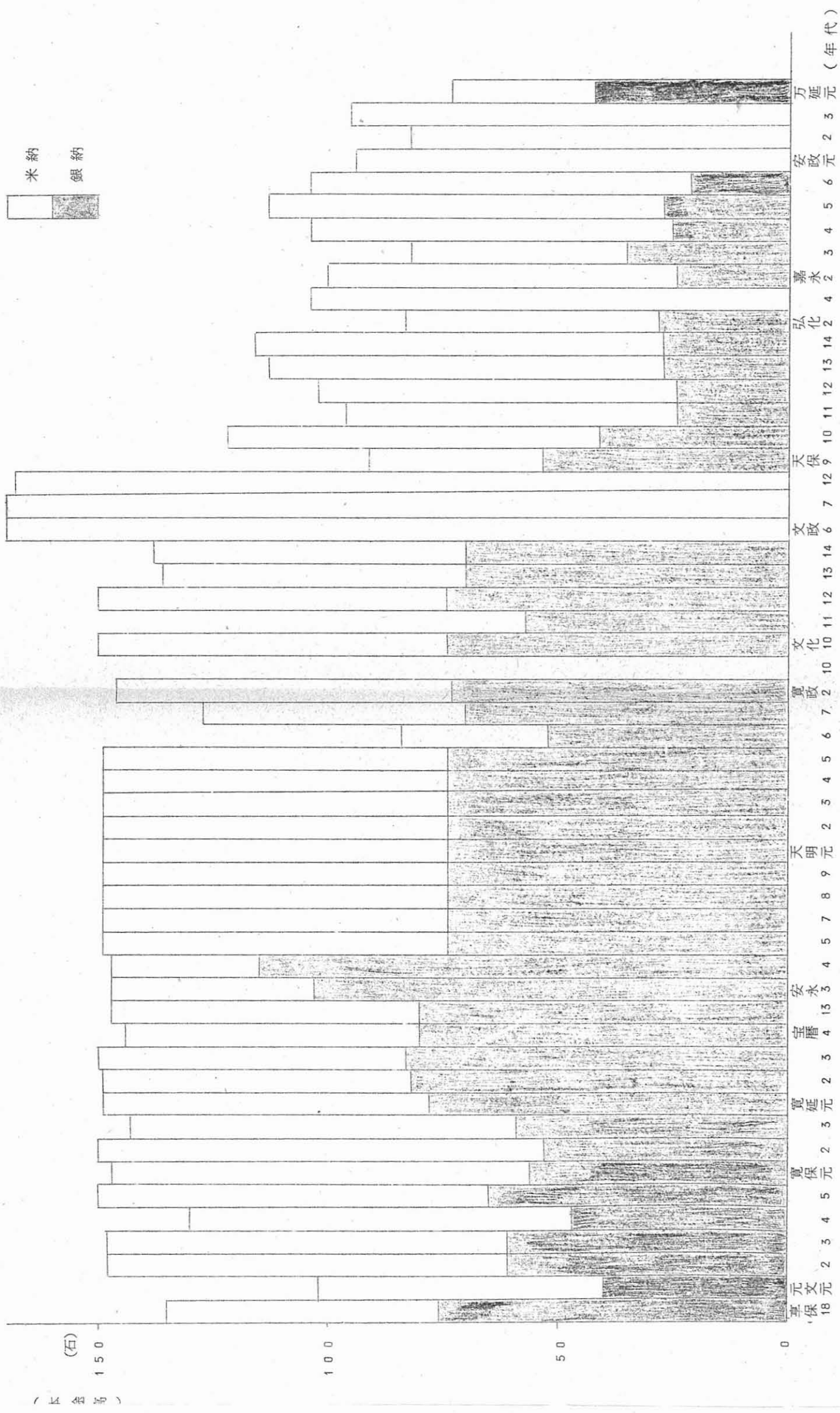


図4-3-3 本途における米納・銀納割合
 注) 三船家所蔵文書「年貢皆済目録」により作成。

すなわち、この年免定によって賦課された本年貢（取米）は121石7斗4升4合であったが、年貢皆済目録によれば、これに4斗5升の見取米（新田開発をしてもそれが地味劣悪なるため高に結び難き場合、その反別のみを丈量して之に輕き年貢を課した¹²⁾）を加え、合計122石1斗9升4合が納入されていることがわかる。しかし、これがすべて米納されたわけではなく、その3分の1の40石7斗3升1合は「三分一銀納」として石代値段銀86.581匁で銀高に換算され、また「三分二銀納」として24石4斗7升1合が石代値段銀88.581匁で銀高に換算されている。実際には、3分の1銀納分のうちの24石3斗1升が臨時的に米納されているので、銀納の本年貢に占める割合は33%強となるが、仮りに臨時米納がなかったとするならば、実に本年貢の53%強が銀納されることになる。

3分の1銀納というのは、田畑総取米の3分の1を畑部分と見立てこれを銀納するものである。また、当時、10分の1銀納といって、総取米の10分の1を大豆作によるものと見立てこれを銀納する収取法がとられていた。そして、3分の1銀納分と10分の1銀納分を加え「4分方銀納6分方米納」となるのが、西国幕府領における典型的年貢収取形態であった。上斎原村では、10分の1銀納はなく3分の2銀納がみられるが、この意味するところとその計算方法は明らかでない。しかし、図4-3-3の元文年間から寛保年間をみれば明らかのように、3分の1銀納・3分の2銀納による、本年貢に占める銀納の割合は上斎原村においても40%程度であり、「4分方銀納6分方米納」にあてはまる。

おりから、貨幣経済が幕藩社会の中で著しい進展を遂げ、これに対応していくために幕府や各藩は貨幣獲得に全精力を注ぐようになる。すなわち、従来の3分の1銀納や10分の1銀納に加え、凶作の年に悪質米を1石につき銀20匁から9匁程度で銀納にする「安石代納」などを採用し、年貢石代納化を急速に押し進めていく。上斎原村においても、そのような政治情勢を反映して、安永3(1774)・4年頃には銀納率が70%を超えるまでに至っている。

しかし、幕府は明和頃から廻米増加に政策を逆転しており、上斎原村でも、安永4年を境として、これ以降銀納率が低下する傾向を示す。さらに天保期に入ると、幕府は3分の1銀納・3分の2銀納までも禁止して廻米増加につとめ、上斎原村においても、天保11年(1840)以来これらの銀納がほとんど「臨時米納」として米納されるようになり、安政期には本途の95%以上が米納されている。

さて、それでは、江戸中期以降、幕府がそれまでの年貢石代納化推進策を逆転して廻米増加策へと移ったのはなぜであろうか。

石代納が、米納に代わって貨幣（多くは銀）で納めることであることは前にも述べた通りであるが、その銀を得るためには農民は米を売らなければならない。上斎原の場合でいうと、領主側が年貢賦課に際して用いる石代値段は津山における10月下旬半期の蔵米相場を以て決定されたのである。¹³⁾しかし、実際に農民が米を売却する際の払米相場は蔵米相場より安いことから、年貢分の銀を得ようとするれば、領主が規定した米量以上に余分な米を必要とする。この領主の規定した米高と実際に売却した米量との差を石代納負担といい（一般には銀量に換算して考え、「間銀」

ともいわれる), その割合は寛政期以降銀納全体の20%~25%にも及んだ。このように、農民にとってこの石代納負担は非常に大きいものであり、次第に、農民の石代納化に対する反対が起ってくるようになった。一方、領主側においても、石代納化の進展に伴い、蔵米が著しく減少するようになり、廻米増加の必要に迫られるようになった。以上、農民側の石代納化反対と領主側の蔵米不足という2つの要因によって、江戸中期以降の廻米増加策が推進されていくのである。

ところで、上斎原村における廻米については、1つ大きな特色がある。すなわち、当村においては、米納分がすべて廻米として領主の米蔵まで運ばれたわけではなく、為替米といって、鉄山労務者の食糧米として鉄山経営者に売り払われる米がかなりの量にのぼり、村方はこれによって得た銀を年貢として米の代わりに納めていたことが史料によって知られる。この為替米によって上斎原村の農民の廻米輸送に伴う負担はかなり軽くなっていたと考えられる。為替米についての詳細は後出の「たたら製鉄」の項で述べられているので、これを参照されたい。

注 釈

- 1) 村上直著『江戸幕府の代官』（昭和45年発行、新人物往来社）を参考にした。
- 2) 『津山市史』（第3巻近世1）P121所収。
- 3) 内閣文庫所蔵。
- 4) 国立国会図書館所蔵。
- 5) この当時の三浦市郎右衛門の管轄地域としては、上斎原村のほか、奥津・奥津川西・長藤・下斎原・羽出・四口野・女原・井坂・養野の各村があった。
- 6) 史料で確認できるのは天保12年（1841）が最初で、この時の庄屋は、二平次（田淵）と茂平（三船）の2人が勤めている。
- 7) 東西2組にわかれて以降、田淵家では二平次・幸左エ門・仁平と庄屋役を継ぎ明治に至っており、三船家では茂平が1人で明治まで勤めている。2組にわかれる以前では、享保期に作右衛門、文政期に斉治郎が庄屋役を勤めていたことが史料によって明らかである。
- 8) 吉備群書集成所収。
- 9) この時派遣された家臣の主な者は、伴半兵衛・西川三右衛門・伴伊兵衛・津田勘兵衛・奥村平太らである。
- 10) 勝北郡近永村（津山市近長）では、検地高326石弱に対し「当有米」は202石弱で62%、また勝南郡西吉田村（津山市西吉田）は検地高389石余に対して「当有米」は172石で44%であったと、『津山市史』（第3巻近世1）の中で実例として取り上げられている。
- 11) しかも、村内の百姓全員が願出たのみという条件つきであった。
- 12) 『日本経済史辞典』（下巻、日本評論新社）による。
- 13) 津山における上新米の10月15日から同晦日までの半月間の蔵米相場を平均し、それから4割下げたものが従来石代値段とされていた。しかし、寛政9年（1797）に石代値段の決定

方法について改正が行なわれ、これ以降は、10月1日から同晦日までの1カ月間の払米相場の平均をもって石代値段とされた。この平均方法についても、下15日間に払米が3回以上あればその平均を、下15日間の払米が2回以下の場合、上15日間の末から1口づつ加え、合計3回の平均をもって石代値段とした。

(難 波 保 夫)

4 農民の生活

(1) 農業生産

近世後期における村内農民の生活に焦点をあて、第1項では農業生産の概況を田淵仁亀氏所蔵の「西々条郡上斎原村明細書上帳」（天保9年、以下「村明細書上帳」と略す）を中心として考察してみよう。

表4-4-1によれば、田畑耕地面積は延享2年26町7畝19歩、天保9年28町9反6畝4歩、明治8年57町8反29歩である。天保9年から明治8年にかけての29町弱の増加分中赤和瀬における新開耕地が8町5反3畝2歩含まれている。高もそれに対応して379石1斗4升9合、415石7斗5升2合、明治8年は畑における収穫量は不明であるが全体として540石前後あるものと考えられる。しかし、明治8年の増加は地租改正において反当収穫量を高く見積もられた結果である。有元正雄氏によれば「岡山県では7年末の「下横反米」に約2割増加し、管下平均田方反当（6尺3寸

表4-4-1 耕地明細表

		延享 2 年 (1742)			天保 9 年 (1838)			明治 8 年 (1875)											
		面	積	斗代	高	面	積	斗代	高	面	積	斗代	高						
田	上	74.1.09	1.7	125.621	}		}	}											
	中	59.4.13	1.5	88.975															
	下	36.8.15	1.3	111.792															
	下々	—	—	—															
	上畠	1.2.03	1.5	1.767	256.215	1.4	369.098	528.220	1.0	507.159									
	中畠	1.18	1.3	0.205	}		}												
	下畠	1.8.27	1.1	2.035															
	下々畠	1.4.00	0.9	1.230															
	小計	225.0.25	1.5	335.906															
畑	上	15.6.06	1.5	23.330	}		}	}											
	中	2.1.03	1.3	2.742															
	下	5.6.24	1.1	6.228										33.319	1.4	46.654	50.809	—	—
	下々	12.2.21	0.9	10.943															
	小計	35.6.24	1.2	43.243															
合 計		260.7.19	—	379.149	289.604	—	415.752	578.029	—	—									

(注) 1) 本表は、延享2「本田畑畝名寄帳」「新田畑^{山形并}新開田畝名寄帳」（田淵家所蔵）、天保2「西々条郡上斎原村明細書上帳」（田淵家所蔵）、明治8「地価取調帳」（村役場所蔵）の各史料による。

2) 本表中田方の分類に上畠、中畠……とあるのは、それぞれ上畠田、中畠田……のこと。

同表によると上斎原村では全耕地面積に対する畑地の割合は延享2年(1745)において15.5%, 天保9年(1838)では10%であり, 明治8年(1875)も天保5年同様10%と全体的にわずかである。近世において畑地でどのような農作物がどの程度生産されていたかは, 史料がないために不明であるが, 畑地比率とも考えあわせると, そのほとんどが自給作物であったことは間違いない。

一、檢見坪桿之儀御料所ニ而者六尺三寸桿用來候得共、森家檢地之節六尺五寸桿相用候儀ニ付是迄之御領分中不殘六尺五寸桿相用候事故、以來同様六尺五寸桿相用候間、其旨可得候、尤御料所ニ而高入ニ相成新田者六尺三寸桿相用候事

一、高四百 拾六石四斗貳合西々條郡上齋原村

下烟石盛十一

下々畑同九

此高四拾六石六斗五升四合新田畑山方新田

下々畑同八

此分極山中故片毛作りニ而御座候

(注 傍点は著者)

また

一、当村用水之義者当村之内因伯国之境三国ヶ仙と流出し冷水田方へ引取申候、殊更外小谷水引取申候田方之義茂同様冷水ニ御座候 (以上前掲「村明細書上帳」)

とあり、前述のように石盛は高いが、片毛作であり、田畑へ引入れる水が冷く、全収穫量も実際の反当収量も低いのではないかと考えられ結局農民の負担を増大させていると思われる。

肥料は近代に入ってから

苗代前に田へ草を入れ腐らして糞を蒔き田植前には下木と云て萩小柴の若生を入れ腐らして苗をうる也。

また、

焼畑は芝小笹などある所を刈り、焼灰をこやしとして〇粟、蕎麦など作る也。

(以上、「吉備群書集成」岡山大学教育学部付属図書室所蔵)

とあるように自給肥料であり近世も同様であったと考えられる。これら肥料となる草・萩小柴、芝小笹などの刈取り場所・期日は村内規制として藩側から制限されていた。

一、志ば刈者例年之通 并ニ刈とり者土用ニ入十日立つ内天氣ヲ見合御触出し式百十日ヲ四明与度し銘名勝手次第ニ刈可食

一、草刈山近場之内何所迄境ヲ入残し置式百十日ヲ四明与度銘々勝手次第ニ刈取る可食(「村方諸・締」田淵家所蔵)

肥料とともに、農業生産を維持し増加させる要素の一つである井堰、すなわち用水設備については、

一、井堰五ヶ所 石越瀬井手 観音堂井手

下樽原井手

中原井手

木路井手

右井堰之儀ハ先年當御領分之節と御普請所ニ御座候、御料所ニ相成候而も御入用普請ニ被仰付候場所ニ而御座候ニ付是迄相痛候節毎度奉願上候而御入用被下置候、前々之御入用御普請所ニ而御座候

一、溜池無御座候

一、用水樋無御座候

(前掲「村明細書上帳」)

と記されているように五ヶ所存在していたが、農業技術の未発達な近世においては損傷しやすく、そのため夫役も村に多くの負担をしていたことがうかがわれる。少し古い史料になるが「御普請

所五拾ヶ年明細扣」(年代未明 田淵家所蔵)によれば

宮尾川通

一、井堰五ヶ所

内

樽原瀬

壺ヶ所

長六拾間

横平均貳間

下樽原瀬

壺ヶ所

長四拾貳間

横平均壺間半

天王

壺ヶ所

長拾五間

横平均壺間

下中向原

壺ヶ所

長六拾間

横平均壺間半

上中向原

壺ヶ所

長五拾壺間

横平均壺間半

是者右五ヶ所共当村用水普請組合無之私領之節洪水大破之度々竹木諸色人足扶持米等領主人用を以普請仕来候由申付斗而、元禄元辰年より享保二酉年迄三十ヶ年之内証拠書物無御座委細之訳相知不申候由村方与り書付差出申候

一、享保三戌年より同十一年迄九ヶ年松平浅五郎領知之節、亥丑辰巳四ヶ年洪水大破ニ付竹木諸色人足扶持米等領主人用を以普請仕候由、然共証拠書物無御座由村方より書付差出申候

一、享保十二未年より御料所ニ成候元文二己年迄十一ヶ年之内□嶋作右エ門御代官所之節、戊子二ヶ年字樽原瀬・下中原と申井堰二ヶ所洪水大破ニ付、雜木御買上、人足村高百石百人、村役其余ハ御扶持米壺人五合宛被下御普請被仰付、式人御代官所之節、寅年字樽原瀬・下樽原瀬・天王と申井堰三ヶ所大破ニ付、雜木御買上、人足村高百石五拾人村役五拾人者御扶持米壺人七合五勺、其余者壺人一升七合つゝ質米被下御普請被仰付、同入御代官所之節、辰年右井堰五ヶ所共大破ニ付、雜木御買上、人足村高百石五拾人村役五拾人者扶持米壺人七合五勺、其余者壺人壺一升七合つゝ質米被下御普請被仰付、右之内寅辰二ヶ年ハ証拠書物有之、戊子二ヶ年分書物ハ紛失仕無御座候由村方より書付差出申候

とあり、元禄元年(1688)から享保2年(1717)までの30ヶ年間については不明であるが享保4年(1719)、享保6年・同9年・同10年・同15年・同17年・同19年、元文元年(1736)と20ヶ年の間に洪水大破を重ね、その度に村高100石に付き人足100人あるいは50人を出している。山で四方を囲まれている上斎原村では普請時の入用を雜木を売ることにより賄っていたのである。次にその山林についてみよう。前述のように村にとって林木は肥料として、また危急の時の資金源として重要な位置を占めていた。

一、當村百姓持林五町七反八畝廿歩但シ雜木林此御運上鎮貳拾九匁八分宛御上納仕候

此ヶ所拾四ヶ所

一、當村獵師鉄砲拾七挺

此御運上壺ヶ年壺挺ニ付銀壺匁宛御上納仕候

(中略)

八、村御林山恩原壺枚ハ中津川御林守茂平
赤和瀬池川人形仙五ヶ所同断浅右エ門

反別木敷相知レ不申候、右御林山より津山川岸迄道法り八里より拾里迄

一、右御林山御高札五枚御座候

此分御林山ニ建置申候

一、御林守給御米石四斗

御林守 茂 平
御米七斗 同 断 浅 右エ門
内 御米七斗

右為御給米石ケ年分石人御米七斗宛被下来ニ候 (前述「村明細書上帳」)

とあるように百姓が所持していた林が町弱、残りはすべて御林山となっていた。この広大な面積をもつ山林を給米をうけて林守2名が管理しており、後述されるように雑木は鉄穴製鉄にも使用されていた。

間稼については一般的な薪、わら仕事、木綿などあまりされていないらしく

農業之間男女共稼無御座候、尤前々鉄山等之場所江農業之間ニハ少々宛之賃日雇荷物等之持送仕候外之稼無御座候

また

往古森美作守様松平越後守様領分之節数十年来鉄山稼被仰付御料所ニ相成候而も鉄小割鍛冶稼被仰付、御運上相稼居申候ニ付当村不限奥五ヶ所者米穀等右稼場へ売払運送之費無御座候、其上村内えもの農業之間右荷物送り等之働仕助精ニ相成り御年貢御納所無滞相勤居申候所、御差止被仰出候ニ付連々困窮仕仰年貢難決ニ罷成候ニ付無勘当御上様江御願奉申上候処、此段御聞済之上鉄山稼相立候ニ付ヌ候、右御運上差上ヶ当時相稼居申候 (前述「村明細書上帳」)

とあるとおり、鉄山稼に関連した日雇賃労働としての荷物運びがおこなわれていた。また、村で鉄山稼がおこなわれることにより年貢米を城下まで輸送する費用がうき、村の負担が軽減されるという利点もあった。ちなみに、津山までの年貢米の輸送には「駄賃」が「米石ニ付、拾石位も相懸」(同上)っていたのである。

この賃労働に関しての詳細な考察は別項で試みるとして、次に村内の人口構成をみていくことにしよう。

表4-4-2によると天保4年(1833)に133戸存在していた軒数が同9年になると92戸に激減しており明治13年(1880)に至っても101戸と天保4年の状態まで回復されていない。天保11年(1840)に村から津山の御役所に出した「歎願書」(三船家文書)には天保7年(1836)に起きた飢饉、いわゆる天保の大飢饉の状態が次のように記されている。

当御預所西々條郡上斎原村之儀者、極山中山寄之村方高山之麓ニ而冷気強ク土地柄ニ御座候而、麦作生立不申村方ニ御座候処、申年(註 天保7年)之儀者前代未聞と申位大凶年、素々年々困窮故奥組村々之内ニ而も上斎原村一村ニ限り格別難決、無勘及飢ニ死失又者難散等仕家数四十軒斗茂明家ニ相成、右ニ付而ハ手余リ荒地等茂多分出来仕候分悉弁納ニ相成候之間、村柄年増困窮ニ陥り往々如何成行可申哉と一同心痛仕候儀無限歎ケ數奉存候ニ付、村方一同打寄評議仕候処、近年明家ニ相成居候分へ入百姓ニ而も引受手余リ地主付候而弁納相減候之様致し外無御座候処、右入百姓引請候ニ者農道具夫食之手当取斗遣不申候而者入込候もの無御座候ニ付、拝借等ニ而も御願申上度

奉存候得共、是又御時節柄奉忍入候ニ付、於村方ニ取斗方種々評儀仕候処、村方野山火除場ニ立置候杉木之分伐出シ板小割等仕立売払ニ仕候而も、御城下迄道法之儀故多分之駄賃相掛り益分格別之儀無候得共、少々宛益分出来可仕奉存候間、右益筋を以入百姓引受之手当ニ取斗度奉存候

この中にみられる「四十軒斗茂明家ニ相成」という記述は上述の天保4年と同9年の戸数差41戸と符号することから戸数激減の原因が天保の飢饉であることに間違いないと考えられる。ついでに述べておくと、百姓株が潰れて生じた荒地は惣受地となり村に負担がかかるのでこの場合も雑木を売ってそのお金で入百姓を頼んでいることがわかる。

人口についても同様に天保2年(1831)589人、天保3年(1832)580人、同4年613人、同5年624人と徐々に増加しながら嘉永2年(1849)には460人と156人も減少しているのである。その影響を直接うけるのが耕作地をあまり所有していない木地師であり、天保4年の36戸から同9年には16戸と2分の1弱になっている。村ではこの時

近年打続凶年ニ付木地挽之もの共死失仕、当時家出仕候ニ付、去歳之義ハ御運上御免御願申上候と、木地軸運上の免除を願出ている。この時期を除けば戸数・人口ともそれぞれ緩慢に増加している。

牛馬数では天保5年まで16頭であった牛が嘉永2年に35頭となり、馬がそれまでの3頭から1頭に減少しているの目立つ。明治9年(1876)・11年(1878)には牛が246頭に、馬が

表4-3-2 村内人口構成

	戸数	高持	無高	木地師	社人	工商	人口	男	女	牛	馬	史 料
天保 2	1831	—	—	—	—	—	589	324	265	16	3	「去卯歳中人別出入牛馬増減改書上帳」
3	1832	—	—	—	—	—	580	317	263	16	3	同 上
4	1833	133	97	36	2	—	613	—	—	16	3	「己歳宗門人別改書上扣江帳」
5	1834	—	—	—	—	—	624	342	280	16	3	不 明
9	1838	92	43	30	16	2	—	—	—	—	—	「西々條郡上斎原村明細書上帳」
嘉永 2	1849	107	—	—	—	—	460	—	—	35	1	「当戌家数人別惣寄差引書上帳」
3	1850	107	—	—	—	—	462	235	221	35	1	同 上
安政 7	1860	101	74	25	—	—	505	252	253	36	1	「申宗門御改帳」
明治 4	1871	101	—	—	—	—	497	254	243	28	2	「家数人別差引帳」
9	1876	110	107	—	—	3	510	263	247	246	1	「明治9年以降年表」
11	1878	122	110	—	—	3	546	—	—	155	50	同 上
13	1880	110	107	—	—	3	545	279	269	150	40	同 上

注) 天保9、安政7(万延元)の史料は田淵家所蔵のものを、多くの史料はすべて三船家所蔵のものを使用。

50 頭に増えているがその増加の原因は不明である。

(2) 農民の階層構成

前項で農業生産を中心に上斎原村の村内概況をみてきたわけであるが、ここではそれを基礎にして近世後期の農民層の構成を村内持高により考察してみよう。

図4-4-1は上斎原村における農民層構成の概況をローレンツ曲線により把握しようとしたものである。図中記載にあたりX軸に戸数、Y軸に持高をとりそれぞれ全戸数、最高持高を100%にしている。この図を分析する場合延享2年・明治8年については無高層が不明であるため記載されていないことに注意する必要がある。そこで無高層を除外した図4-4-2を参考にしてみたい。

図4-2-2によれば万延元年から天保5年にかけて 立度がゆるやかになっているのが目立つ。最高持高がこの間18石9斗3升7合から14石2斗9升9合と下っているから上位クラスの農民と下位クラスの農民との持高隔差がわずかながらも縮まった結果であろうと考えられる。しかし、万延元年までには(図4-4-1)分解が急激にすすんでおり無高層の増加とともに 立度が鋭くなっている。明治8年になると、(A)2~3%の上層農民、(B)3.5%の中層農民、(C)6.0%強の下層農民という区分がみられはじめる。これにより万延元年と明治8年を図4-4-2で比較すると(B)の中層農民の分解がみられる。なお、持高で(A)、(B)、(C)を区分するとそれぞれだいたいにおいて20石以上層、5~20石層、5石未満層にあたることから、農民層を上農層(20石以上層)中農層(5~20石層)貧農層(5石未満層)、無高層に分類した 山崎 隆三氏の説とほぼ一致していることがわかる。第1項で考察したように畑地比率が低く商品経済もほとんどはいり込んでいないこの村で天保5年から明治8年にかけて、このように分解が急速に進むのはどうしてであろうか。その考察は第3項でするとして、次にローレンツ曲線による農民層の構成及び分解過程の概況を表4-4-3により具体的にみていくことにする。

延享2年は戸数比率で中農層(中層農民)が33.7%、貧農層(下層農民)が66.3%であり、持高比率でみるとそれぞれ77.3%、22.7%となっている。この延享2年に若干の無高層が存在していたと考え、天保5年は戸数比率において中農層・貧農層ともほとんど変化はみられないが、持高比率では5戸あった15~20戸石層の中農層が9.3%減少して68.0%となりその分貧農層が増加している。万延元年にはローレンツ曲線にあらわれていたように分解が急速に進み、延享2年、天保5年にはなかった上農層(上層農民)が2戸出現し持高比率で12.9%を占めている。中農層は戸数が7戸、5.5%増加したにもかかわらず持高比率では63.9%と4%程度の減少を示し、貧農層は戸数で6戸、7.5%減るとともに無高層がその中で27戸に増え、結果として持高比率が23.2%まで下がる。明治8年になると36石3斗7升の最高持高を筆頭に上農層が3戸に増えしかもそのすべてが30石以上層で持高も全体の19.3%を占めるようになる。貧農層では天保5年から万延元年にかけての急激な土地喪失度をより一層深めている。すなわち、戸数比率は67%と万延元年に比して6.4%増えているにもかかわらず、持高比率では逆に4.1%減少しているのである。これは主として

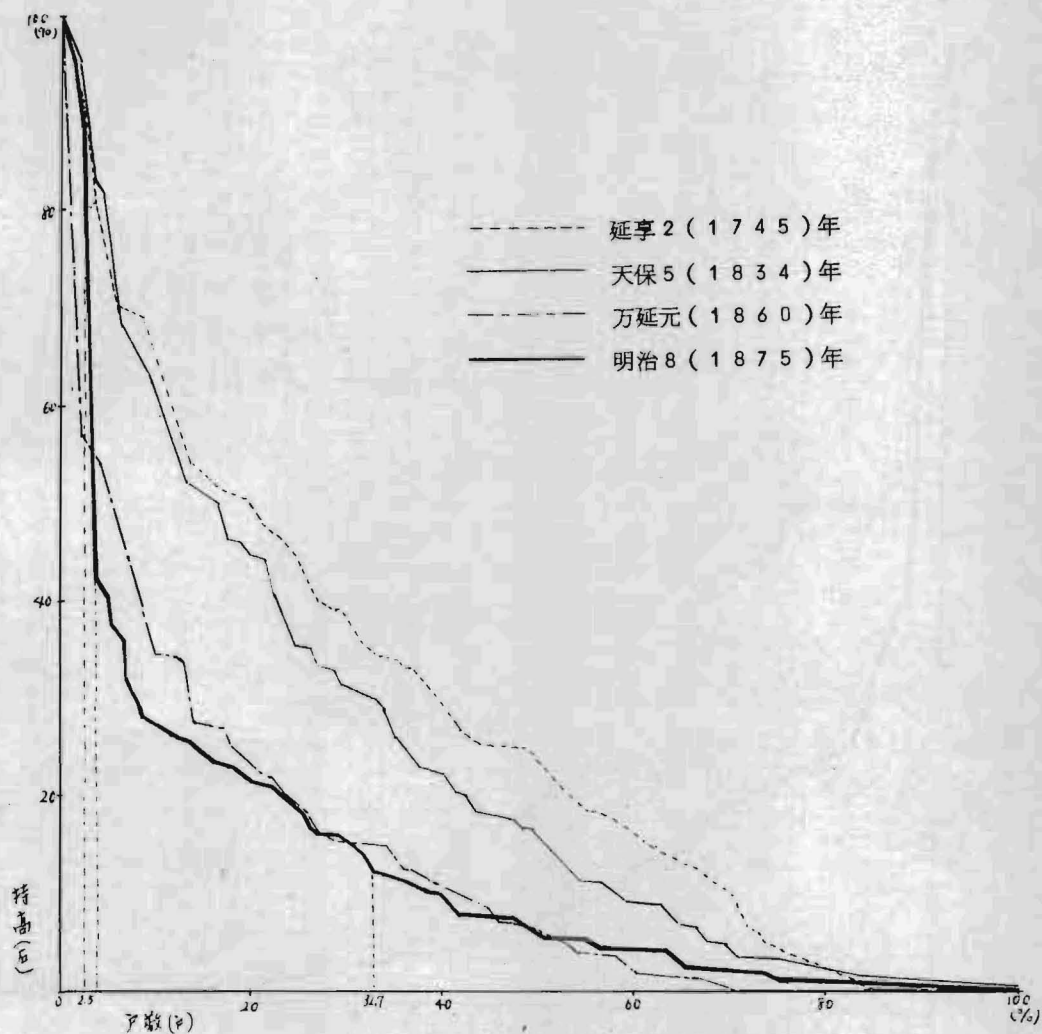


図4-4-1 上斎原村における持高階層分布

注) 延享2・明治8年については表4-2-1と同一史料，天保5年は「午歳御年貢米銀請納帳」，万延元年は「申宗門御改帳」（以上田淵家所蔵）による。したがって各年代の戸数比率は無高層を含めて算出した。

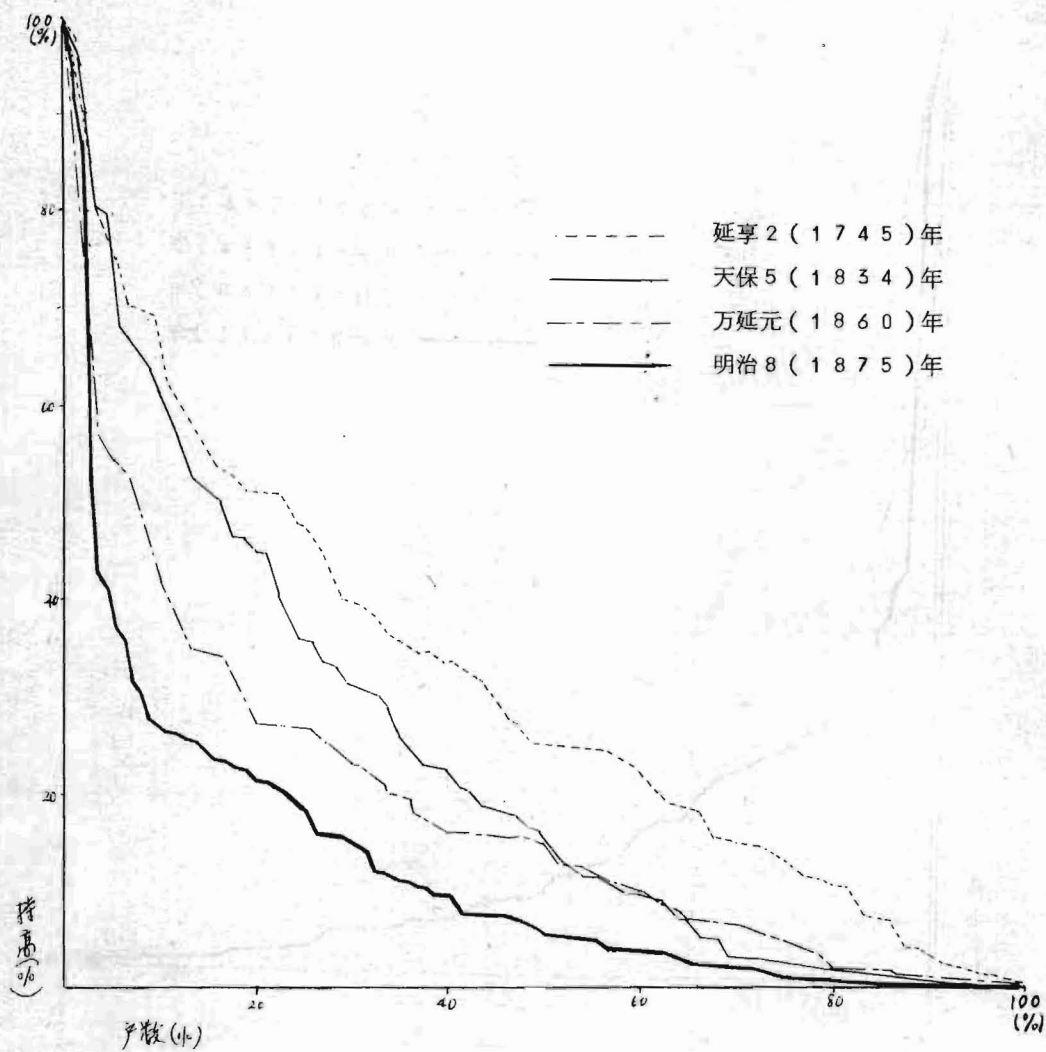
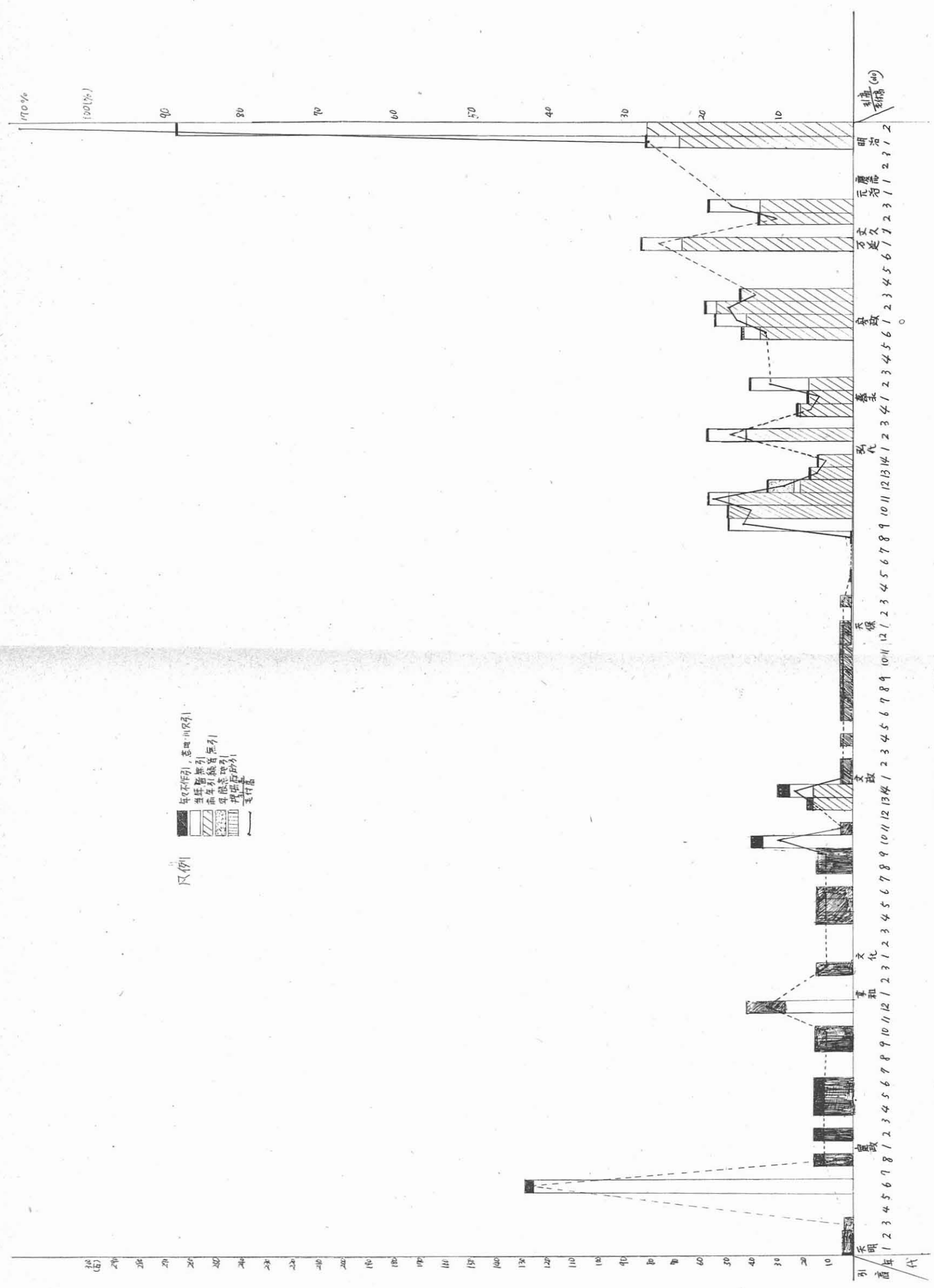


図4-4-2 上斎原村における持高階層分布

注) 各年代の戸数比率は無高層を含めず算出した。



元木地師の農民化の結果であり、彼らが非常にやせた土地しか所有できなかったためである。中農層においては戸数比率・持高比率がそれぞれ7%, 2.3%減少しており分解は依然として続いていると考えられる。なお、明治8年の依拠史料「地価取調帳」には畑の収穫量の記載がないため田畑とも反当収量を1石としたが、赤和瀬における耕地、8町5反3畝12歩についてはあまりに収穫量が少ないため反当収量を3斗とした。この村では山に四方を囲まれた山村であるせいでもあるだろうが、出作はなく豪農層と呼ばれる50石以上層は存在しなかった。

表4-4-3 上斎原村持高階層構成の推移

年代 持高区分	延 享 2				天 保 5				万 延 元				明 治 8			
	戸数 (戸)	戸数比率 (%)	持高 合計 (石)	持高比率 (%)	戸数 (戸)	戸数比率 (%)	持高 合計 (石)	持高比率 (%)	戸数 (戸)	戸数比率 (%)	持高 合計 (石)	持高比率 (%)	戸数 (戸)	戸数比率 (%)	持高 合計 (石)	持高比率 (%)
30石以上													3	2.6	102,017	1.93
25～30									1	1.0	27,884	7.3				
20～25									1	1.0	21,266	5.6				
15～20	5		84,761						4		61,481		2		34,686	
10～15	7	33.7	81,740	77.3	7	31.9	83,334	68.0	5	37.4	59,456	63.9	6	30.4	75,816	61.6
5～10	17		124,339		24		174,518		29		123,456		33		213,929	
1～5	26	66.3	76,002	22.7	38		115,874		19		83,368		39		84,803	
1石未満	31		9241		13	68.1	5442	32.0	16	60.6	5,520	23.2	32	67.0	16,129	19.1
無 高	—	—	—	—	※15		0		27		0		—	—	—	—
合 計	86	100.0	376,083	100.0	97	100.0	376,688	100.0	102		382,271	100.0	115	100.0	527,380	100.0
最高持高	18石9斗3升4合				14石2斗9升9合				27石8斗8升4合				36石3斗7合			
寺社関係	1石1斗7升				2石2斗1升9合				—				—			
そ の 他	1石9斗1升4合				1石5斗4升				—				—			
依拠史料	「本田畑畝名寄帳」 「新田畑山形并畝名寄帳」				「牛歳御年貢米銀請納帳」				「申宗門御改帳」				「地価取調帳」			

注) 依拠史料は図4-4-1と同じ。

※印「生死人別出入該胎人等御届ケ帳」により算出。

(3) 災害と濁水と農民の貧窮化

ここでは、災害と濁水とが村にどのような影響を与えたかをみることにする。

図4-4-3は免状記載の引高を分析することにより災害の時期、規模が推定できるとの観点からそれぞれ天明元年～明治2年の引高をグラフに示したものである。

図4-4-3をみると、天明6年(1876)に128石に及ぶ引があるのに気づく。これは当時全国的規模でおきた天明の大飢饉がこの村においても想像に絶するほどの被害を与えたことを物語る。天明8年には、これが14石余にまで減じているのは主として村内農民による起返しの結果であり、当時はそれを実行できるだけの余裕がまだ村に残っていたことを示している。以後天保の大飢饉を経験するまでの約50年間、寛政12年(1800)におきたと考えられる災害を除けば平均的に安定した年が続いている。

次に天保期以後の状況をみていこう。天保6年(1835)には免状が存在しないのであるが、村の荒地状況を調べた「未歳上斎原村田方水損取改帳」(三船家所蔵)によると、この年水害を受けていることがわかる。田方だけでその被害は面積で9町7反4畝28歩、高で146石5斗3升1合にも及び、実際には畑方の分を加えるともっと多いと考えられる。そしてその翌年天保の大飢饉をむかえるのである。免状には天保9年に48石余の引がみられるのであるが実際には2年前の天保7年よりおきているのであり、天保11年(1840)に村から津山御役所に出した書付には(第1項人口のところで既掲)、天保7年におきた飢饉により死失、離散で40軒程明家になったと述べられており、村では荒地となった40軒分の土地に課せられていた年貢まで支払わなければならない状況であった。これほどの飢饉に際して、津山藩では天保9年に48石程度の引しか与えていないのであり、しかも前年の天保8年には形式的なものと考えられる荒地川欠引の6斗5升のみであり、前述のように村では実際の被害と引高との差から生じる実質的な年貢の超過分も上納していたのである。しかし、裏作もできないこの村においては、その疲弊は容易に回復されたとは考えられず、天保14年(1843)に13石程度まで引が下ってはいるが、藩の経済事情が長期間の年貢の軽減を許さなかったと考える方が妥当であろう。

弘化2年の40石を越える前年引続皆無引からうかがわれるように弘化元年に再び飢饉に見舞われており、その規模は引高を見る限り天保の飢饉と同程度である。

以後、弘化4年22石、嘉永元年17石余と徐々に低下するが、嘉永2年から明治2年迄は少なくとも免状の存在する年代に於いて文久2年に30石代を記録するだけで他はすべて40石を越え、明治2年にはついに246石強という引高を残している。しかも、嘉永6、安政1・2年、文久1・2年、明治1・2年をみればわかるように、その年代の引がほとんどそのまま前年引続皆無引となっている。これは打続く災害に村は疲弊の度を深め起返しを行なうことにも困難が生じていたことをしめしている。このように天保6年からの飢饉を中心とする災害は農村の生活を極度に圧迫した。これを決定的にしたのは、農業技術の未発達と余剰生産物を全て徴収するという封建的年貢収取形態であった。

災害に加えて文政期頃から、耕作の主体者である農民を苦しめた、鉄穴流しによる濁水問題が表面

化してきている。

鉄山稼は、日雇賃労働による収入、年貢米輸送経費の軽減、後に記すように猪・鹿から農作物を守ることなど、この村に多くの利益をもたらした。しかし、それは大きなマイナス面も村にあたえた。

史料の上で、濁水問題が最初に現われるのは文政3年(1820)である。少し長くなるが載せておく。

再熟談議定書之要

御領分西々 條部上斎原村外拾三ヶ村之儀古来より農業余力鉄砂取相稼罷在候処、中川筋久田上ノ原村外貳拾八ヶ村之儀濁水相流候而者水請一統品々難決之旨故障申立、稼村々相手取、先年以来度々及出入、右稼相上へ罷在候処、稼村々之儀者極山中反作一毛取之村方ニ而例年麦作者一向生立不申、冬春之稼無之、当国雑木生茂り猪鹿等夥數相住居日夜作物食荒候得共、通船者勿論稼等相流候土地ニ無之 運送敷敷故、右雑木伐出候儀も不相叶、鉄砂取相稼候外致方無之處、右稼相止メ候而追々及難決御年貢御納所も差支候処、成行必至ニ差詰罷在候處、今般押入村中庄屋岸本徳十郎・宮部下村同断準兵衛立入、先故障村々江及談候者水請村々品々故障手当水損取之掛稼為致候様申談候處、先來下村々之儀者先達而及出入候程之事ニ候得者容易ニ熟談難致之旨ニ候得者大成御国益ニも有之儀、殊ニ相当之手当取斗相稼又追々山方相盛候得者隣郷一国之潤ニ相成候儀ニ付上下為筋不少精々人共申談候處、一同熟談相整得心之上今般年季相定掛稼儀定、左之通

一、鉄砂取之儀者例年秋彼岸より翌春彼岸迄之間相稼其余□相稼中間鋪(敷)、且年限之儀者当辰秋より来々寅春彼岸迄中十ヶ年季ニ相定此手当料先銀札貳拾貫目書面之水請村々江稼村々致出銀可申候、然ル上者右年限中自然稼方相滞候年柄有之候者向後并銀之不及沙汰、当国跡年季継之儀者年明前年水請村々故障之厚薄ニ随ひ、先儀定之趣を以証拠為取替相稼可申、当国右一件ニ付掛合等出来之節者諸入用右稼方へ引請可申、

右之通熟談議定仕一同無申分得心致印形候處相違無之候、然ル上者年季中聊違差致間鋪候、依之連印儀定書為取替申處如件

文政三辰年九月

(以下略)

(田淵家所蔵)

これは、「稼方村々」13ヶ村と「水請村々」28ヶ村との間に結ばれた、現在の公害協定にあたる議定書である。上斎原村は稼方としての立場にあるが、水請の村と同様に濁水に悩んでいたであろうことは想像に難くない。前文には「稼方村々」がなぜ鉄山稼をもたなければならないのかを記されている。内容は最初に述べたとおりである。取決められた事項をみると、①鉄砂取は毎年秋彼岸から春彼岸まで ②鉄山稼の年季は10ヶ年 ③その間の濁水被害の代償として水請の村々へ銀札20貫目を与える ④この訴訟の費用はすべて稼方が出す、という点が明記されているのである。この種の議定書は年季初めに取交されていたらしく、文政3年のほか天保5年・嘉永2年・万延元年の議定書が存在している。表4-4-4はこれらの議定書の重要項目を整理したものである。文政3年については上述してあるので説明の必要はないと思うが、ただ鉄山稼をしなければならない理由が明確に記されているのはこの年のみで他の年については全く除外されていることから考えて文政3年の議定書

表 4-4-4 議定証文における取決め事項の推移

年 代	稼 方 村 数	水 請 村 数	鉄山稼 年 季	稼 場 個 所 数	手 当 (賠償額)	稼をする 理由 の有無	そ の 他 取 決 め 事 項
文政 3 (1820)	13ヶ村	28ヶ村	10ヶ年	—	銀札 20貫目	○	鉄砂に関する訴訟費の稼方による全額負担
文政 13 (1830)	—	—	3ヶ年	—	—	×	—
天保 5 (1834)	13ヶ村	29ヶ村	12ヶ年	1	—	×	濁水発生時に水請村に調査権、鉄砂に関する 訴訟費の稼方による全額負担
嘉永 2 (1849)	7ヶ村	22ヶ村	12ヶ年	2	銀札 25貫目	×	—
万延 元 (1860)	7ヶ村	26ヶ村	4ヶ年 (翌文久 元より)	2	銀札 20貫目	×	鉄穴流し場変更届出制(水請村へ)、古鉄穴流し 場一時使用による手当増額(情況により)、鉄砂に 関する訴訟の稼方による全額負担

注) 史料は文政3「再熟談議定証文之事」 天保5「差上申熟談議定証文之事」 嘉永2「熟談議定証文之事」 万延元「濁水熟談議定証文」(すべて田淵家文書)による。

文政13年については天保5年と同じ史料。

は最も古いものである、と推察され、これら5つの議定書で1820年(文政3)より1863年(文久3)までの鉄山稼が行なわれた期間すべてがわかる。文政3～天保3、天保5～弘化2、嘉永2～万延元、文久元～元治元である。濁水がどの程度被害を及ぼしていたのかをみる場合、手当額と「その他取決め事項」が重要なポイントとなる。天保5年の議定書から抽出した文政13年の分は一部除外するとして、天保5年に手当に関する取極がないのは、

猶又去巳年より当年歳春迄鉄山老ヶ所ニ再再掛相稼候処、勿論為差濁水ニも無之候ニ付、今般中庄庄屋野村保田律吉立入再熟談取議議定左之通 (天保5年 史料表4-4-4と同)

とあるように、前年季中濁水訴訟がなかったためであるが、嘉永2年・万延元年には、それぞれ銀札25貫目・20貫目と再び濁水が問題になっており、多くの村民は鉄山稼の利点と欠点の板ばさみになっていたと推察される。

(4) 賃労働と村

上斎原村では鉄山稼・木地挽と関連した日雇賃労働が行なわれていた。鉄山稼・木地師についての詳細な考察は別に山地産業として節を設けているので省略するとして、この賃労働の性格を村との関係からみていこう。

まず大まかに村としての鉄山稼の存在意義をつかんでおくと、賃労働の他に第1項でみたように年貢米輸送における負担の軽減などがあげられる。

賃労働は問屋を中心とした荷物運びと鉄山稼場での労働の2種類に分けられる。史料上の制限から

表4-4-5 月別鉄運搬量及び従事者数の推移

	天保5年		天保14年		天保15年		明治3年		明治4年	
	運搬量 (束)	従事者数 (人)	運搬量 (束)	従事者数 (人)	運搬量 (束)	従事者数 (人)	運搬量 (束)	従事者数 (人)	運搬量 (束)	従事者数 (人)
1月	24	15			1	1			9	4
2	49	17			94	14				
3	184	24			273	30			281	31
4	276	25			545	25			93	10
5	239	35			180	20			2	1
6	79	19					36	4		
7	11	4	10	7						
8	91	17	2	1						
9	145	28	128	27						
10	143	26	41	14						
11	92	14	9	4			26	4		
12	59	21	5	2						
計	1,390	245	195	55	1,093	90	62	8	385	46
史料	「金吉山鉄請取帳」		「焼山割贈り出帳」「栄杉山小割贈り帳」		「請山鉄鉄受払帳」					

(注) 1. 従事者人数合計は延べ人数となっている。

2. 表中史料はすべて田淵家文書による。

ここでは荷物運びの内鉄の運搬を中心として考察するが、この日雇賃労働を分析していく上で、次の2つの視点をあげておく。

第1の視点として、この賃労働が間稼としての性格を近世後期から明治初年にかけてもちつづけていたかどうか、つまり村内農民が労働者化してゆく傾向があるかどうかをみる。第2の視点では第2項での考察をもとにしてどの階層の人々が主として行っていたのかを分析する。

第1の視点により表4-4-5をみてゆくと、天保5年では鉄の運搬量(以下運搬量と略す)100束(鉄運搬の際の単位を束という)を越える月は3、4、5、9、10月で特に4、5月はそれぞれ279束、237束と最も多くなっている。同14年7月から15年5月までは3、4、5月に集中的に運搬されている反面、天保5年に比して9、10月が減少している。また8、11、12、1月は極端に運搬量が減少し、農繁期・積雪期にはほとんど運搬が行なわれていないことがわかる。明治3年6月から同4年5月までの分ではその傾向がより一層強まり、200束を越える月は3月のみで100束を越える月さえなく、7、8、9、10、12、2月に関してはゼロを記録している。従業

者数もそれに対応して同様な傾向がみられ、日雇賃労働の間稼としての性格は年を経るにしたがって強くなっていくものと考えられる。このことは第2項の濁水問題で、稼方と水請村との間に取交された議定書の影響も働いていると考えられる。その中では鉄山稼を行なう期間は秋彼岸から春彼岸までとされていたことは前述のとおりである。運送の時期もその間に集中するのである。

本文之通上齋原村之儀者場広之村方ニ者御座候得共、山分之事故諸作夷入不仕年柄多く御座候而農業余力ニ山稼無之候而ハ地合難立行御座候ニ付、本文御聞濟被為成下候ハ、余力稼も出来仕、旁以村方為筋不少御座候間、本文奉願上候

（前掲「乍恐以書附御款奉申上候」（付紙）とあるように、上齋原村においては、この日雇賃労働が生活を維持していく上で重要なウェイトをもつものであることは無視できない。

次に第2の視点の階層別賃労働の状況を考察していくことにする。

表4-2-6は「持高階層別鉄運搬量及び従事者数の推移」を示している。但し、「持高階層」と「鉄運搬量人数」の年代が史料の制約から厳密に対応していないが、傾向はうかがえるのではないかと思われる。また、史料の関係から賃労働に従事したすべての農民がどの階層に属していたのかをみることはできなかったが、この表によりおよその傾向はつかめるであろう。

表4-4-6 持高階層別鉄運搬量及び従事者数の推移

持高記載 年代	天 保 5 年								万 延 元 年				明 治 8 年			
	文 政 8 年				天 保 5 年				明 治 3・4 年				明 治 3・4 年			
	鉄 搬 量 (俵)	運 搬 率 (%)	人 数 (人)	人 比 率 (%)	鉄 搬 量 (俵)	運 搬 率 (%)	人 数 (人)	人 比 率 (%)	鉄 搬 量 (俵)	運 搬 率 (%)	人 数 (人)	人 比 率 (%)	鉄 搬 量 (俵)	運 搬 率 (%)	人 数 (人)	人 比 率 (%)
20石以上																
10~20	16	12	1	1.1	7	05	1	1.1	10	2.2	2	35	8	1.8	1	1.2
5~10	210	151	15	16.1	73	53	8	9.0	48	10.7	5	88	76	17.0	6	10.5
1~5	184	132	12	12.9	87	6.3	6	6.7	28	6.3	2	35	8	1.8	2	3.5
1石未満	28	20	3	3.2	35	25	3	3.4	12	2.7	4	7.0	11	2.5	4	7.0
無 高	—	—	—	—	—	—	—	—	52	11.6	4	7.0	—	—	—	—
持高不明	952	685	62	66.7	1,188	85.4	71	79.8	297	66.5	40	70.2	344	72.9	44	77.8
合 計	1,390	100.0	93	100.0	1,390	100.0	89	100.0	47	100.0	57	100.0	447	100.0	57	100.0

注) 依拠史料 持高記載史料は図4-4-1に同じ。

鉄量記載史料は文政8「小泉山小割請払帳」（田淵家所蔵）、他は表4-2-4と同じ。

10～20石層はどの年代をとってみても従事者は1ないし2名で運搬量も文政8年16束、天保5年7束、明治3・4年についても10.8束と他の階層に比してきわめて少ない。同様に1石未満層も多くて3.5束で、運搬量比率をみても2.0%から2.7%と比重は低い。1～5石層は年をへるにしたがい運搬量比率は下がる傾向を示し、文政8年には13.2%であるのに、明治3・4年では1.8%にすぎない。それらに対し、5～10石層は天保5年を除き運搬量比率で常に10%以上を維持するとともに明治3・4年分では17%を占めるまでになっている。無高層については明治3・4年についてしか判明していないが5～10石層の48束を上まわる52束を運搬していることからみて、5～10石層に比しても少なくとも同程度の従事率をもつものと考えられる。表4-4-7は万延元年に無高となる直吉なる人物の持高と鉄運搬量との推移を示したものであるが、この表によると直吉は天保5年6石3斗3升7合の持高をもつ中層農民であった。しかし、天保11年に持高1石6升8合の貧農層に転落、万延元年には前述のように無高となり元治元年も無高と変化がない。運搬量をみると、文政8年13束、天保5年20束、同10年13束、同14年14束、明治3・4年10束と10束から20束の間を上下しているにすぎず持高との相関関係はほとんどみられないといえる。

ここで第1の視点であった農民が上斎原村において日雇賃労働との関連から労働者化してゆく傾向があるかどうかをもう一度考えなおすことにしよう。いままでの結論を総合してみるとそのすべてが労働者化傾向を否定するものであるといえる。しかし問題点も多く存在する。まず、最も注目すべき無高層の動向がはっきりしないことである。そして、より本質的な問題は荷物運びそれ自体にある。年季を限って経営される鉄山稼に従属しているこの荷物運びは農民にとって本業とするにはあまりに不安定な職業であった。この項のはじめに記したように日雇賃労働には荷物運びと稼場での労働がある。後者の場合、前者より専門的であり、しかも鉄山稼と直接関係することから、むしろ労働者化の問題は稼場での労働が中心となるはずであるが、史料が存在しないためこの点は不明である。

荷物運びにおいて中枢的機能をはたす継立問屋は寛政9年(1797)三船家の先祖である茂兵衛によりはじめられたが、鉄山稼は村内農民の困窮化を防ぐものとして存在意義をもつ反面、その中で最も利益を得たものは問屋経営をしていた三船家であった。

一、私儀者当所より出来申木師もの并諸荷物津山表へ通路継立問屋ニ相究申候間、御請書差上候、然ル所去年九月より於當村地内ニ先規之通鉄山取稼荷物出来仕候□得者、右當所出来候諸荷物津山表へ継立問屋私方ニ相究居申候儀ニ御座候處、前書奉申上候伯州倉吉より御當国津山表へ通路荷物之間屋ニ相究居申候齋治郎より當所出来鉄山荷物継立問屋仕罷在候儀ハ先達奉差上置候間此段御勘弁被為成下、先達奉差上候御請出通り當所出来仕候諸荷物継立問屋私方江被為仰付被為下置候様乍恐奉願上候間、格別之以御慈悲右之趣御許容被為成下候ハ、難有仕合与可奉存候、此段宜敷被仰上可被下以上

上 斎 原 村

願 主 茂 兵 衛

文政六年癸二月

(「乍恐以書付再応奉願上候事」 三船家所蔵)

この「書付」によると斉治郎と茂兵衛とが問屋経営の権利をめぐるの争いをおこなっている。実際にどの程度の利潤を得ていたのかは史料がないため不明である。

(5) 田畑質入売買による土地喪失と集中

農民層分解は(3)でみたように災害を主たる要因として生じてくる。そこでその分解がどのような形態をとりつつ進行していったかを以下で考察してみよう。

近世において支配者層(領主層)は農民に対して単純再生産に必要な最小限度のものを除きすべて年貢として収奪するものであり、自らの収入の安定のために安定した収穫を要求する。しかし農業技術の未発達な当時においてそれはほとんど不可能に近いことであり、一たび飢饉に見舞われると余剰生産物を持たない村方では再生産能力は失われ大部分の農民の窮乏化、それに伴う土地喪失・集中は避けられない。商品経済にまきこまれる度合の非常に少なかった上斎原村においても上述のような封建社会の経済的矛盾からは逃れえなかった。

山崎隆三氏によれば、「再生産を続けようとするれば、必要とする貨幣を借り入れなければならない。そのような時、まず、家族の一員を質券奉公人、長年季奉公人として放出するが、それについて土地の質入れによって借金を調達することになる」と規定されているように、多くの農民が田畑を質入れし、極度に窮乏化した農民の中には田畑はいうに及ばず仕事道具一式を質入れするものでいた。

質入證文之事

合金子三両壹歩也

但シ元分

此質物ニ

一、上畑六歩

高三升 壹

一、大槌式丁

一、小槌式丁

一、をさ五 忽

一、をさ目打大小三本

一、小槌三本

一、火かき式本

一、かなかき壹本

一、ぼと津き壹本

一、ぼと津き替せんば壹本

一、むし大小八ぜん 目方 百匁より四百匁まで

右者私義当子御年貢銀ニ差支候ニ付前書之畑并鍛冶屋道具不殘質物ニ差入此金槌ニ受取刻御上納仕候処真正ニ御座候、然ル上者来ル丑四月限り元金ニ式割之り足加ヘ急度御返納済可申候、萬一限月ニ至り少しニ而も不足仕候ハハ右質物ニ差入候畑并鍛冶屋道具前書數相改受人之私手前ヘ受取相渡し候共又者買払代銀ニ而御払申可候共御差図次第少しも御年繼仕間敷候、其節至り私義者不及申親類組合ニ至ル迄少しも申方無御座候、為其之親類組合請人并村役人申印形取之質入證文相渡し

表 4-4-8 田畑質入状況

年 代	借 銀 主	貸 銀 主	借 銀 高	質 地	本銀返済年限	備 考	
宝暦 2	六郎右工門	九 兵 衛	250目	上田 1反 7畝 15歩, 下田 3畝	下々畠田 3畝, 古林 1反	1ヶ年	
明和 5	加 七 郎	孫 四 郎	126匁6分	上田 9畝 24歩		〃	
〃 5	伝 七	孫 四 郎	209匁	上田 8畝 18歩		〃	
天明 6	惣 七	仁 兵 衛	385匁	中田 1反 18歩		3ヶ年	
〃 6	治郎工門	茂右工門	77匁5厘	下々田 18歩		〃	
寛政 2	助 十 郎	藤 兵 衛	100目	上畑 3畝 3歩, 中畑 1畝 3歩		〃	
〃 2	文 五 郎	小右工門	150匁	上畑 1畝 4歩		1ヶ年	
〃 3	勘右工門	氏 子 中	(140目)	上田 7畝 21歩, 下畑 15歩		一	質入流
〃 8	忠 兵 衛	藤 兵 衛	(260匁)	下田 1反 12歩		一	〃
文化 4	長 蔵	吉右工門	100匁	下々畑 7畝		1ヶ年	
文政13	浅 四 郎	竹 治 郎	475匁	中田 1反 6畝 24歩		2ヶ年	
天保 7	忠 兵 衛	茂 十 郎	銀札 100匁	下田 1畝 18歩, 下々畑 6歩		5ヶ月	
〃 7	金 平	竹 治 郎	(300匁)	下々畠田 2畝 12歩		一	流込ミ
〃 11	友 蔵	竹 治 郎	81匁	下々畠田 21歩, 下畑 9歩		1ヶ年	
〃 13	恒 蔵	嘉 蔵	(金 3両)	上畑 4畝		一	流込ミ
〃 14	模 相	茂 兵 衛	(銀 186匁)	上畑 1畝 3歩		一	永代流込ミ
〃 15	常 蔵	仁 兵 衛	264匁9分	上畑 4畝		1ヶ年	
〃 15	平 五 郎	万四郎以下10名	300匁	下田 4畝 9歩		3ヶ年	
〃 15	仁 平	万 四 郎	銀札 280匁	上畑 1畝 6歩, 家老軒		1ヶ年	
弘化 5	長 之 助	喜作山 源兵衛	110匁	下田 2畝 12歩		3ヶ年	
嘉永 4	弥 太 郎	大木山 平 蔵	600匁	下田 15歩, 下畠田 3畝	下々畠田 3畝	6ヶ月	
〃 4	直 吉	源 兵 衛	銀札 150匁	中田 4畝 12歩		4ヶ月	
〃 5	五 兵 衛	仁 平 太	金 3両1分	上畑 6歩, 鍛冶屋道具 一式		6ヶ月	
〃 7	直 吉	仁 平 太	1貫300匁	上田 3畝 15歩, 中田 1反 5畝 24歩		3ヶ年	
安政 2	竹 四 郎	仁 平 太	(750匁)	下田 1畝 27歩, 下々畑 12歩		一	流込ミ
〃 2	源 蔵	仁 平 太	(300匁)	上畑 1畝 3歩		一	流込ミ
〃 3	直 吉	仁 平 太	銀札 160匁	中田 4畝 12歩		4ヶ月	
〃 3	直 吉	仁 平 太	700匁	中田 4畝 12歩, 下畑 6歩		10ヶ月	
文久 2	槌 蔵	仁 兵 衛	金 2両2分	下々畑 3畝 9歩		2ヶ年	
元治 2	政 蔵	亀 治 郎	(金 40両)	下々畠田 27歩		一	流込ミ
慶応 1	音 吉	亀 治 郎	金 46両	下田 4畝		1ヶ年	
〃 2	忠右工門	政 蔵	(金 20両3歩)	下田 6畝		一	流込ミ
〃 2	栄 治 郎	亀 治 郎	金 30両	下田 1反 6畝 3歩, 下々畠田 2畝 6歩		2ヶ年	
〃 3	仙 作	田淵 亀 治 郎	金 50両	下田 1反 1畝 3歩		1ヶ年	
〃 4	定 蔵	田淵 亀 治 郎	一	田 12歩, 林 2ヶ所		1ヶ年	

注) 史料は、田淵家、三船家両家文書による。

申候處 仍而如件

嘉永五年十一月日

上齋原村借主	五 兵 衛
受 人 親 類 兼	萬 四 郎
年 寄	金 兵 衛
庄 屋	茂 兵 衛

同 村 仁 平 太 殿

田畑質入れは表4-4-8によると宝暦2年(1752)から明治元年までに35例ある。なお、「質入証文」がなくても「質入済証文」・「質入流込ミ証文」が残っている場合はそれらによったが、借金高については「質入れ」の際と相違するので()でくくった。一般的にいえば田畑質入れの理由は「御年貢銀=差支」えであり、質入れが実質的に売買と同一なものとなっていることは年貢さえ支払えないものがそれに加えて元利をも返済できるかどうかを考えれば容易に相像がつくであろう。

表4-4-8によると、天明6年~明治元年の間に田淵家(仁兵衛、仁平太、亀治郎)への土地集中は14件・田3反7畝24歩、畑9畝6歩、畠田3畝3歩である。

ところで、上齋原村においては質入れされた田畑が単に、質入れ→質流れという形態を取るだけではない。

次の証文は、直吉なる人物が嘉永7(安政元)年に質入れした上田3畝15歩、中田1反5畝24歩の土地が年季の3年を待たずに安政2年質流れとなった際の「田畑質入流込ミ上銀証文」とそれに付属する「田地流込ミ返り証文」である。

田地質入流込ミ上銀 証文之事

小山
一、上田三畝拾五歩 五斗九升五合 貳

貳反田
二、中田壹反五畝廿四歩

三畝廿四歩 五斗七升 六

内六畝歩 九斗 三

六畝歩 九斗 壹

反別 壹反九畝九歩

高 貳石九斗六升五合

此上銀

合銀壹貫七百目

右者私義年々御年貢銀=差支候=付去寅十二月中書面之田地質物=差入代銀儲=受取申候所、又御年貢銀=差支候=付右田地流込ミ相渡し前書之上銀儲=受取申候處真正=御座候、然ル上ハ来ル辰年ハ高反別名寄帳書替へ御引取御作廻り御年貢諸役共御納所被成候、後々=において私義ハ不及申=子孫親類組合=至ル迄毛頭少も申分無御座候、為其親類組合受人并村役人中印形取之田地質入流込上銀証文相渡し申候処、仍而如件

安政貳年卯十二月

上齋原田地議主

親類組合
百姓代
年寄屋

直吉
五平
文次郎
金兵衛
茂兵衛

同村 仁平太殿

田地流込ミ返り証文之事

(前略)

右者貴殿御所持之田地此度流込ミ受取来ル辰年と私作廻り仕候所実正ニ御座候、然ル上ハ来ル申ノ十一月迄五ケ年之間証文表元銀御返済被成候得者書面之旧地高反別茂相返し可申候、為其之相渡し申候處、仍而如件

安政貳年卯十二月

(人名略)

兩証文によると「質入流込ミ」とは「質入れ」した田畑を低当に再び借銀する際、一種の質流れと同じ状態になることをいい、それでもこの「質入流込ミ」を質入れから質流れにいたる一過程としたのは、「質入流込ミ返り証文」における「五ケ年之間証文表元銀御返済被成候得者書面之旧地高反別茂相返し可申候」という記載があるためである。しかし、借銀主にすればその条件は一段ときびしいものとなっている。元銀を返済する手段としての土地はすでに貸銀主のもとへと所有が移っているからである。どのような形態をとるにしても結局は一旦田畑を質入れするとその土地は貸銀主の元へとほぼ確実に所有が移り、旧地主は彼の下に小作としてはいっていく。

田畑小作証文之事

- | | | |
|-----------|-------|-----|
| 一、下田拾五歩 | 高六升 | 新開 |
| 一、下田三畝歩 | 高三斗六升 | 新開 |
| 一、山方畑田十五歩 | 高四升 | 已畑田 |
| 一、下々畑三歩 | 高九合 | 起 |

此下作米

宅々年分

米拾貳俵半 金谷山着ニ而相渡し

右者貴殿御所持之田畑私義者小作仕処実正ニ御座候、然ル上者来ル巳と未迄三ケ年之間凶豊ニ不拘年々米拾貳俵半金谷山着ニ而斗渡し可申候、万一右小作米之内少ニ而茂不足仕候節受人と并仕少しも無滞御払可申候、為其受人村役人中印形取之田畑小作証文相渡し置申候処仍而如件

明治元辰歳

下齋原村小作人

親類組合受人兼

嘉代蔵
音吉

上齋原村庄屋仮役庄屋

同 村 庄 屋

下齋原村年寄

同 村 庄 屋

金 兵 衛

茂 兵 衛

権 左 衛 門

庄 六

上齋原村庄屋 田淵 亀 治 郎 殿

小作人嘉代蔵は地主田淵亀治郎に対し「三年之間凶豊ニ不拘年々米拾貳俵半」渡さなければならない。ところが嘉代蔵が小作している土地では4斗6升9合しか米は取れない。米12俵半は1俵3斗3升としても4石1斗2升5合に相当する。上齋原村においては1俵当りの米が普通の10分の1程度しかないのではないかと考えられるが、推測の域を出ない。

この質入れという形態は田畑の売買が寛永20年(1643)の「田畑永代売買禁止令」により固く禁止されて以来幕末にいたるまで、その統制が続くことで一般的に行なわれるのであるが、永代売買・譲渡しも近世を通じて根強く行なわれていた。すなわち、表4-2-7によると17例も存在するのであり、質入れの35例には及ばないにしてもかなり大きな比重を占めていたことがわかる。

永代譲り証文之事

一、下田屯反六畝三步 高貳石九升三合^{六五二}
一、下畑屯畝歩 同屯斗屯升 四

此代

銀貳百拾匁也

右者當子、御年貢銀ニ差支申ニ附書面之銀子槌ニ請取刻、御年貢ニ御上納仕候所衷正明白ニ御座候、然ル上者永代ニ相渡し申候間、来丑年々貴殿へ御取御作廻り可被成候、其時私儀ハ申不及親類組合子々孫々ニ至迄少シ茂申分無御座候、為後日村役人證人組合印形取立永代譲り証文相渡し申所依而如件

文化十三年子十二月日

上齋原村譲り主

證 人

組 合

年 寄

庄 屋

岩 助

金 助

茂 兵 衛

善 兵 衛

竹 治 郎

同 村 定 五 郎 殿

永代売買も質入れの時と同様田淵家・三船家(竹次郎)が、土地を集積している。

以上のように、(2)で考察した農民層の分解は、田畑の質入れ・永代売買という形態を通り、一方でほしいに田畑を失っていく多くの農民を出現させ、他方ではそれらの田畑を集積していく富農層を生みだしていくのである。

表 4-4-9 田畑売買状況

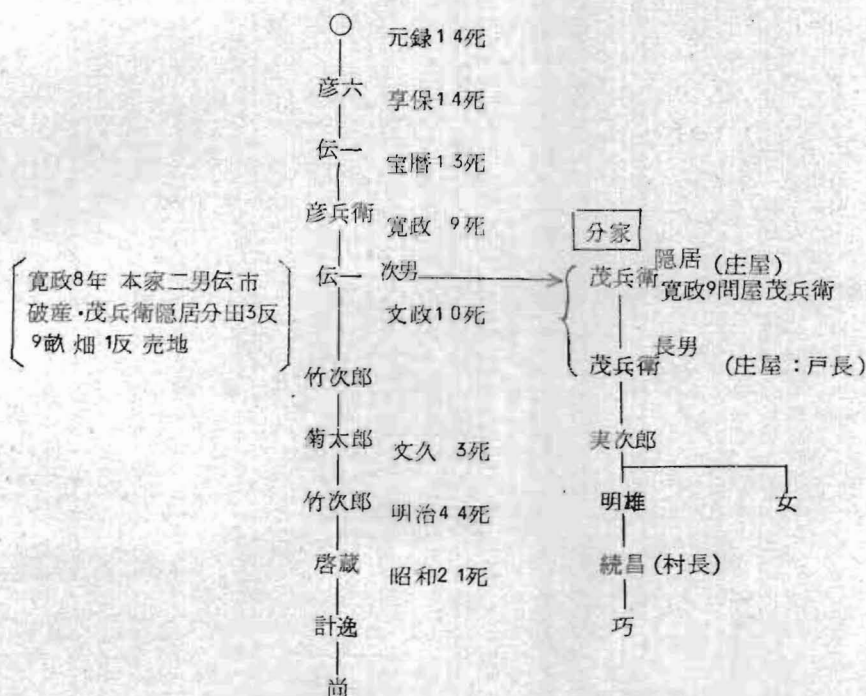
年 代	売 主	買 主	売 銀 高	売	地
宝暦 7	藤右エ門	六郎右エ門	100目	上畑 9歩、下畑 12歩、新田中畑1畝21歩、家1軒	
安永 9	徳右エ門	茂右エ門	834匁8分	上田4反 6歩、下田 2畝28歩、下々畑 9歩	
天明 2	平十郎	藤兵衛	500目	中田1反5畝21歩	
" 6	文五郎	仁兵衛	120匁	上畑 1畝15歩	
" 9	惣七	仁兵衛	440匁	中田1反 18歩	
文化 6	四郎エ門	竹治郎	30匁	下田 3歩、下畑 6歩	
" 6	忠兵衛	兵 助	100匁	上田2反	
			米 18俵		
" 11	天右エ門	竹治郎	90匁	下々畑 21歩	
" 13	岩 助	定五郎	210匁	下田1反6畝 3歩、下畑 1畝	
" 14	七郎右エ門	竹治郎	100匁	上田 7畝18歩	
文政 10	宇兵衛	瀧 藏	?	上田 4畝、 下畠田2畝18歩、下畑 12歩、下々畑1畝6歩、林 9畝	
天保 9	次郎右エ門	竹治郎	78匁	上畑 2畝21歩、家一軒	
" 11	與惣兵衛	次郎右エ門	78匁	上畑 2畝21歩、家一軒	
嘉永 元	瀧 藏	下斎原 庄六	金 20両	上田1反5畝15歩、中田 5畝6歩、下畠田2畝15歩	
文久 元	志 な	平 藏	金 35両	上田1反3畝15歩、中田3反2畝5歩、下田 2畝6歩、上畠田3畝15歩	
" 元	栄治郎	亀治郎	金 16両	中田 9畝 6歩、下田 2畝6歩、上畠田3畝15歩	
" 2	栄治郎	仁兵衛	金 20両	中田 9畝 6歩、下田 2畝6歩、上畠田3畝15歩	

注) 史料は田淵家・三船家両家文書による。

(6) 富農三船家の成長

ここでは田淵家と並んで万延期頃より富農層へと成長していった三船家へ焦点をあてて考察していくことにする。図4-4-4はその三船家の家系図である。

図 4-4-4 御船(三船)家 家系図



(注) 本表は、三船家の御位牌より作成した。

史料の制限から寛政9年に死亡する彦兵衛以前の三船家がいかなる家柄であったかは全く不明である。次代伝一は隠居した茂兵衛の次男であり、この時三船家本家は一度つぶれている。これは隠居した茂兵衛が庄屋職および継立問屋経営の権利を譲らないまま長男竹次郎をつれて分家したためと考えられる。それいらい庄屋職・問屋経営とも分家筋が受け継ぐことになる。その後本家は再興され、竹次郎が11石5斗6升2合(天保5), 菊太郎の代に16石4斗3升6合(天保11), 18石4斗8升7合(弘化4), 21石2斗6升6合(万延元), 明治8年三船竹次郎の時には36石3斗7升の持高を有する。こうした土地集積は高利貸などによりなされたものと考えられるが、詳細は不明である。それに対して、分家筋では前述のように庄屋職・問屋稼をおこないながらも土地集積はすすまず、天保5年10石9斗9升8合、元治元年12石1斗9升4合、明治4年15石4斗6升6合、明治8年13石5斗1升と中農層の域を出ないのであるが、その原因は本家の土地集積同様不明である。

上齋原村全体をみても表4-4-10にみられる県南の地域に比してほとんど土地集積がなされず50石以上層の出現がみられないことについては、前に考察したように商品経済が入り込んでいないこと、地理的に他村への出作が困難であったこと、また日雇賃労働が1～5石層、5～10石層、無高層を中心に行なわれたためかえて農民の極度の貧困化をおさえていたことなどがあげられよう。

表 4 - 4 - 10 芳井町山成家の持高推移

年 代	持 高
延宝 5 (1677)	15石5斗1升
天明 2 (1782)	33石
天保10 (1843)	170石

注) 持高数値については「地域研究第15集」

第4章第3節の井山一恵氏の研究成果を転載。

(藤 井 伸 哉)

5 農民住宅

① 住宅の階層性構成要素と階層類型

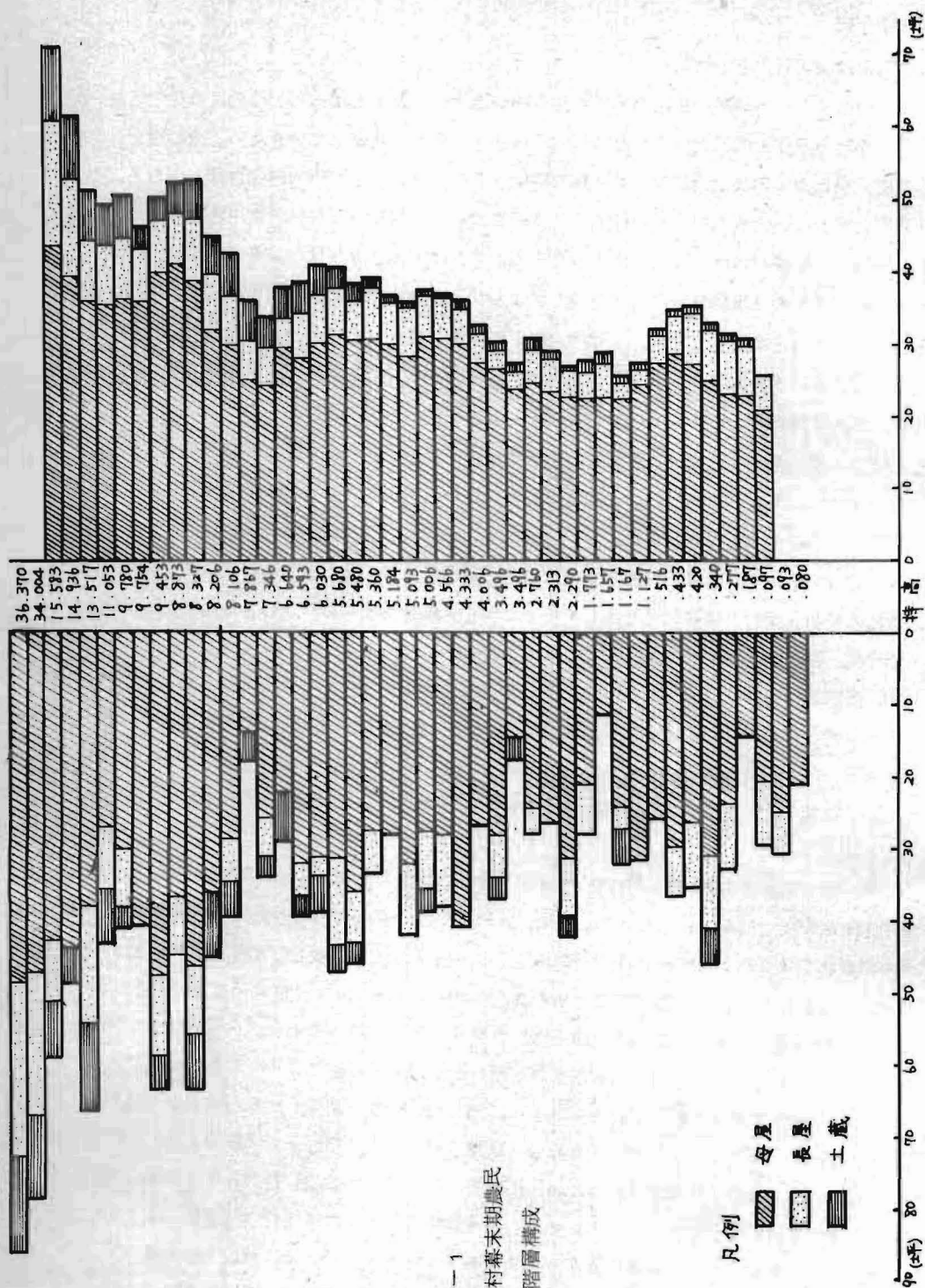
近世封建社会における農民の生活の実態を知る一つの手がかりとして本項では農民の住生活を取りあげ、かれらの住生活にどのような階層的相違があったかを考察していきたい。その場合、考察の基礎史料となるのは上斉原村役場所蔵の明治19年8月の「上斉原村建物台帳」である。この「建物台帳」は、上斉原村村内の住宅110戸について、屋敷番に従い戸主名と棟種の種別を記し、さらに各棟の建坪を記入したものである。これは明治10年代の調査であるが、同村役場所蔵の昭和5年の「家屋賃貸価格調査票」によってこの時点で建築後の耐用年数が60年以上経過しているものと照合した結果、「建物台帳」に記載の住宅は大体幕末期の状態を示していると考えてよいという結論をえた。そこで、この「建物台帳」に記入された110戸のうちで、明治8年の「地価取調帳」によって持高が判明するものを調べると45戸ある。

注(1)

ここの考察で用いる分析方法は、藤沢晋、中野美智子「近世後記農民住宅の階層構造」で提示された分析方法にしたがった。それは、近世末期農民の住宅構造にあらわれた階層性を次の4つの要素から分析したものである。すなわち、(1) 住宅建棟構成、(2) 住宅建坪総数、(3) 母屋の規模ないし間取構造、(4) 母屋の迎客家族用施設の充実度の4つである。ところが、上斉原村の場合、母屋の梁行・桁行や間取構造を記しているような文献資料は得られなかったので、(3)(4)については現在、残存する個別事例によってしかみることができない。

そこで、機能別建棟の所有状況によって45戸の農民住宅を類別すると、(イ) 建棟が「母屋のみ」(下層住宅)で長屋(納屋)、蔵を所有するにいたらないもの、(ロ) 母屋の外に長屋(納屋)を所有するが、いまだ蔵を所有するにいたらない「長屋(納屋)持」(中層住宅)、(ハ) 母屋の外に長屋(納屋)、さらに蔵をも所有する「蔵持」(上層住宅)の3つの階層的類型に分けることができる。

この(イ)(ロ)(ハ)の3類型を各戸の持高と対応させて、持高階層と住宅構造との相関関係を考察しよう。前項(1)階層構成で明らかにしてあるように、明治8年の上斉原村の村内農民の持高階層は5石未満の貧農層(62%)、5~20石の中農層(34%)、20石以上の富農層(4%)から構成されていた。ただし、無高層は不明である。ここで、図4-5-1に注目すると、これは、個々の住宅を持高順に並べて、左側にそれぞれの所有建棟とその規模を示し、右側にはそれを平均移動法によって5戸ずつ平均していったものを示したものである。この図によると、(ロ)の「長屋持」は5石未満の貧農層に属しているといえる。そして、(ハ)の「蔵持」は5石以上の中農および富農層に属し、その中でも、5石~10石の「蔵持下層」と10石以上の「蔵持上層」とに分けることができる。(イ)の「母屋のみ」はこの図には表われていないので、持高から「母屋のみ」をランクづけすることはできない。しかしながら、「建物台帳」には41戸の「母屋のみ」が記されており、そのうち、20坪未満が12戸、20~30坪が16戸、30坪以上が13戸で、それぞれの平均坪数は、14.22、24.73、34.77坪である。そして、20坪未満の12戸と20~30坪の16戸で「母屋のみ」の約70%を占めている。



注 (1) 本図で対象とした住宅は、上斎原村役場所蔵明治19年8月「上斎原村建物台帳」に記載され、かつ同役場所蔵明治8年「地価取調帳」によって持高の確められたものに限った。
(2) 左は、個々の建棟とその規模を示したものであり、右はそれを平均移動法によって示したものである。

これらは建坪からみれば、図に示されているのは平均して25坪以上なのでこの下に位置づけることができる。また「地価取調帳」に記されているのは土地を持っている者だけで小作農は記されていない。そして、上斉原村の場合、商業を営んでいるのは3戸だけで、あとはほとんど農民である。したがって、「地価取調帳」に記されていない「母屋のみ」は農民の中でも小作や出稼ぎで生計をたてていたものと考えられる。これらの点から「母屋のみ」は無高層と推定できよう。

表4-5-1 上斉原村幕末期農民住宅の階層構成

	戸主名	母屋	長屋	土蔵	建坪総数	持高
		坪	坪	坪	坪	石
1	三 船 竹治郎	48.65	24.5	13.75	94.4	36,370
2	田 渕 浅次郎	47.25	20	12	79.25	34,004
3	藤 木 喜 平	42.75	9	7.5	63.75	15,583
4	柳 井 富治郎	43.74	-	5	48.74	14,936
5	三 船 実治郎	38	16.25	12.5	66.75	13,517
6	水 島 政 蔵	26.96	8.75	7.5	43.21	11,053
7	藤 木 作 平	30	8	3	41	9,780
8	柳 井 周 蔵	40.5			40.5	9,754
9	藤 木 光五郎	47.5	11.25	5	66.25	9,453
10	藤 木 幾 蔵	36.62	8		44.62	8,873
11	片 田 小一郎	46.73	9	8	63.73	8,327
12	石 田 政太郎	36	-	9	45	8,206
13	草 刈 忠 衛	28.56	6	5	39.56	8,106
14	牧 野 定 蔵	13.75	-	4	17.75	7,867
15	片 田 熊 吉	25.75	5.25	3	34	7,346
16	柳 井 作 蔵	22	-	7	29	6,640
17	小 椋 治郎平	32	4.5	3	39.5	6,593
18	藤 木 伊 助	31.15	2.62	5	38.77	6,030
19	丸 山 秀太郎	31.23	12	3.87	47.1	5,680
20	藤 木 源 吉	35.96	7	3	45.96	5,480
21	小 椋 金 蔵	27.48	6		33.48	5,360
22	小 椋 清十郎	28			28	5,184
23	水 嶋 惣 助	32	10		42	5,093
24	小 椋 又 吉	27.48	8	3.25	38.73	5,006
25	小 椋 善五郎	28	10		38	4,566
26	柳 井 松 蔵	41			41	4,333

	戸主名	母屋	長屋	土蔵	建坪総数	持高
27	田 淵 紋 蔵	26.65			26.65	4.006
28	牧 野 丑 蔵	28	6	3	37	3.496
29	乗 峰 植太郎	14.4	-	3	17.4	3.496
30	小 椋 長 蔵	24.38	3.75		28.13	2.760
31	小 椋 惣治郎	26.25			26.25	2.313
32	牧 野 長 蔵	31.23	8	3	42.23	2.290
33	小 椋 岩 石	21	7		28	1.773
34	石 原 平三郎	11.25			11.25	1.657
35	牧 野 芳 蔵	24.13	3	5	32.13	1.167
36	丸 山 類 蔵	31.54			31.54	1.127
37	丸 山 銀 蔵	25.75			25.75	.516
38	牧 野 米 蔵	29.75	7		36.75	.433
39	小 椋 清 蔵	26.27	9		35.27	.420
40	牧 野 鶴 蔵	30.96	10	5	45.96	.340
41	水 田 栄治郎	23.83	9		32.83	.277
42	片 田 松太郎	14.42			14.42	.187
43	柳 井 忠治郎	20.5	9		29.5	.097
44	丸 山 柳 蔵	24.79	6		30.79	.093
45	牧 野 喜 蔵	21			21	.080

注(i) 本表は、上斉原村役場所蔵明治19年8月「上斉原村建物台帳」と明治8年「地価取調帳」により作成した。

(3) 建坪総数は、母屋、長屋、土蔵のほかには部屋、木納屋などを有するものについてはこれを合算した。

次に、表4-5-2によって各類型の住宅建坪数をみていくと、(イ)の「母屋のみ」住宅は前にも述べたように平均20坪程度の母屋をもつものと考えることができる。そして、(ロ)の「長屋持」住宅は、母屋が平均25坪に拡大され、これに4坪程度の長屋を加えて建坪を約30坪にしており、(ハ)の「蔵持」住宅になると、まず「蔵持下層」では母屋の規模が平均30坪に拡大され、これに5坪の長屋と3坪の蔵を加えて建坪を40坪とし、「蔵持上層」では平均40坪の母屋に13坪の長屋と10坪の蔵を加えて建坪を平均66坪としている。

表4-5-2 農民住宅の階層類型

持高階層	住宅類型	母屋	長屋	土蔵	建坪総数	戸数比率
10石以上	蔵持上層	坪 41.23	坪 13.08	坪 9.71	坪 66.02	戸 6 13
10石～5石	蔵持下層	31.82	5.42	3.45	40.83	18 40
5石未満	長屋持	25.0	4.18	—	30.09	21 47

注(1) 本表は図4-5-1より作成した。

(2) 数字は、平均値である。

したがって、上斉原村の農民住宅においては、A 住宅建棟構成「母屋のみ」、住宅建坪数「平均20坪」という下層住宅、B 住宅建棟構成「長屋持」、住宅建坪数「平均30坪」という中層住宅、C₁ 住宅建棟構成「蔵持下層」、住宅建坪数「平均40坪」という上層住宅下位、C₂ 住宅建棟構成「蔵持上層」、住宅建坪数「平均66坪」という上層住宅上位という階層の類型として把握することができよう。そして、この村では、Aは貧農下層（無高）、Bは貧農上層（持高5石未満）、C₁は中農下層（持高5～10石）、C₂は中農上層（持高10～20石）および富農層（持高20石以上）に特有の住宅類型であった。

② 住宅の階層別事例

幕末期上斉原村の農民住宅には以上のような階層構造が把握できたのであるが、これを具体的事例によってみるといかようであったのであろうか。「建物台帳」に記載された農民住宅で、ほぼ幕末期の原型をとどめている4事例と、同帳には記されていないが「母屋のみ」住宅は赤和瀬部落に1事例残存していたのでこれを考察に加えた。

A 下層住宅の事例

(a) 岩太郎の場合（建棟「母屋」のみ、建坪18.75坪、持高不明）（写真4-5-1）

梁行2間、桁行6間で奥行2.5間、間口7間とした非常に小規模な住宅である。中央で2分して北が土間部分、南が上げ床の部分となっていて、上げ床部分は裏通りに納戸があるものの物置程度のものであり、実際の居住部分は「デー」と「ザシキ」の2間だけである。

「デー」はおびき天井で床も設けられているが、「ザシキ」は天井もない。煮炊きはイロリで行われた。土間部分は、作業場としての「ニワ」が広くとられ、「マヤ」は1つである。風呂場は入口の横に、便所は「マヤ」の前に簡単なものがつくられている。東側は障子が入っているが他の3方は壁でぬりこめられ、ひさしのない48°という急傾斜の軒が深くたれているため、内部は非常に暗い。

凡例
 シフマイ
 障子
 フスマ
 マイ
 戸
 板
 土
 壁

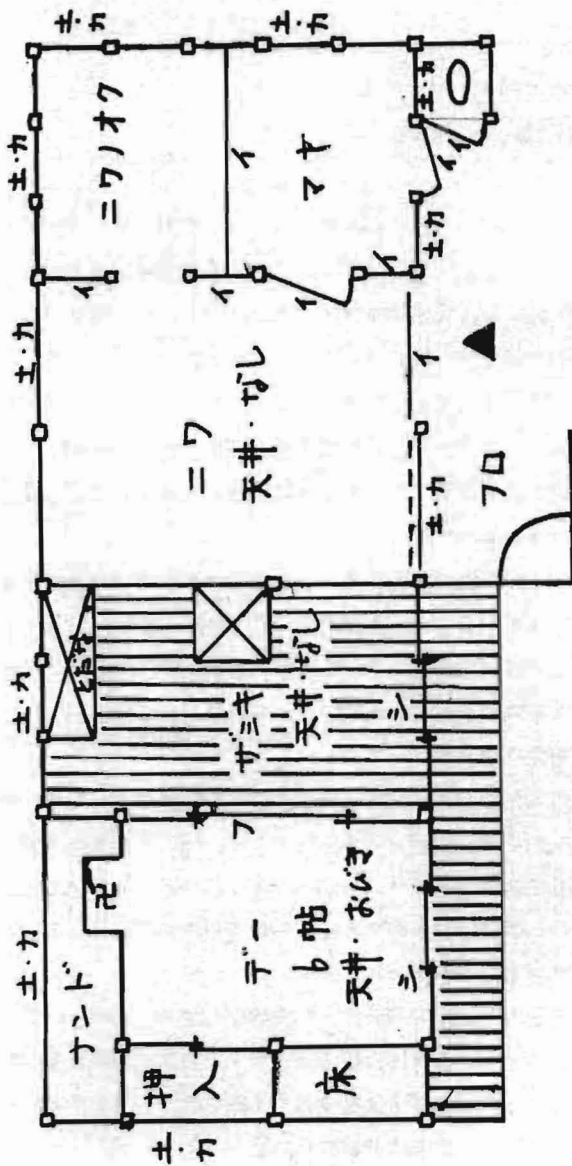


図 4-5-3 事例 (a) 平面図

全体的にみて、居住部分は2間だけで、裏通りに納戸ができてはいるが家庭生活専用の裏通りができたとはいいがたく、「広間型変型」といえる。

B 中層住宅の事例

(b) 清蔵の場合（建棟「母屋」・「長屋」，建坪35.27坪，持高4斗2升）

写真4-5-4からもわかるように、現在は蔵をも持っているが、この蔵は当時の戸主清蔵が建てたものである。しかしながら、明治19年の「建物台帳」には「長屋持」として記されており、明治19年以降に建てられたものと考えられる。

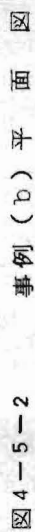
母屋は梁行3間、桁行6間で、「3・6型」の典型的な事例といえる。事例a)と比べると奥行が35間に拡大され、裏通りに家族生活専用の間ができたという点で発展がみられる。若夫婦の寝室である「ナンド」には、北側に明かり窓が設けられ、わずかながら通風採光が計られるようになった。また、裏を小川が流れていることもあって井戸が作られ、そこにも明かり窓ががついている。表通りの「デー」は事例a)と、ほとんど変わらないが、天井は「ナンド」とともにサオブチ天井である。「ナンド」と「デー」との間は壁で仕切られて行き来できないようになっている。「ザシキ」は天井はなく、床はムシロを敷いていた。イロりの回りで食事をし、図4-2-7のようにすわる場所も決まっていた。「ヨコザ」には戸主がすわり、「ケンザ」に主婦、「シモザ」に若夫婦がすわるようになっていた。

母屋の半分を占める広い土間部分をみると、「マヤ」が2つにふえ「マヤ」の前にはワラ打ち石が据えられており、「ニワ」は「カドヤ」とともに作業場となっていた。「ニワ」には天井はなかったが、「マヤ」の上には板を並べて薪を収納しておくようになっていた。母屋の西と東は大壁でふさがれていた。風呂場は入口の横に、便所は「マヤ」の横に設けられ、事例a)と異なって、風呂場は土壁で仕切られていた。

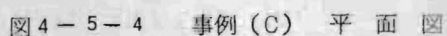
(c) 金蔵の場合（建棟「母屋」・「長屋」2，建坪33.48坪，持高5石3斗6升）

母屋は事例b)よりやや大きくなって梁行は3間、桁行7間である。裏通りは依然として「ナンド」に明かり窓があるだけで、生活空間として決して快適なものであったとはいえない。「ナンド」と「ザシキ」には根太天井が張られ、天井の上が中二階のような形になっていて当時そこでどぶろくを造っていたとのことである。南側には約4.5間の縁がつけられていた。「デー」にある押入はもみを入れておくために使用され、床はあるものの天井はなくいまだ迎客用施設というに足るほどの特別な施設はみられない。

土間部分も事例b)とほとんど変わりなく、「マヤ」も2つであるが、ただ「ニワノオク」では前戸主房五郎が木地の仕事をしていた。風呂場というものはなく入口の横に据え風呂を置いてあるだけで、便所も「カドヤ」の一角に設けられていた。



✓
4
+



C 上層住宅の事例

(a) 長蔵の場合（建棟「母屋」・「長屋」・「土蔵」，建坪42.23坪，持高2石2斗9升）

この事例は，建棟や建坪の割に持高が低いが，建てた時点では，持高はもっと高かったのではないかと考えられる。というのは，この2石2斗9升という数字は明治8年のものであり，これといった副業もないのに，蔵を建てるとなると，このぐらゐの持高の階層ではできないことだからである。

母屋は梁行4間，桁行7間で，北に約半間の下屋を出して奥行を4.5間にしている。事例(c)より発展した点として，まず第一に，「ナンド」の北側に2間のぬれ縁と1.5間の障子がついて，通風採光にいいその向上がみられるということである。そして，「ナンド」にも押込が設けられるようになって家族生活部分としての機能も十分果たせるようになった。また，「マヤ」は3間×2間と大きくなり，その境には棒を渡して「マヤ」を3つに区分している。「マヤ」の正面には馬の守護神であるサル神を祭っていた。「ニワノオク」は板張りの床をあげて，ミソなどを収納していた。事例(c)と同様，風呂場はなく据え風呂が入口の横に置かれていただけであった。

事例(a)(b)(c)は赤和瀬部落に残っているもので，この事例(d)は天王部落に現存するものであり，イロリの座名が違っている。戸主のすわる「ヨコザ」の右は主婦の座であることは変わらないが，呼び方が「ナカエ」となっており，「ヨコザ」の左は「タテザ」となっている。また，屋根替えの慣行については，赤和瀬では講組や常会単位で手伝うようになっているが天王にはカヤ講のようなものは存在せず，共有のカヤ場から個々にカヤを刈って帰り，屋根替えをする者は足りない分を他の者から買い，親戚の者を頼んだりして屋根替えをした。

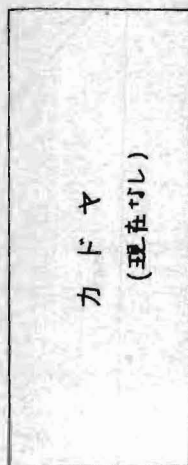
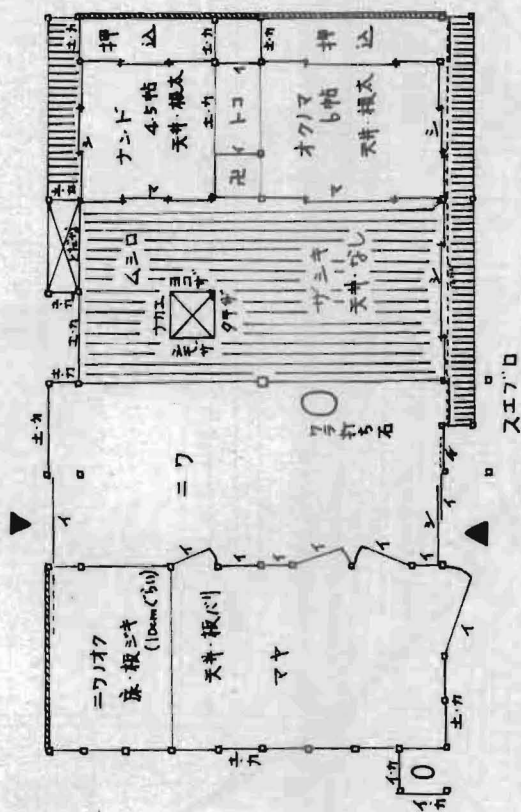
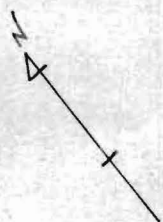
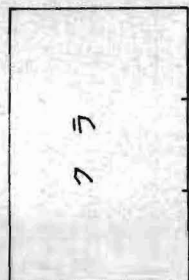
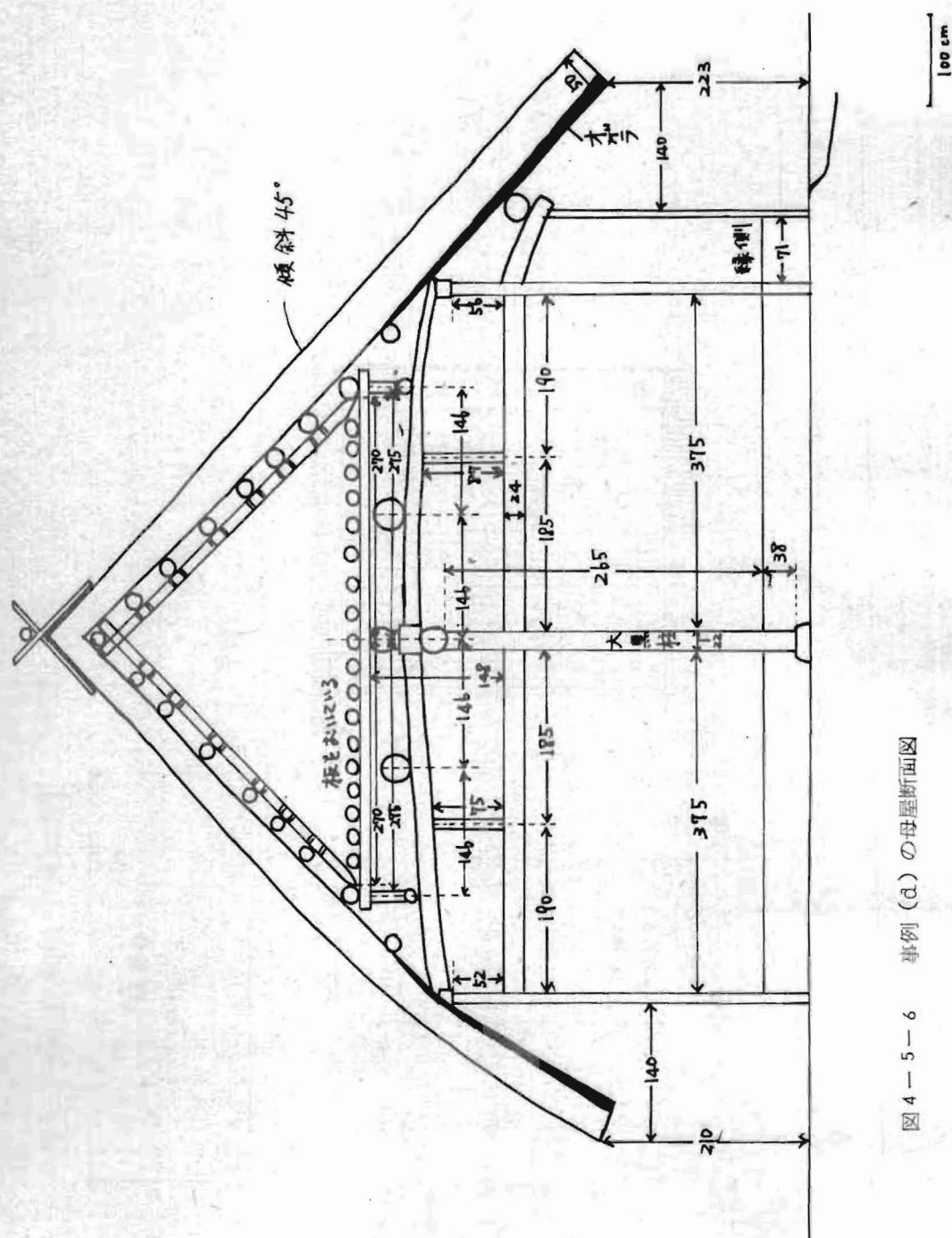


図 4-5-5 事例 (d) 平面図



(e) 竹治郎の場合（建棟「母屋」・「長屋」・「土蔵」2，建坪94.4坪，持高36石3斗7升）

この事例は，上斉原村の中でもっとも大きな規模のもので，付属建棟ではいわゆる「2・3の蔵」（2間×3間の蔵）を2つ持っており，そのうち味噌蔵の方は現存しない。

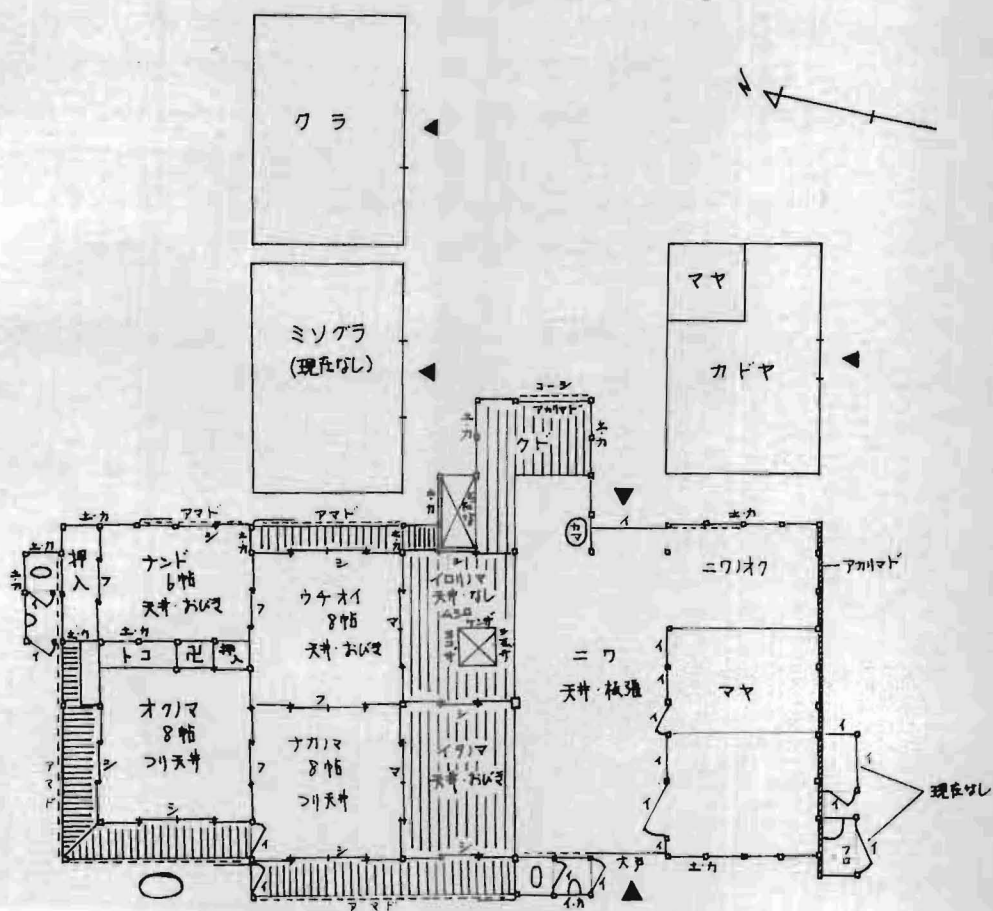


図4-5-7 事例(e) 平面図

また、屋敷全体の外観も整い、母屋の構造においては表通りが本格的な迎客構造を備えたものとなり、裏通りも家族生活の場として申し分のない充実した構造をもつようになった。

まず、屋根には棟飾りの箱棟をあげ、破風口にも妻飾りをほどこしている。母屋は梁行4間、桁行9.5間で、表通りには訪問者の身分、階層に応じて使いわける出入口が設けられ、神主、坊主は直接「オクノマ」に出入するようになっており、一般の者は「ニワ」口の大戸から出入していた。客座敷としての「オクノマ」は書院造りの形式を踏んで作られ、本床と付書院を設けていた。そして、「オクノマ」に廻り縁がめぐらされるとともに上便所という迎客専用の設備が整えられていた。

また、裏通りについては、「ウチオイ」から「イロリノマ」にかけて2.5間の縁がつけられ、「ナンド」にも一間の障子がいって開放度は全面開放に近い。「ニワ」の奥には3坪の「クド」が設けられていて、北側には一間の明かり窓がついている。「クド」にはカマが置かれているが、これは飼料をつくるためのものであり、一般の煮炊きはイロリで行われた。「イロリノマ」と「イタイマ」との境は、ほぼ創建当時から障子で仕切られていた。

天井は「イロリノマ」以外はすべて張られており、「オクノマ」と「ナカノマ」はつり天井であった。土間の部分の天井は板張りで、わらなどを収納していた。

注1 藤沢晋・中野美智子「近世後期農民住宅の階層構造」，岡山大学教育学部「研究集録」31号，昭和46年発行所収。

(加 藤 百合子)



写真 4-5-1 事例(a)の正面
急傾斜で底のない屋根が深く垂れ下がっている。



写真 4-5-2 事例(a)の入口
入口の左は風呂場である、当時は雨戸はなかった。



写真 4-5-3
事例(a)の「ザシキ」
3方が土壁で塗りこめられているため内部は暗い。奥に見えているのは「ニワノオク」である。



写真 4-5-4 事例(b)の正面
右手の蔵は情蔵が建てたものである。「カドヤ」は現在建て直されている。



写真 4-5-5
事例(b)の入口
1間幅の大戸がつけられている。



写真 4-5-6
事例(c)の正面
当時は、庇はつけられていなかった。手前は「カドヤ」である。



写真 4-5-7

事例(c)の側面
側面と裏通りの開放度はまだ低い。



写真 4-5-8

事例(c)の「カドヤ」
右半分が隠居部屋になっていた。



写真 4-5-9

事例(c)の梁組
「ニワ」の部分からみた上屋梁
である。



写真 4-5-10

事例(c)の「デー」
現在フスマになっている部分は、当
時板壁であった。



写真 4-5-11

事例(d)の正面



写真 4-5-12

事例(d)の側面
「カドヤ」は建て直されたもの
である。



写真 4-5-13

事例(d)の入口
入口には、1間の障子戸と、半間の板戸がはいっている。



写真 4-5-14

事例(d)の「ナンド」
2間のぬれ縁と1.5間の障子を設けることによって、裏通りの開放度がいっそう高くなった。



写真 4-5-15

事例(d)の「ニワノオク」
10cm程度、板張りの床をあげている。



写真 4-5-16

事例(d)の「マヤ」
中央の右側の柱にサル神を祭っている。



写真 4-5-17

事例(d)の「ザシキ」
天井はない。左に見えるのはとだなである。その奥は「ナンド」で、「ザシキ」とは舞良戸で仕切っている。



写真 4-5-18

事例(d)のイロリ



写真 4-5-19
事例(d)の小屋組
梁の上にサスをのせている



写真 4-5-20
事例(d)の小屋組



写真 4-5-21
事例(e)の正面
棟には箱棟を上げている。



写真 4-5-22
事例(e)の側面
上便所を設けておりその
右に廻り縁がみえる。現
在はガラス戸を入れてい
る。



写真 4-5-23
事例(e)の表通り
現在、コウ葺のオダレをトタン板に
変えている。右が「ナカノマ」、左
が「オクノマ」である。



写真4-5-24

事例(e)の「オクノマ」
本床と付書院が設けられて、
本格的な迎客構造となっ
ている。



写真4-5-25

事例(e)の「ウチオイ」と「ナンド」
右が「ウチオイ」で2.5間の縁がつけら
れている。左に見えるのが「ナンド」で、
裏通りの開放度はより高くなっている。



写真4-5-26

事例(e)の土蔵
いわゆる「2・3の蔵」で
ある。

6 山地産業

(1) タタラ製鉄

(i) 鑪吹製鉄業の概要

タタラなる言葉は、天明4(1784)年に伯耆国日野郡鉄師下原重仲が著わした『鉄山秘書』(注1)によると、多多良・鑪・高殿・踏鞴の4字をあて、通例送風装置・製鉄場の建物・作業場全体などを意味し(注2)、鑪吹製鉄業とは古来の砂鉄製錬による製鉄法をいい、砂鉄を炭火で熔融して銑・鋳を製し、さらに大鍛冶屋で鍛錬して鍊鉄とし、刀・甲冑・諸農具・鋳物・鍋釜の原料となす産業であり、明治中期に至るまで鉄の生産は殆んど鑪吹製鉄法によるものであった。『鉄山秘書』によると鉄産出国として、播磨・但馬・美作・因幡・伯耆・備中・備後・出雲・石見・安芸をあげ、中国山脈一帯が主要な鉄産地となっている。中国山脈周辺の土壌は、花崗岩・閃緑岩・安山岩の風化したもので、その中に多量でしかも良質の砂鉄を含有している。一般に山蔭側は黒雲母花崗岩から生じた「真砂」(注3)を原料として銑を製する銑押法で、山陽側は花崗閃緑岩から生じた「赤目」(注4)を原料として銑を製する銑押法である。

図4-6-1 江戸時代鉄山稼行地帯



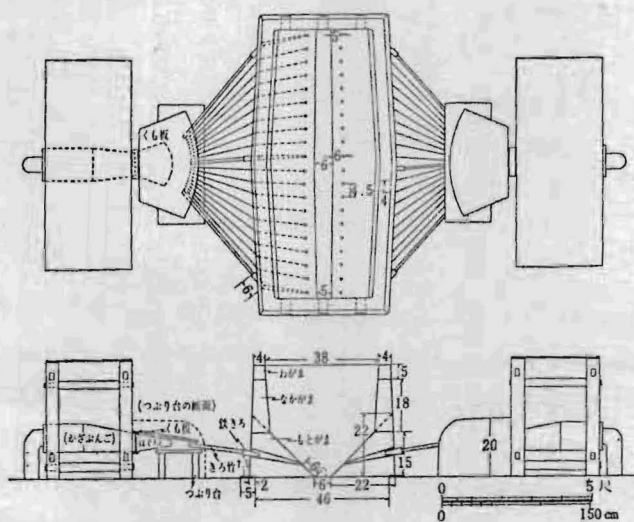
「中国山脈の鉄」より引用

そこで鑪吹製鉄業の立地条件を考えると、前掲の『鉄山秘書』に、「凡鉄山ハ、深山ノ奥、幽谷ノ側ニ鑪場所ヲ働職故ニ、土地ノ見立専一也。涌出ル鉄モ、皆其所ニテハ不捌、京師近辺迄モ運送シテ売代替エル物故、諸国通路、運賃、駄賃又ハ米穀之駄賃直段、取越ノ積り、又鉄砂取場之遠近、炭薪之截賃、米塗土ノ有無、山木之善悪ヲ能々見計と引合可然場所ナラハ、多多良ヲ可打立也。」とあり、また俚言にも「砂鉄七里に木炭三里」とあるように、砂鉄・元釜土の採取、木炭生産の山林、米の入手と確保、諸荷物の運送と駄賃などが重要な立地条件と

なっている。したがって、高殿近辺の木を伐り尽して木炭供給が困難となれば他の山林豊富な適地を求めて作業場を移転するという産業的特性があり、近世期になると山陽南半部の鑪吹稼行地は減少し、北部中国山脈周辺の山林地帯に重点が移行した。また上斎原村内においても、人形仙、中津河、豊ヶ谷、遠藤と各所で平均10ヶ年ほど鑪吹を操業すると他所へ移転していった。

次に鑪吹製鉄業の技術的側面として、生産工程を向井義郎氏著『中国山脈の鉄』（注5）を参考にして説明すると、その生産工程は(1)砂鉄採取（鉄穴流し）、(2)木炭生産、(3)銑や銼を生産する鑪、(4)鍛谷、の4段階に大別され、その経営は一種のマニファクチャ形態をとったといわれる。製鉄作業の中核である鑪は、高温保持の必要から鑪底にあたる場所を地下10尺、広さ5間4方に掘下げ、床焼きをし湧水排出口を設けるとともに底や側面を石・砂利・粘土で固め、さらに大量の薪材を焚いて乾燥させる本床作りを終えて粘土で鑪体を築造する。鑪の大きさは銼押で長さ8～9尺余、幅3尺余、高さ3～4尺の長方形で内部断面は凹の形をなす。この鑪の両側に大鑪を据え、キロ（木呂）という竹製送風管を片側に20本位ずつ鑪壁の下部に通して送風し、砂鉄と木炭を交互に投入し、1200℃以上の高温を保持し砂鉄を熔融する。1作業期間（これを1代と呼ぶ）は、銼押が3日間銑押は4日間の昼夜連続操業を普通とし、1代の操業に使用する砂鉄の量は銼、銑押ともに、大体3,000～4,000貫（11,250～15,000kg）、木炭もほぼ同量を使って約1,000貫内外の銼または銑を産出し、1代終れば鑪体を壊して新たに築造し直し、灰木を焚いて乾燥させた後、次の操業に入った。したがって、鑪の年間操業回数は50～60代を普通としたといわれる

図4-6-2 土 炉 図



石塚尊俊著『鑪と鍛谷』P132より引用

(四) 上斎原村における鉄山業と存在意義

上斎原村における鉄山業の起源については、それを明確に示す史料が残存せず、ただ「鉄山高有無書上帳」(注6)の末文に「今般鉄山高之義御尋被仰付承知奉畏候、此段先年慶長六(1601)丑年以前、備前国宇喜多中納言様御領分之節者鉄山高と唱候義茂御座候様申伝候へ共証拠＝相成候様成古書類無御座、右年中已来者永荒高と相唱候得共先年鉄山高申者、大高之内＝相籠居申候義と奉存候、(以下略)」とあり、『総合地方史大年表』によると「天正13(1585)年は春羽柴秀吉、宇喜多氏と毛利氏との領界を決定し宇喜多秀家をして美作備前両国および備中国東半を領せしむ、(『備前軍記』)」であることから、史料にあらわれる鉄山起源としては天正年間が最古であると考えられるが、伝承であり推測の域を出ない。また、「鉄山高取調書上帳」(注7)によると、

「鉄山御検地慶長九年九月御改

一 高六拾貳石三升貳合 斎原村

七石四斗貳升四合

下斎原村宝永五子年畝名寄帳之内

拾四石貳斗八升八合(注8)

上斎原村寛文九酉年地坪帳之内田畑

小以 貳拾壹石七斗壹升貳合(注9)

右者寛文上斎地坪宝永下斎名寄両村古帳面之内、鉄山場所＝可相当字取調書抜申候

(中略)

寛文九地坪帳之内 西々条郡上斎原村

反別 壹町八畝廿四歩

合 高 拾四石貳斗八升八合

但 七十五筆 田畠共

(以下略)

とあり、慶長8(1603)年に森忠政が美作国18万6,500石に封ぜられた翌年9月に慶長の鉄山検地が実施され、斎原村鉄山高62石3升2合となっている。したがって、慶長年間以前に何らかの形態で鉄山業が稼行されていたであろうことが推測される。次に、「宝永暦下斎原名寄帳、寛文暦上斎原地坪帳両村古帳之内鉄山抜書」(注10)により、「上斎原村寛文曆地坪帳之内鉄山分抜書」の75筆分田畑を整理すると表4-6-1のようになり所在場所、つまり字名としては鉄山茶山、猪の山鉄山、いの坂山鉄山、林ノ下、観音堂鉄山跡、鉄山ハリ木山などがあり、またその他に、

「鉄山やしき

一 中畑 貳畝廿四歩 高三斗七升七合

式 作兵衛

やしき同所

一 上畑 壹畝三步 高壹斗六升五合

壱 喜兵衛

やしき同所

一 上畑 三畝三步 高四斗六升五合

壱 源三郎

やしき同所

一 上畑 三畝六歩 高四斗八升

壱 作兵衛 』

とあり鉄山屋敷の記載もみられ、寛文9（1669）年に字として定着するほど鉄山業が盛んに営まれていたものと考えられる。

表4-6-1 上斎原村寛文曆地坪帳之内鉄山分

	畝	歩	高
下 田	6 畝	3 歩	石 0.7 7 3
上 畑	5 0 畝	8 歩	2.4 6 0
中 畑	1 1 畝	1 2 歩	1.5 3 3
下 畑	4 0 畝	1 9 歩	4.4 2 8
計	1 町	8 畝 1 2 歩	1 4.1 9 4

文献上では、元禄年間の編といわれる『作州記』には、「元禄十（1697）、丑1年当時上才原と羽出村に鉄山あり」と記されている。史料上で鉄山名・鉄山稼人が確認できるのは、

「一 松平越後守様御領知之節、宝永元申（1704）年と正徳五未（1715）年迄、千間原平城山（現奥津町千軒か）之内并本谷筋ニ而塩津屋善兵衛、増田屋又左衛門与申もの鉄山相稼御運上羽出村と取立相納候段（中略）鉄山式々所有之、壱ヶ所者高田屋七左衛門与申者相稼申候、勿論御運上之儀茂上斎原村と相納正徳五年の小書付ニ銀三百五拾目塩津屋と銀取候与申儀有之候間

（以下略）（注11） 』

「松平越後守様御領知之節、宝永元申年と正徳五未年迄人形仙ニ而久世屋平兵衛、梶梗屋孫八与申者鉄山相稼御運上上斎原村と取立相納候段（以下略）（注12） 』

であり、宝永・正徳年間に上斎原村人形仙、羽出村千間原で久世屋平兵衛、塩津屋善兵衛が鉄

山稼を行なっていたことが判明し、鉄山稼を許可されるにあたって宝永元年に久世屋平兵衛、請人桔梗屋孫八の両名が御郡代所に先納金三百匁を上納している。

「一 於上齋原村鉄山被仰下候者、先納金三百匁差上可申旨四月奉願候処、願之通被仰付難有奉存候 (以下略) (注13)」

またこの人形仙・千間原両鉄山からの運上銀は、『津山藩日記』によると

「正徳四年十二月二十日

覚

一 上齋原人形仙鉄山

御運上銀五貫拾六匁五分

来未より不納

一 羽出村千間原鉄山

御運上銀拾貫九百七拾匁

来未より不納」

であり、両山べ15貫986匁5分の運上銀が津山藩に上納されている。

次に、鑛吹製鉄業の第1工程である砂鉄採取(鉄穴流し)は、「砂鉄採取之義者豫テ水路ヲ設ケ置キ、砂鉄含有之山口江流水導キ流水と俱ニ水路ヲ流下セシメ、以テ下部ノ洗採ニ構造シタル砂鉄溜池ニ止メ置キ、清洗シテ純然タル砂鉄ヲ採リ得ルノ法ニ有之、(以下略)(注14)」という方法によって行なわれ、現在でも上齋原村内速藤、人形仙などに水路(井手)跡が残存し、『明治21年調土地台帳下造帳』(注15)の中に、井手口・井手上、井手下・樋合など鉄穴流しに関係ある字名が見られ、鉄穴流しの面影を今に残すものである。

鉄穴流しによる砂鉄採取は、鉄分を含む濁水と莫大な土砂を流出するものであるから、下流の農作の害となり吉井川上流鉄山稼村々と下流農村地域の水請村々との利害が相対立し、しばしば鉄穴稼の禁止や制限の嘆願が行なわれた。この濁水問題によって史料上にあらわれる鉄山稼村数も年代が下るにつれて漸次減少していった。文政3(1820)年には、上齋原村・下齋原村・長藤村・奥津村・羽出村・同西谷・至孝農村・井坂村・養野村・西屋村・箱村・杉村・同坂手小原分べ14ヶ村であるが、天保5(1834)年になると上齋原村・下齋原村・長藤村・奥津村・同川西村・養野村・羽出村べ7ヶ村と鉄山稼村数は半減し、さらに中国山脈山



写真4-6-1 人形仙鉄穴場跡



写真4-6-2 人形仙鉄穴場より下方を望む
鉄穴流しによる土砂の堆積か?

間部奥深く入り込んでいっていることがわかる。これに対し下流農村地域の水請村々とは表4-6-2に示したような吉井川流域で津山に至るまでの川筋村々々33ヶ村である。

表4-6-2 文政～天保年間の鉄山稼村の推移と水請村

鉄 山 稼 村		水 請 村	
文政3(1820)年	天保5(1834)年	天 保 5 (1 8 3 4) 年	
上斎原村 箱 村	上斎原村	中谷村下分 原 村	中 嶋 村 小 桁 村
下斎原村 杉 村	下斎原村	黒 木 村 薪森原村	暮 田 村 金 屋 村
長 藤 村 同坂手小原分	長 藤 村	女 原 村 真加部村	古 城 村 (西北条郡)
奥 津 村	奥 津 村	河 内 村 宗 枝 村	同村東分 小田中村
羽 出 村	同川西村	久田上原村 古 川 村	一 方 村 同村之内
同 西 谷	養 野 村	久田下原村 吉 原 村	北 村 新 田 分
至孝農村	羽 出 村	入 村 神 戸 村	井 口 村
井 坂 村		同村下分 院 庄 村	大 谷 村
養 野 村		山 城 村 二 宮 村	横 山 村
西 屋 村		下 原 村 (久米南条郡)	八 出 村
〆 14ヶ村	〆 7ヶ村	〆 33ヶ村	

「差上申再熟談済口 證文之事」 文政3年(田淵仁亀夫氏所蔵文書)
 依拠史料 「差上申再熟談議定証文」 天保5年(")

- また、上記の鉄山稼村々と水請村々との間では鉄山稼に関する議定証文を取交わしている。

「 差上申熟談議定 證文」

一 上斎原村外拾三ヶ村鉄山稼之義文政十三年寅より已迄三ヶ年限相稼
 右年限相立候後決而相濁申間敷議定之旨川筋水受村々百姓願出、稼方
 於村々ニ者年季明ニ候得共無余義訳茂有之、当又去己年秋より当年春
 迄鉄山壱ヶ処ニて再試相稼候処、勿論濁水ニも無之ニ付今般中庄屋野
 村保田伴吉立入、再熟談取_吸議定左之通

一 鉄山壱ヶ所ニ限候事

一 当年秋より来ル午年春迄九拾貳ヶ年

右年限中秋彼岸明より春彼岸明迄相稼

右年限相立候後相濁申間敷事

但し文政十三寅年八月議定之通、格別濃濁之節水受村々々地元

村へ及引合候間稼方ニおいても精々心を用取締付可申事

一 鉄砂一件ニ付諸入用之義、先議定之通不残稼方より差出可申事

- 一 鉄山出入諸荷物運送入并山方之者^附分柔和ニ相心得候様、稼方^と急度
申付一同相慎可申事

右議定之趣稼方^と稼人江申聞心得違無之様取斗之申、前条之通双方納
得熟談内済仕候間右之趣御聞濟被為成下候ハ、^と一同難有仕合ニ存候、此
段宜被仰上可被下候以上

天保五申午年九月

稼方村々

先年調印之通

川筋村々

右同断

」(注16)



写真4-6-3 鉄山稼議定証文 天保5(1834)年
(上齋原村田淵仁亀夫氏所蔵)

上記の議定証文の内容を要約すると次のようになる。

- (1) 鉄山数の制限
- (2) 鉄山稼の稼行年季の規定
- (3) 鉄穴稼行期間を農閑期の秋彼岸明から春彼岸明までに限定
- (4) 濁水問題一件に関する請入用費を稼方村が負担すること

さらに「再熟談議定書之事」(注17)の中に、「一鉄砂取之儀者例年秋彼岸^と翌春彼岸迄之間相稼其余決而相稼申間舗、且年限之儀者当辰秋^と来ル寅春迄中十ケ年季ニ相定、并手当料先銀札式拾貫目書面之水請村々江稼村々^と致出銀可申候、(以下略)」また、「熟談議定証文之事」(注18)には「尤濁水為手当共六ケ村辻江銀札式拾五貫目稼方^と村々江相渡可申事」とあり、鉄山稼村々は吉井川下流水請村々に対して銀札20~25貫目を支払っていることが判明する。

前掲の議定證文要約(4)の鉄山一件補償については、「乍恐以書付奉願上候」(注19)に水請村々の者200人ほどが年季明になっても濁水が続くので各々かけや(掛矢)、槌、斧、木切等を持って山内へ罷越、鉄穴場や鑪小屋を打砕くという事件の記載があり、この一件の諸入用費は、「鉄砂一件川筋引合中入用帳」(注20)で

「惣合 六貫六百拾五匁八分

三貫八百目 鉄山方と幸左衛門

請取

内 貳貫四百目 鉄山方と源次郎

請取

残 四百拾五匁八分不足

内 百三拾八匁六分 奥津村受

二百七拾七匁貳分 上才原受」

となっており、鉄砂濁水一件についての請入用は議定證文通り大部分を鉄山方が負担している。

前掲の議定證文要約(3)に関しても、「差上申御交證文之事」(注21)の中に、「先般鉄穴口御見分之上稼方日割ヲ以御取極、明六ツ時と暮六ツ時限之鉄穴流相稼可申、尤夜流者勿論鉄砂駄賃持之外者堅銘々請所たり共休日之鉄穴場江出入之儀堅御指留メ被仰付、前段之趣嚴重相守可申旨一同承知奉畏候、(以下略)」とあり、秋彼岸から春彼岸までの鉄穴稼行期間の制限とともに、さらに鉄穴稼日数と明六ツ時から暮六ツ時までの時間制限も行なわれ、休日の鉄穴場への出入も嚴重に禁止されるという状態であったようである。

なお、鉄穴稼が下流地域に及ぼす影響として船稼に関する新規の故障申立という注目すべき記載がある。

「此度稼方水請村共双方議定熟談相成申候、然ル処外村々前者無之候得共中谷村下分之義者船稼有之、前年秋彼岸井堰明之砌川筋堀立候処濁水出候ニ付人夫手間相増候、為手伝三拾人夫賃銀八拾目ツツ当 卯と稼中年々手伝として六月中ニ稼人と相渡可申候、(以下略)(注22)」

近世における吉井川上流の高瀬舟航行については、『岡山の交通』(注23)によれば、「吉井川本流筋舟路の最上流地点は、鏡野町湯指河岸であり、津山一湯指間13Kmに舟路が開かれ、時に通航の途絶もあったが近代にはいっても通航が行なわれた」のであり、鏡野町湯指河岸は上記の文書の中谷村下分にあたり、鉄山稼人はその船持と議定書を交わし毎年鉄山稼濁水による川筋堀人夫賃銀80目を支払う旨が約定されている。

次に製鉄作業の中核をなす鑪と鍛冶であるが、この作業工程を詳細に示す史料はなく、「鉄一切開合セ大概覚書」(注24)に

「一 小鉄(砂鉄)百貫目吹候而づく三拾貫目程有

一 づく四拾貫目をかち壱軒江渡シ一日ニ付小割三拾貫目程有」

とあるだけで、上斎原村周辺での鑪・鍛冶は山陰地方と比較して小規模であったことが推察さ

れる。では、近世から近代にかけての西々条郡での鉄山分布についてみると、表4-3-3および図4-6-3のようであり、史料から集計可能な文政～天保年間の各鉄山の産鉄額は表4-6-4である。この表を分析すると、近世後期天保年間にこの地方において鉄山業が最も隆盛し、中でも金吉山の産鉄高は他の鉄山を寄せつけない。ここで豊ヶ谷金吉山の鉄山規模を「寛保二年西々条郡養野村・奥津村・下斎原村・上斎原村鉄山聞合セ書上帳」（注25）より、上斎原村といが谷と申山の分を抜書すると

「西々条郡上斎原村

といが谷と申山

一 壱ヶ所

鉄山元 兵庫車屋重次郎

手代 利兵エ

同 次兵エ

此山ハ元来速藤と申所ニ居申、夫沼ノ山と申所江参、夫々只今此といが谷之東申年々当戌迄三年仕候

山子人数 扶持人 六拾四人

日 雇 五拾人

此山小屋数 四拾貳軒

かち職場 三軒

右場所々津山迄路法八里

此かんな場

同村平作原と申山

人数 拾人 才領 甚助

同村ごころと申山

人数 三人 才領 三エ門

同村ほうそうた山と申山

人数 拾四人 才領 善助

同村杉小屋と申山

人数 拾貳人 才領 藤兵エ

メ 三拾九人



写真4-6-4 金吉山鉄受取帳
天保9(1838)年
(上斎原村 田淵仁亀氏所蔵)

とあり、この鉄山経営者は兵庫車屋重次郎という者であり、元文5年(1740)より始業している。また、この豊ヶ谷鉄山は鍛冶屋3軒、鉄穴場4ヶ所をも同時に付設し、完全なマニュファクチュア形態をとり、山子総人数は64人(妻・子供など家族員は含まないと思われる)山内専属の鉄穴師39人、それに村方労働者と考えられる日雇50人を加えると150人を越すという1村落に相当する山内の規模を誇っている。

図 4 - 6 - 3 上斎原村鉄山分布図

(注) 上斎原村教育委員会の鉄山跡調査図により作成した

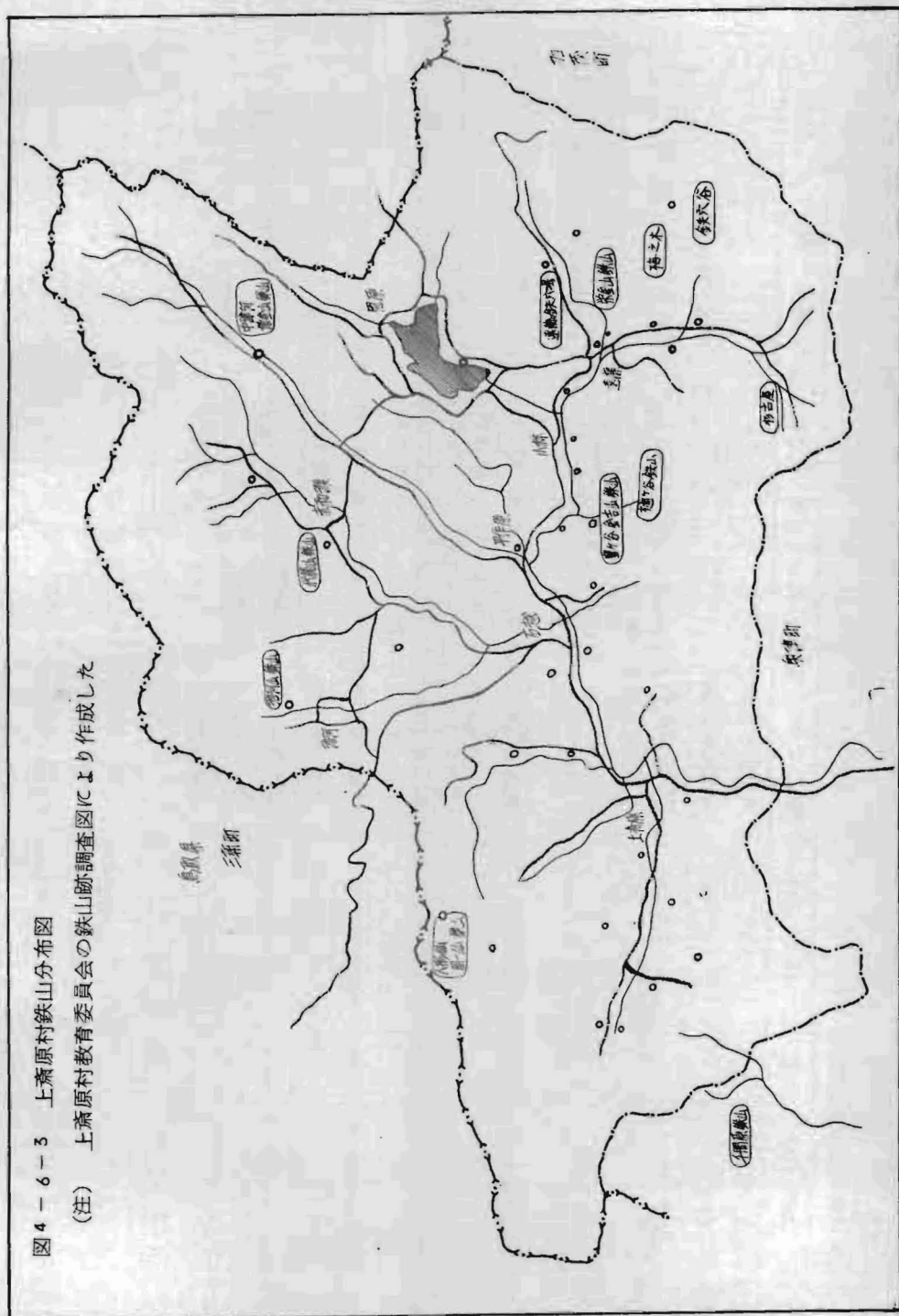


表 4-6-3 西々条郡鉄山分布表

稼 行 年 代	鉄 山 名	鉄 山 稼 人	所 在 村	依 拠 史 料
宝永元年～正徳5年 (1704) (1715)	人形仙鉄山	久世屋平兵衛 請人持便屋孫八	上 齋 原 村	「津山藩日記」
”	千間原鉄山	塩津屋善兵衛 請人田中屋孫三兵衛	羽 出 村	
宝 永 年 間	まつ山鉄山		下 齋 原 村	「宝永曆下齋原名寄帳、寛政曆上齋原地坪帳両村古帳ノ内鉄山抜書」文政8年
”	三つこ山鉄山		”	
元文3(1738)年始業	和泉権現山	備前国但馬権右衛門	養 野 村	「西々条郡鉄山聞合セ書上帳」 寛保2(1742)年
”	みつこ原と申山 鉄 穴 場	備中国大阪屋六郎左衛門	下 齋 原 村	
	仁王山と申山	才領 但馬屋半兵衛	下 齋 原 村	
	原口と申山	才領 長左衛門	長 藤 村	
	大かやと申山	才領 半兵衛	下 齋 原 村	
元文4年より始業	おろと申山	元大阪助松屋六郎左衛門 津山元魚町黒坂屋大平次	奥津川東村	
	といが谷と申山 鉄 穴 場	兵庫車屋重次郎	上 齋 原 村	
	平作原と申山	才領 甚助		
	ごどろと申山	才領 三衛門		
	怪うそりた山と申山	才領 善助		
	杉小屋と申山	才領 藤兵衛		

稼 行 年 代	鉄 山 名	鉄 山 稼 人	所 在 村	依 拠 史 料
文政6(1823)年 天保14~弘化4年 (1843)(1847)	新 古 屋	津山堺町 稲実屋儀七郎	羽 出 村	「乍恐御答奉申上候」
文政6年~同8年 天保2年~同3年 (1832)	小 泉 山		上 齋 原 村	「小泉山小割鉄請払帳」
天保2年~同10年 明治元年~同30年 (1868)	豊ヶ谷金吉山	川 島 平 蔵	上 齋 原 村	「小嶺治郎平手記」 「上齋原村誌史料」藤木莊江著 「鉄山為替御米小附帳」
天保8年~同15年 弘化3年~同4年 弘化8年 明治20年	喜 路 山		上 齋 原 村	「喜路山鉄請払帳」 「鉄山為替御米小附帳」
天保10年~同15年	代 統 山	稲実屋儀七郎	上 齋 原 村	「代統山小割鉄請払帳」 「鉄山為替御米小附帳」
天保10年~弘化3年	赤 和 瀬 山		上 齋 原 村	「小嶺治郎平手記」 「上齋原村誌史料」
天保12年~同14年 弘化3年~同4年 嘉永4年~同5年 (1851)	栄 杉 山		上 齋 原 村	「栄杉山小割鉄請払帳」 「鉄山為替御米小附帳」
天保13年 安永3(1774)年	杉 小 屋	吉野屋十左衛門	上 齋 原 村	「鉄山為替御米小附帳」 「再建立勘化之序」

嘉永元(1848)年		稲実屋故六郎	上 齋 原 村	「作恐以書付奉願上候」
嘉永5年~文久元年	中津河・増金山		上 齋 原 村	「小椋治郎平手記」 「上齋原村誌史料」
慶応3(1867)年 ~明治21年	人形仙国一仙	泉 英 吉	上 齋 原 村	「鉄山為替御米小附帳」 「小椋治郎平手記」
明治4年始業	輪 南 原		上 齋 原 村	「小椋治郎平手記」 「上齋原村誌史料」
明治11年~同22年	池 河 山		上 齋 原 村	
明治21年~大正12年	遠 藤 栄 金 山		上 齋 原 村	
	坊 主 原	佐 藤 光 五 郎	上 齋 原 村	
	梅 の 木		上 齋 原 村	

(注) 浜田由作氏卒業論文・田淵重久氏卒業論文を参照し、上齋原村三船統昌氏所蔵文書・田淵仁亀夫氏所蔵文書に依拠し、一部修正・補足して作成した。



写真4-6-4 人形仙の礎跡、右方の1本杉の下に37霊供養塔がある。

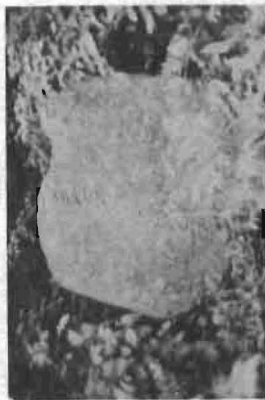


写真4-6-5 37霊供養塔
明治12年7月~8月にかけてコレラ伝染病のため鉄山労働者37人が死亡したことが記してある。

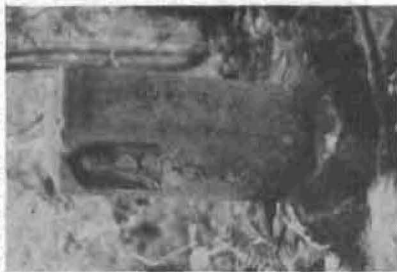


写真4-6-6 供養塔の後方の林の中にある文政期の墓

表4-6-4 文政・天保年間における鉄生産高

(単位：貫)

年代 \ 鉄山名	小 泉 山	金 吉 山	喜 路 山	代 続 山	栄 杉 山	各年生産高
文政6(1823)年	11,186					11,186
” 7	15,540					15,540
” 8	19,460					19,460
天保2(1831)年	18,158	31,934				50,092
3	20,650	26,628				47,278
4						
5		29,876				29,876
6		19,460				19,460
7		16,212				16,212
8			9,842			9,842
9		27,146	2,800			29,946
10		14,490	2,086	14,966		31,542
11					7,616	7,616
12			6,370	16,730		23,100
13				7,476	8,722	16,198
14				8,652	5,250	13,902
15			3,290			3,290
弘化3(1846)年			2,982			2,982
各鉄山生産高	84,994	165,746	27,370	47,824	21,588	347,522

(注) 田淵重久氏卒業論文「鉄の生産と流通」に依拠し、1束＝14貫で算出した数字である。

史料：各年代各鉄山の「小割請取帳」

(田淵仁亀夫氏所蔵文書)



写真4-6-7 美作地方最後の鉄山稼行
地遠藤の遠景

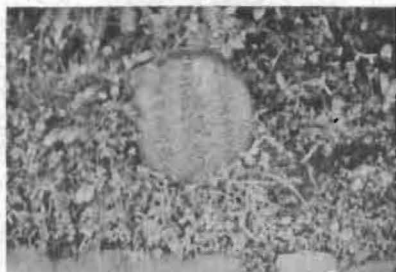


写真4-6-8 遠藤への入口にある馬
頭観音



写真4-6-9 遠藤の鑪跡 左方の堂は
金屋子神を祭ったもので前方の草む
らが銚を冷却した池の跡である。



写真4-6-10 鑪の守護神である金屋
子神を祭る堂の内部手前に銚が置い
てある。



写真4-6-11 遠藤の鍛冶屋跡
鑪跡のすぐ前方の丘の上に位
置し、坂には「カナクソ」が
ころがっている。

上齋原村における鉄山業の経営形態は、史料の上では「当町稻実屋義七郎名目ニ而、当御銀札場と御鉄山御稼ニ相成」(注26)、「一 鉄山御稼之儀、稻実屋儀七郎稼御名目ニ候得共軍意御上様御稼頭然之儀、一同鹿略之心得仕間鋪候^変」(注27)と示され、「御鉄山御稼」「御上様御稼頭然之儀」とあるように藩営鉄山であったと考えられる。『苫田郡誌』の中にも、「採鉄の盛なりしは徳川末期にして、当時坊主原・金吉・人形仙等は津山藩の直轄に属し、支配の役人を置きて之を経営せしめたり」とあるが、宗森英之氏は「低生産力地帯に属する藩においては、鉄山経営を自己の支配下におくか否かは、時の藩財政を大きく左右するものであり、(中略)天保期には鉄山に関する役職は、郡代の下におかれ『鉄山掛り』と称し、その下に大庄屋の内で『鉄山懸り大庄屋』が設置されている。藩営鉄山は津山藩の場合、直接藩が具体的経営を采配するのではなく、御手山引受人という形で鉄山師に稼行させた模様である」(注28)と指摘されている。この点について上齋原村の史料で検討すると、

「一 同年(文政七年)十一月廿一日、御勘定奉行御月番松平山郡守様江正平御召出之上、御下代宮田喜平治殿御立会ニ而以来鉄山掛用達申付候、右一条ニ付用并相勘可申候旨御口達ニ而被仰付候」(注29)

とあるように、津山戸川町綿屋正平が鉄山掛用達という役職に任命されている。また、「熟談議定証文之事」(注30)の中にも、「此度御用達津山菊井京右衛門、中庄屋野村保田市右衛門、同断目木村美見住左衛門立入熟談取^変議定左之通、(以下略)」とあり、菊井京右衛門以下3名も御用達の役職についている。以上のことから上齋原村の鉄山経営の形態は、津山藩営鉄山であり天領となっても「預り」という形で経営は津山藩に委任されていた。つまり、鉄山の事務的管理は「鉄山掛用達」が行ない、実質的経営は宝永・正徳年間に久世屋平兵衛、元文・保年間に兵庫車屋重次郎、さらに文政・天保年間に稻実屋儀七郎などが鉄山稼人として鉄山業に従事し多額の運上銀を藩に上納し、藩はその鉄山業に対し御林山の使用許可や鉄山労働者の飯米の確保にあたっては為替米制度(後述)によって便宜を図るという保護・育成を行なったと考えられる。

三船家文書の元文元(1736)年以降の免定から鑪運上銀・小割鍛冶運上銀・炭焼運上銀などの鉄山関係の諸運上銀と冥加銀の推移をみたのが表4-6-5であり、天保年間の鉄山柴地料とその主要内容をまとめたのが表5-3-6である、文政・天保・万延年間の議定証文では鉄山は2ヶ所と限定されており、近世後期鉄山2ヶ所につき運上銀1貫330目が賦課されたと考えられる。また運上銀の上納方法は、「連藤鍛冶屋義定之^変」(注31)によると、

「一 御運上銀之儀者壱ヶ年分銀貳貫五百目宛相定メ申候、内壱貫貳百五十拾目四月残り壱貫貳百五十拾目九月兩度ニ御上納可被成候事」

とあり、春と秋の二期にわけて上納されている。